

三田市

三 田 城 跡 Ⅱ

兵庫県立有馬高等学校校舎建設工事等に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

三田市

三 田 城 跡 Ⅱ

兵庫県立有馬高等学校校舎建設工事等に伴う発掘調査報告書

平成21(2009)年3月

兵庫県教育委員会



調査地点遠景（南東上空から：平成10年12月23日撮影）



調査区全景航空写真（上が西：平成10年12月23日撮影）



139



143



145



184



137



140



138



128



19

例　　言

1. 本書は三田市に所在する三田城跡および古城遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。調査年度が異なる調査成果を掲載しているため、特に平成17年度調査について、各図版の名称に実施年度を付加している。
2. 発掘調査は、平成10年度については兵庫県立有馬高等学校校舎建設工事に伴い兵庫県教育委員会事務局学事課の依頼で、平成17年度についてはブル改築事業に伴い兵庫県教育委員会事務局施設室の依頼を受けて実施した。
3. 整理作業については兵庫県教育委員会事務局財務課の依頼を受けて、平成19・20年度に兵庫県立考古博物館において実施した。
4. 遺物写真の撮影は、株式会社タニグチ・フォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において実施した。
5. 出土遺物のうち、磁器および施釉陶器の一部については、株式会社文化財サービスに写真撮影と図化の一部を委託した。
6. 本書の各遺構図面で使用している方位は座標北を示し、水準は東京湾平均水準（T.P.）を使用した。なお、座標値については、調査終了後、日本測地系から世界測地系への切り替えが行われたが、日本測地系のまま掲載している。
7. 本書で使用した地図は下記のとおりである。

第3図 周辺遺跡分布図 国土地理院発行1/25,000地形図「三田」

8. 本書の執筆は、調査担当者である鐵英記と上田健太郎が分担して行い、詳細は目次に記している。ただし、出土陶器の観察については、岡田章一の手を煩わせた。編集は、柏原美音の補助を得て鐵が行った。
9. 調査・整理にあたっては下記の方々および機関のご協力・ご指導をいただいた。記して謝意を表します。（順不同、敬称略）

高島信之 中井秀樹 山崎敏昭 長谷川眞 松岡千寿 三田市教育委員会

凡　　例

遺構

本書での遺構名は遺構種類ごとに以下の略号を用いる。

SK：土坑 SD：溝 SE：井戸

また、土層の色名表記については『新版 標準土色帖』を用いている。

遺物

土器－土器の断面は、弥生土器・土師器は白抜き、須恵器は黒塗り、陶器・磁器は網掛けである。

瓦－他の遺物とは、番号の前にTをつけて区別している。

石器・石製品－他の遺物とは、番号の前にSをつけて区別している。

金属製品－他の遺物とは、番号の前にMをつけて区別している。

目 次

第1章 調査の経緯と経過.....	1 (鐵)
第1節 調査に至る経緯	
第2節 発掘調査の経過	
第3節 整理作業の経過	
第2章 遺跡の位置と環境.....	3 (鐵)
第1節 遺跡の位置	
第2節 歴史的環境	
第3章 調査の成果.....	7
第1節 平成10年度調査の遺構と遺物.....	7 (鐵)
第2節 平成17年度調査の遺構と遺物.....	18 (上田)
第4章 まとめ.....	20 (鐵)
報告書抄録.....	36

卷首図版目次

卷首図版1 調査地点遠景（南東上空から：平成10年12月23日撮影）	
／調査区全景航空写真（上が西：平成10年12月23日撮影）	
卷首図版2 出土陶磁器	

挿図目次

第1図 調査区配置図.....	2
第2図 遺跡の位置.....	3
第3図 周辺遺跡分布図.....	5

表 目 次

周辺遺跡一覧表.....	4
出土陶磁器観察表(1)～(9).....	22～30
出土瓦観察表(1)～(3).....	31～33
出土石器・石製品観察表.....	34
出土金属器観察表.....	34
平成17年度調査 出土遺物観察表.....	35

図 版 目 次

- 図版1 調査区 全体図・断面図
図版2 A地区 遺構図(1)
図版3 A地区 遺構図(2)
図版4 A地区 下層遺構図 B地区 遺構図(1)
図版5 B地区 遺構図(2)
図版6 B地区 遺構図(3)
図版7 出土遺物1 (陶磁器1)
図版8 出土遺物2 (陶磁器2)
図版9 出土遺物3 (陶磁器3)
図版10 出土遺物4 (陶磁器4)
図版11 出土遺物5 (陶磁器5)
図版12 出土遺物6 (陶磁器6)
図版13 出土遺物7 (陶磁器7)
図版14 出土遺物8 (陶磁器8)
図版15 出土遺物9 (陶磁器9)
図版16 出土遺物10 (陶磁器10)
図版17 出土遺物11 (陶磁器11)
図版18 出土遺物12 (陶磁器12)
図版19 出土遺物13 (陶磁器13)
図版20 出土遺物14 (陶磁器14)
図版21 出土遺物15 (陶磁器15)
図版22 出土遺物16 (陶磁器16)
図版23 出土遺物17 (軒丸瓦1)
図版24 出土遺物18 (軒丸瓦2)
図版25 出土遺物19 (軒棟瓦・軒平瓦1)
図版26 出土遺物20 (軒棟瓦・軒平瓦2)
図版27 出土遺物21 (軒棟瓦・軒平瓦3)
図版28 出土遺物22 (丸瓦1)
図版29 出土遺物23 (丸瓦2)
図版30 出土遺物24 (丸瓦3)
図版31 出土遺物25 (丸瓦4)
図版32 出土遺物26 (棟瓦・平瓦1)
図版33 出土遺物27 (棟瓦・平瓦2)
図版34 出土遺物28 (棟瓦・平瓦3)
図版35 出土遺物29 (道具瓦・他)
図版36 出土遺物30 (石器)
図版37 出土遺物31 (石製品1)

- 図版38 出土遺物32（石製品2）
 図版39 出土遺物33（石製品3）
 図版40 出土遺物34（石製品4）
 図版41 出土遺物35（金属製品）
 図版42 平成17年度 調査区平面図
 図版43 平成17年度 調査区北壁・東壁 土層断面図
 図版44 平成17年度 土坑 平面図・土層断面図
 図版45 平成17年度 出土遺物

写 真 図 版 目 次

- 写真図版1 調査区全景 西から／調査区全景 東から
 写真図版2 A地区全景 南西から／B地区全景 北から
 写真図版3 A地区SD101・SE102全景 南東から／A地区SE102 西から
 写真図版4 A地区SD101断面 南から(1)／A地区SD101断面 南から(2)
 写真図版5 A地区SK101 南から／A地区SK102 東から／A地区SK104 南から
 写真図版6 A地区SK107 南から／A地区SK119 南から／A地区SE201 西から
 写真図版7 B地区SK114 南東から／B地区SK116 東から／B地区SE101 南から
 写真図版8 A地区SD101 土師器
 写真図版9 A地区SD101 土師器・須恵器
 写真図版10 A地区SD101 無釉陶器
 写真図版11 A地区SD101 無釉陶器
 写真図版12 A地区SD101 無釉陶器・施釉陶器
 写真図版13 A地区SD101 施釉陶器
 写真図版14 A地区SD101 施釉陶器
 写真図版15 A地区SD101 施釉陶器
 写真図版16 A地区SD101 施釉陶器
 写真図版17 A地区SD101・他 陶磁器
 写真図版18 陶磁器
 写真図版19 陶磁器
 写真図版20 陶磁器・瓦
 写真図版21 瓦
 写真図版22 瓦
 写真図版23 石器
 写真図版24 石製品
 写真図版25 金属製品
 写真図版26 平成17年度 遺構
 写真図版27 平成17年度 遺構・遺物

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

兵庫県教育委員会では平成10年度に県立有馬高等学校の校舎を新設することになった。有馬高等学校は周知の遺跡である「三田城跡・三田陣屋」の範囲内にあり、校舎新築予定地も城内（二の丸）および武家屋敷に当たる。このため、兵庫県教育委員会事務局学事課と埋蔵文化財調査事務所（当時）で協議を行い、確認調査を実施したところ、遺構・遺物の存在が認められたため、校舎建設部分について本発掘調査を行うこととなった。

また、平成17年度にはプール改築事業が行われることになり、事業地が三田城および古城遺跡の範囲に当たることから、兵庫県教育委員会事務局施設室と協議を行い、工事実施時に工事立会による埋蔵文化財調査を実施することになった。

第2節 発掘調査の経過

平成10年度および平成17年度に実施した調査の概要は以下のとおりである。

平成10年度

確認調査 遺跡調査番号 980108

調査担当者 鐘 英記 多賀茂治

調査期間 平成10年8月3日～4日

調査面積 40m²

事業予定地にトレンチを設定し、桶の埋設された土坑や近世の遺物を確認した。

本発掘調査 遺跡調査番号 980182

調査担当者 鐘 英記 服部 寛

調査期間 平成10年10月30日～平成11年1月13日

調査面積 635m²

確認調査の結果に基づいて、校舎建築範囲の本発掘調査を行う。江戸時代の土坑、堀跡、屋敷地の一部を確認したほか、一部で中世に遡る下層遺構を確認した。

平成17年度

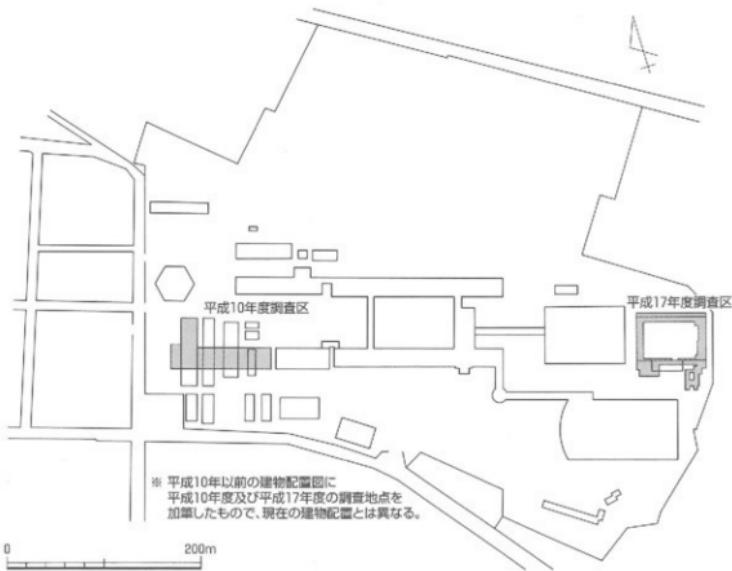
工事立会 遺跡調査番号 2005219

調査担当者 村上泰樹 深江英恵 上田健太郎

調査期間 平成18年1月11日～1月25日

調査面積 360m²

プール改築に伴って、外周部の地下遺構に影響を与える部分について、工事と同時並行で立会い調査を行い、弥生時代および近世の遺構と遺物を確認した。



第1図 調査区配置図

第3節 整理作業の経過

平成11年度

平成10年度の発掘調査時は、現地で遺物の洗浄を行えなかったため、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館において、遺物の洗浄およびネーミング作業を実施する。

平成19年度

兵庫県立考古博物館において遺物の接合・実測・図面整理を行う。

整理作業担当者 岡田章一 吉田優子 小野潤子 宮野正子 三好綾子 奥野政子

又江立子 嵐岡美見 小谷桂加 柏原美音 柏木明子

(金属器保存処理) 岡本一秀 栗山美奈 大前篤子 藤井光代

報告書担当者 鐘 英記

平成20年度

兵庫県立考古博物館において、遺物の実測・復元・写真撮影、報告書図版の作成・トレースを行うとともに、報告書の執筆・編集作業を行い、年度末に刊行する。

整理作業担当者 岡田章一 吉田優子 烏村順子 伊藤ミネ子 荒木由美子

荻野麻衣 谷脇里奈 吉村あけみ 柏原美音 柏木明子 古谷章子

(金属器保存処理) 岡本一秀 大前篤子 藤井光代 長瀬重美 江利耶子

報告書担当者 鐘 英記 上田健太郎

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置

遺跡の所在する兵庫県三田市は兵庫県南東部に位置し、市域は東西約20km、南北約18km、総面積210km²を測る。

地理的に見ると、丹波山地に源を発し大阪湾に流れ込む武庫川の中流域に広がる盆地地形である。南は六甲山系で両側され、北は多紀山系をはじめとする白亜紀後期から古第三紀に形成されたとされる山塊に囲まれる。盆地地形の両側には、神戸層群を基盤として最新世の段丘堆積物が覆う丘陵部が広がる。また、盆地の南部には丘陵が張り出す地狹部が存在し、その南側では長尾川、有野川流域に小低地が形成されている。

遺跡は三田盆地南部に広がる武庫川右岸の河岸段丘群の中に位置する天神台地に立地する。この河岸段丘面は北西に向かって丘陵地形が伸び、丘陵北側は武庫川の浸食作用によって比高差約20mの崖面となっている。河岸段丘上は平坦面が形成されており、現在は住宅地や耕作地が広がっており、南接する西山・屋敷町台地と合わせて、近世段階では陣屋・武家屋敷が営まれていた。



第2図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

現在、三田盆地における人類の生活史は後期旧石器時代にまで遡ることが明らかにされている。この時代の遺跡は、溝口遺跡や青野ダム遺跡群に見られるように、盆地北部の中位段丘上に限られているようである。

绳文時代の集落は中位段丘上から低地へと分布域を広げていく。宅原遺跡からは石器が出土し、対中遺跡では晩期の溝が確認されている。

弥生時代の集落は三輪・餅田遺跡が前期後半に出現することが知られて。三輪・餅田遺跡は三田盆地における中核的な集落の一つで、石製穀具の製作センターであったと考えられる。また、貴志遺跡、高次・北ノ垣内遺跡、対中遺跡でもこの時期の遺構・遺物が見つかっている。中期になると集落数も増加し、盆地各所に分布が広がる。中期前半では古城遺跡、塙田遺跡で集落が確認され、特に塙田遺跡は地狹部北側の三輪・餅田遺跡と並んで石製穀具の製作センターであったと考えられる。中期後半では扇状地に立地する遺跡として、下深田遺跡、貴志・樋戸遺跡等が新たに出現するとともに、盆地中央の丘陵においても平方遺跡、奈カリ与遺跡、西山遺跡等が営まれ始める。平方遺跡では住居跡から小銅鋸の鋤型が出土し、奈カリ与遺跡では30棟にのぼる竪穴住居跡や土器棺など多数の遺構が検出されている。

また、北神ニュータウン内 No.4地点遺跡では住居跡から鉄鎌・鉄斧が出土している。後期の遺跡は中期に営まれた遺跡が継続するとともに、盆地全体に広がり、遺跡数は一番多くなる。

古墳時代の集落は弥生時代の集落と重なる形で展開していく。前期から中期にかけては、奈良山古墳群の一部や北神ニュータウン内 No.9地点遺跡で小型の墳墓が見つかっているが、目立った古墳は現在のところ知られていない。また、集落についても貴志・下所遺跡や宅原遺跡で住居跡が確認されているものの、様相がはっきりしたものは少ない。後期に入ると貴志・穂戸遺跡や貴志・下所遺跡、桑原遺跡、高次・北ノ垣内遺跡といった低地部の遺跡と奈良山遺跡、平方遺跡、平方西遺跡などの丘陵上に立地する遺跡がある。また、末地区と平方西遺跡で須恵器の窯跡が見つかっている。古墳については、盆地中央部を見下ろす武庫川両岸の丘陵部に古墳群が密集して分布している。これらの古墳群では、横穴式石室と木棺直葬墳が多くを占めるが、奈カリ寺古墳、西山古墳群、青龍寺裏山古墳群等では横口式箱式石棺、横穴式木室、横口式石槨といった特異な主体部を採用するものもある。また、盆地内では10基程度の前方後円墳が確認されているが、複数の土坑墓を主体部とする西山6号墳と横穴式石室を二つ持つ上野ヶ原古墳を除けば未調査で、まだまだ不明な点が多い。

飛鳥時代～奈良時代の遺跡としては、盆地南部に有馬郡衙の比定地である宅原遺跡があり、「評」と書かれた墨書き土器や伎楽面などが出土している。また、宅原遺跡からは地狹部をはさんで北側に当たる台地上にあり、白鳳時代に創建されたと考えられる金心寺址廃寺の軒瓦は、奈良・本薬師寺東塔裏蔵用に焼造された瓦の系譜に連なるものが用いられている。また、金心寺址廃寺の周辺には屋敷町遺跡、西山遺跡群といった同時期の集落も展開しており、宅原遺跡から金心寺址廃寺周辺が古代有馬郡の中心と考えられる。この他にも貴志・下所遺跡では奈良時代後期のものと思われる「溝」銅印が出土し、奈良

周辺遺跡一覧表

番	遺跡名	時代	番	遺跡名	時代
1	三田城(三田藩陣屋)跡	奈良時代～近世	23	前中里城跡	中世
2	古墳遺跡	弥生時代～古墳時代・中世	24	福島・上能谷堀塁群	近世
3	大神遺跡	弥生～古墳時代、平安時代・中世～近世	25	大原・天神ノ尾城跡	中世～近世
4	池ノ首遺跡	奈良時代・中世～近世	26	川駿・竹ノ下遺跡	古代～中世
5	屋敷町遺跡	奈良時代～近世	27	茶臼山城跡	中世
6	大池ノ南遺跡	中世～近世	28	三輪上野窑跡	近世
7	西山・勞ノ原遺跡	古墳時代～中世	29	天狗ヶ鼻窑跡	近世
8	西山垣内遺跡	中世～近世	30	三輪明神窟跡	近世～近代
9	平家塙内遺跡	古墳時代・中世～近世	31	三輪・宮ノ越遺跡	弥生時代～古墳時代・中世～近世
10	南が丘打上り遺跡	中世	32	三輪・船田遺跡	弥生時代～古墳時代・中世
11	屋敷町西方守裏山窑跡	近代	33	三輪明神前窑跡	近世～近代
12	三田谷遺跡	中世	34	高次・北ノ垣内遺跡	弥生～古墳時代・平安時代・中世～近世
13	下深田・坂ノ下遺跡	弥生時代・中世～近世	35	下田中城跡	中世
14	川除遺跡	弥生時代～古墳時代・中世	36	対中塙跡	純文時代～中世
15	下深田遺跡	弥生時代・平安時代～中世	37	立石城跡	中世
16	下深田・城戸遺跡	弥生時代・平安時代～中世	38	丈ヶ岡城跡	中世
17	稻田城居館跡	中世～近世	39	沢ノ辻城跡	中世
18	貴志遺跡	弥生時代～近世	40	横山城跡	中世
19	貴志・穂戸遺跡	弥生時代～近世	41	喜田遺跡	弥生時代～中世
20	五良谷城跡	中世	42	北神 NT No.4遺跡	弥生時代
21	貴志・下所遺跡	古墳時代～近世	43	宅原遺跡群	弥生時代～中世
22	貴志居館跡	中世			



第3図 周辺遺跡分布図

山遺跡では鍛冶工房跡が見つかっている。そして、盆地北部の末地区を中心として、須恵器の15基程度の窯跡群が展開する。また、須恵器工人たちの集落と考えられる南台遺跡、溝ノ尾遺跡、乾遺跡等が見つかっている。これらの窯跡群は平安時代に入ると衰えてしまい、小規模な日常雑器を焼成する窯が数カ所残存するだけになる。

鎌倉時代から室町時代にかけては集落の再編が進む時期とされる。また、この頃には圃場の整備が進み条里制地割が完成したと考えられている。盆地内の各所に在地領主が定着することになり、南北朝期には郡内で大規模な合戦も行われた。南北朝期の終わり頃、赤松氏系の国人有馬氏が台頭する。当該期の状況は主に文献資料に基づくが、盆地北部の本荘地区では在地有力給入層の宅地跡と考えられる地蔵垣内遺跡、中筋遺跡があり、彼らの墓であると思われる亀が森墳墓もある。これらの集落では初期丹波焼の雑器類が出土し、藏骨器にも丹波焼が使われるなど、初期丹波焼の流通にこれら在地給入層が関わったことが考えられる。また、低地部や丘陵上にはこの時期のものと考えられる中世城館があり、国人有馬氏の城ではないかと考えられる。発掘調査された中尾城では、内部を機能的に区画した城の状況が確かめられたが、それ以外は内容が良くわからないものが多い。

室町時代末期、伊丹氏・池田氏を駆逐した荒木氏が有馬に侵攻し、三田市古城に築城し、はじめて城下町を整備する。後に、荒木氏が織田信長に背いた結果、有馬郡は羽柴秀吉をはじめとする信長麾下の諸将に攻略される。この際、付城として築かれたものに立石城などの諸城がある。荒木氏降伏後、しばらくは流動的に領主が代わっていたが、天正11（1583）年に山崎堅家が三田城に入り、有馬郡を領有する。この際、三田城は瓦葺の織豊系城郭として整備された。城内の調査では、一石五輪塔を積み上げた井戸、瓦葺建物、池泉等の山崎氏時代の遺構が確認されている。山崎氏に続き、短期間であるが有馬氏が三田城に入るが、その後福知山藩の預かり領としての期間が20年以上となり、三田城はかなり荒廃した状態であった。寛永10（1633）年に九鬼氏が入部すると、従来の三田城を古城とし、南の郭を陣屋として使用するようになる。以後、明治時代まで有馬郡は九鬼氏が支配することになる。

これまでの調査で、嘉永年間の建築と考えられる陣屋御館の建物群、台所竈跡群、池、元禄年間の絵図に記載された蔵などが検出されている。また、三田城時代の堀を埋め戻して作られた陣屋を囲む堀も見つかっている。近世初頭に整備された城下町は九鬼氏統治下においても踏襲され、屋敷町遺跡や西山遺跡群の調査で、三田青磁や丹波焼などの陶磁器、日常用具が出土し、当時の武家屋敷の変遷がうかがわれる。また、江戸時代の初めには、丹波焼生産の拡大により、盆地北部においても下相野窯跡をはじめとして丹波焼の窯が営まれるようになる。そして、江戸時代後期には肥前および京都からの技術導入により、三輪明神窯をはじめとする古三田焼・三田青磁の諸窯が築かれ、特に三田青磁は江戸・京都・大阪などの諸都市にまで流通していた。

参考文献

- 兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』（1983）
- 兵庫県教育委員会『対中』（1988）
- 兵庫県教育委員会『川除・藤ノ木遺跡』（1992）
- 兵庫県教育委員会『下相野窯址』（1992）
- 三田市教育委員会『屋敷町遺跡』（1995）
- 三田市史編さん専門委員『三田市史 第3巻 古代・中世資料』（1998）

第3章 調査の成果

第1節 平成10年度調査の遺構と遺物

平成10年度の調査は、校舎建設予定地を南北に縦断する擁壁の東側をA地区、西側をB地区とする地区割りを行った。

1. 基本層序

両地区とも地形の改変がかなり進んでおり、ほとんどの部分が人工的な堆積となっている。現地表の標高はA地区で約163m、B地区で約164mとなっており、擁壁をはさんで約1mの段差がある。

基盤となるのは黄褐色シルト混じり細砂層で、中世段階の遺構（下層遺構）はこの面で検出した。基盤層の上には近世から現代までの整地層が認められる。整地層は、現在のものを除いても、近世と思われるもの2層、近代と思われるもの1層の3層を認識した。近世の遺構（上層遺構）は主として近代のものと思われる整地層の下から掘り込まれていた。

2. 遺構

両地区合わせて、上層遺構面で土坑20基あまり、柱穴状遺構10基あまり、堀1条、溝3条、井戸2基を検出し、A地区的下層遺構面では土坑と井戸をそれぞれ1基と溝1条を検出した。

A地区の上層遺構

SK101（図版2：写真図版5）

調査区東側で検出した。平面形は南北164m、東西1.5mの歪な円形を呈し、検出面からの深さは約60cmである。下層には粗砂混じりのシルトが堆積し、上層は礫・瓦を多量に含む粗砂混じりシルトで埋められていた。

施釉陶器（94～96）、左棟瓦（T37）が出土しており、19世紀前半の遺構と考えられる。

SK103（図版2）

調査区東側で検出した。平面形は南北0.52m、東西1.1mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは約30cmである。下層は粘質シルト、上層は粘質シルト混じりの粗砂・礫で埋められていた。

SK104（図版2：写真図版5）

調査区東側の南壁際で検出した。平面形は南北1.32m、東西1.6mの歪んだ隅丸方形で、検出面からの深さは約50cmである。最初に細砂～粗砂混じりシルトで埋め、その上に整地土と考えられる細砂混じりシルトで埋めている。

無釉陶器の擂鉢（100）、丸瓦（T28）が出土している。19世紀代の遺構と考えられる。

SK105（図版2）

調査区東側の中央部で検出した。平面形は南北1.56m、東西1.4mの楕円形を呈し、検出面からの深さは56cmである。

SK107（図版2：写真図版6）

調査区中央部で検出した。平面形は南北1.86m、東西1.84mの隅丸方形で、検出面からの深さは約20cmである。底面南寄りに、直径78cm、厚さ4cmの桶底が残存している。礫を含む細砂混じりシルトで埋

められていた。

施釉陶器の壺（101）が出土している。19世紀前半の遺構と考えられる。

SK111（図版2）

調査区東端近くで検出した。平面形は南北1.36m、東西1mの隅丸台形で、検出面からの深さは26cmである。礫や粗砂が混じるシルトで埋められていた。

SK112（図版2）

調査区中央部の南端で検出した。平面形は南北0.96m、東西1.1m、検出面からの深さ30cmの歪んだ隅丸方形である。粗砂混じりシルト、礫混じりシルトで埋められていた。

軒平瓦（T18）が出土している。

SK102（図版3：写真図版5）

調査区北東隅で検出した。南北1.18m、東西1.36mの楕円形の土坑に、直径約1mの桶が据えられていた。検出面からの深さは約40cmである。下層には細砂～粗砂も堆積していたが、上層は瓦を多量に含む粘質シルト混じりの砂塵で埋められていた。

白磁紅皿（97）、施釉陶器の皿（98）と片口鉢（99）、丸瓦（T29）、棟瓦（T38）、道具瓦（T43）の他、傷みが著しい寛永通宝が出土している。19世紀前半の遺構と考えられる。

SK119（図版3：写真図版6）

調査区の中央付近で検出した。確認調査のトレーナーで南半分は失われていた。直径0.96mの土坑に、直径約80cmの桶が据えられていた。検出面からの深さは約30cmである。

銅製の簪（M4・M5）が出土している。

SK120（図版3）

調査区の南東隅で検出した。南端が調査区外に延びている。平面形は南北1.26m、東西1.48mの円形を呈し、検出面からの深さは約40cmである。粗砂混じりシルト、地山ブロック混じりシルトで埋められていた。

SK121（図版3）

調査区東側中央付近で検出した。平面形は南北0.92m、東西0.76mの歪な楕円形で、検出面からの深さは約20cmである。下層はシルト混じりの礫、上層は細砂～粗砂混じりシルトで埋められていた。

SE102（図版3：写真図版3）

調査区西端、SD101西側肩部で検出した素掘井戸である。南北2.9m、東西2mの範囲を一段掘り下げ、その中心付近に上端で南北1.3m、東西1.42mの範囲を掘り下げている。下底は検出できなかったが、西肩部からの深さは2.5m以上ある。

無釉陶器の壺（102）が出土している。

SD101（図版1：写真図版3・4）

調査区西端で、調査区西壁と平行するように検出した。東西幅約8.6mを測り、検出面からの深さは約2.7mである。埋土の堆積状況から、埋没と再掘削を繰り返していたことが考えられ、ある時期を境に再掘削されなくなり、耕作地として利用されたと思われる。

構築当初は箱組で、埋没・再掘削により片葉研堀になった時期もあると思われる。ただ、発掘調査時には埋没・再掘削が江戸時代の中で収まるものと考えたが、下層から出土した遺物にかなり新しいものが含まれているため、下層に堆積した腐植質土を多量に含む層を再掘削した時期は、近代以降にいずれ込

む可能性がある。

出土遺物は多く、陶磁器では土師器(1～25)、須恵器(26)、無釉陶器(27～34・36～44)、施釉陶器(35・45～88・174・176～178)、白磁(89～92・146)、青磁(137～145)、染付青磁(147～150)、染付磁器(151～172)、色絵磁器(173)、陶胎染付(175)がある。近世から近代のものが混在している。瓦類では軒丸瓦(T1～T5・T8・T9)、軒平瓦(T10～T16・T21～T23)、丸瓦(T24～T27・T33)、平瓦(T36)、左棟瓦(T39・T40)、道具瓦類(T42・T45・T46)が出土しているほか、金属製品として鎌(M1)、包丁(M2)、寛永通宝(M6・M7)、不明銅製品(M8)が出土している。

A地区の下層遺構

SK201 (図版4)

調査区東部の北側で検出した。平面形は南北約1.1m、東西約2mの楕円形で、検出面からの深さは10cm程度と浅いものである。

須恵器の碗(103・104)が出土している。12世紀後半～13世紀前半の遺構と考えられる。

SE201 (図版4：写真図版6)

一辺約1.2mで、検出面からの深さは80cm程度である。井戸枠は四隅に角材状の柱を立て、それを横棟で留めて枠を組み、周囲を縦板で覆う構造のものである。

土師器の小皿(105)・碗(106・107)が出土している。13世紀代の遺構と考えられる。

SD201 (図版4)

調査区東端で検出した東西方向の溝である。ほとんどが調査区外に延びる。幅3.8mで検出面からの深さは約1.4mを測る。底は平らで、断面は逆台形を呈し、いわゆる箱堀である。遺物は出土していないが、三田陣屋以前に遡る城館関連遺構である可能性が高い。

B地区の遺構

SK113 (図版5)

調査区中央で検出した。平面形は南北2.24m、東西2.54mの不定形で、検出面からの深さは約20cmである。下層は細砂～粗砂混じりシルト、上層は炭混じりの焼土で覆われていた。

土師器の小皿(108～111)・煮沸具(112)、無釉陶器の擂鉢(114)、施釉陶器の碗(113)・方形鉢(115)、染付磁器の碗(180)・皿(181)、丸瓦(T32)、平瓦(T41)が出土している。遺物には古いものも含まれるが、19世紀前半の遺構と思われる。

SK114 (図版5：写真図版7)

調査区中央で検出した。平面形は南北3.84m、東西4.84mの方形で、検出面からの深さは約20cmである。下層は細砂混じりシルトで埋まり、上層は炭混じりの焼土で覆われていた。土坑の中に人頭大の礫を「L」字状に配置する。

施釉陶器のミニチュア碗(116)・鉢(117)、無釉陶器の土錘(118)、土師質の壺壁と思われるもの、染付磁器の皿(182)が出土している。19世紀前半以降の遺構と思われる。

SK115 (図版5)

調査区南側で検出した。平面形は南北0.68m、東西0.76mの楕円形で、検出面からの深さは約40cmである。粗砂混じりシルトと地山ブロックで埋められていた。

SK116（図版6：写真図版7）

調査区中央で検出した。直径約1.3mの土坑に直径約1mの木桶が据えられていた。桶の周囲を地山ブロックが混じるシルトで埋め戻していた。桶の中は、下層にシルトが堆積した後、疊混じりのシルトで埋められていた。残存状況が悪く図化はできていないが、漆器碗2点が出土している。

SK117（図版6）

調査区中央西側コーナー部で検出した。北側半分が調査区外になる。直径約1.4mの土坑に直径約1.2mの木桶が据えられ、検出面からの深さは約20cmである。桶周辺には桶を埋めた時の埋土が見られるが、桶の中には焼土や炭を含むシルトが堆積していた。調査区断面を見ると、検出面より上には焼土・炭の堆積が見られるため、火災等の片付けによって埋められたと思われる。

SK122（図版6）

調査区南西隅で検出した。平面形は南北1.1m、東西1mの円形で、検出面からの深さは50cmである。埋土は下層が疊を含む粗砂混じりシルト、上層が粗砂混じりシルトである。

SE101（図版6：写真図版7）

調査区南東隅で検出した。南側をSD102に切られ、東側は擾乱で少し壊されている。平面形は南北約2.5m、東西約2.4mの歪な円形で、断面形はラッパ状を呈する素掘り井戸である。検出面から確認できた深さは約1.84mである。埋土は地山ブロックや疊を含む粗砂混じりシルトで構成され、意識的に埋め戻されたものと思われる。

土師器の煮沸具（124）、無釉陶器の擂鉢（125）、施釉陶器の皿（126～128）、染付磁器の皿（183）、軒丸瓦（T6）等が出土している。出土遺物から見ると造構の時期は17世紀前半（江戸時代前期）に遡ると思われ、SD102と有機的な関連があることも考えられる。

SD102（図版4）

調査区南東隅から、調査区南壁に沿って走る溝で、SE101の上面を切り、SD103～SD105の各溝に切られている。検出面からの深さは約30cmである。下層は粗砂混じりシルトが堆積しており、上層は地山ブロック混じりの腐植土で埋められていた。

施釉陶器の碗（120-122）、天目碗（121）・鉢（123）、軒平瓦（T20）、丸瓦（T30）、隅巴瓦（T44）が出土している。出土遺物から見ると、SE101と同じく17世紀前半（江戸時代前期）まで遡ると思われる。

SD103（図版4）

検出した長さが約1m、最大幅0.28mで、検出面からの深さは5cmを測る浅い溝で、SD102を切っている。

SD104（図版4）

検出した長さが約3.1m、最大幅0.55mで、検出面からの深さは18cmを測る溝で、埋土には拳大～人頭大の疊が含まれていた。

SD105（図版4）

検出した長さが約2.2m、最大幅0.4mで、検出面からの深さは1～4cmを測る浅い溝で、SD102を切り、SD104に切られる。

3. 遺物

遺物は各土坑やSD101をはじめとする堀や溝および井戸から出土している。その中で、SD101から出土したものが量的に多数を占めるため、特に陶磁器類に関しては遺構単位で記述し、遺構の記述とは異なるがSD101出土のものから始めることにする。また、瓦類・石器・石製品・金属製品については種別に記述する。

a) 陶磁器類

SD101出土遺物（図版7～16・19～22：写真図版8～17 1～92・137～178）

土師器

1～19は小皿である。うち、1～7はロクロ土師器で回転糸切痕を伴う明確な底部を持つ。8～19は非ロクロ土師器である。これらの土師器小皿は製作手法に関係なく、燈芯痕跡や煤の付着が認められるものと認められないものがあり、前者は灯明皿、後者は食器としての用途が伺われる。11は底部に人面を墨で描いたものである。

20～23は煮沸具である。いわゆる焙烙形のもので、20・21は体部がやや深くなるもの、22は体部が浅くなるものである。23は体部が浅く、直角気味に屈曲して底部にいたる。18世紀から19世紀にかけてのものと考えられる。

24は土師質の焼塙壺である。型作り成形で、刻印はない。

25は土師質の焼物である。残存している部分は隅丸の角と側縁の一部である。やや軟質で一部に赤色顔料状の物質が塗布される。鉄釉を塗布した素焼段階のものとも考えられる。隅丸長方形の鉢または皿状の器形と思われる。

須恵器

26は壺の口縁部である。口縁部が大きく開き、端部を垂下させる。古墳時代のものと思われる。

無釉陶器

27は水滴で底部には糸切痕跡が残る。28は壺あるいは壺利の破片である。底部を除き、鉄泥漿を施す。27と28は備前焼の可能性がある。

29は壺である。平底から斜めに立ち上がったのち、屈曲して内彎する体部に直立した頸部がつく。30は楕木鉢である。平底の中央に孔をうがち、水平に引き出した口縁端部をつまんで波状に加工している。31は鉢で、斜め上方に伸びる体部を持つ。外面に櫛描き沈線文を施す。32は桶で、斜め上方に伸びる体部を持つ。体部下位に凸巻を1条めぐらせる。33は火鉢である。内彎気味に立ち上がる体部を持ち、口縁端部は内傾する面を持つ。金属製火鉢の模倣品である可能性がある。29～33はいずれも丹波焼であると思われる。

34～40は丹波焼の播鉢である。35のみ外面に鉄粒をかけ流した施釉陶器である。34・35は体部が直線的に伸び、内面はヘラ描きの櫛目を施す。34は口縁端部も尖り、中世的な様相を示し、35は口縁部外面に沈線を施すとともに縫部が丸みを帯び、近世的な様相を示す。36・37は口縁部に強いナデを施し、櫛目が櫛描となる。38・39は口縁部に縫帶を作る。40は高台を体部下半に貼り付けている。34は16世紀後半、35は16世紀後半～17世紀前半、36・37が18世紀前半、38・39が18世紀後半、40が18世紀後半～19世紀前半のものと考えられる。

41・42は壺である。41は大きく外反する口縁部を持ち、42は内彎して端部を肥厚させる口縁部を持つ。

41は丹波焼の可能性があり、42は備前焼を模倣した丹波焼で17世紀半ば～後半のものと考えられる。

43・44は陶製の土管である。43は継ぎ手の受け部、44は継ぎ手の差し込み部である。43には外面に赤土部を塗布し、44は灰釉を施している。近代の丹波焼である。

施釉陶器

35・45～88・176～178は施釉陶器である。35については前項で述べた。45～49は碗である。45は鉄釉を掛けるもので丹波焼の可能性がある。46・48は灰釉あるいは透明釉を施し、瀬戸・美濃系のものと思われる。47は透明釉を施し、高台畳付の輪を搔き取っており、肥前系のものと思われる。49は内外面に白濁釉を施しており、萩焼の可能性がある。

50・52は皿である。50は外面に灰釉を施したもので、産地は不詳である。52は輪花状に仕上げた口縁を持ち、灰釉を施す。19世紀前半の丹波焼である。

51・53～68は鉢類である。51は外面を型押しにより整形したもので、灰釉を施す。19世紀の丹波焼で明治時代以降の可能性もある。53～55は内彌氣味に立ち上がる体部を持つ。55には片口がある。53は内面のみ、54・55は内外面に施釉する。19世紀前半の丹波焼である。56～61は体部が直線的に開く。口縁部の形態に変異があるほか、59のように片口を持つものもある。これらは19世紀のものと思われる。62は全面施釉された擂鉢である。63は擂鉢の形態をとりながらも擂目がない片口鉢で、内外面とも施釉されている。62・63とも近代以降の丹波焼と考えられる。

64～66は体部が垂直に立ち上がり、口縁部が水平に肥厚する桶である。64には網状の把手が付き、66にも同一個体と思われる破片に把手の痕跡がある。64・65は近世後半の丹波焼で、66は丹波焼の可能性がある。

67～78は壺である。67・68は体部下端が底部に向かって窄まる壺で、いずれも丹波焼である。67は外面に網目があり、近代まで下るものと思われる。69・70は口縁部が内彂するもの、71は口縁部内面に蓋受けを持つ。72～74は口縁端部が水平に肥厚する。これらは丹波焼で19世紀前半を中心とする時期のものと思われる。75～78は口縁部が玉縁状に肥厚するもので、産地は不明であり、近代以降のものと考えられる。

79～82は蓋である。79～81は壺の被せ蓋、82は土瓶の落とし蓋である。80は瀬戸・美濃系、81は丹波焼、82は京焼系である。

83は蓋付き鉢あるいは段重ねである。外面に灰釉を施す。瀬戸・美濃系で、19世紀前半以降のものと思われる。

84は香炉である。型打ち技法で成形し、口縁端部は内側に伸びる。外面から口縁部内面に栗釉を掛け、口縁部には鉄釉をさらに重ねている。体部内面は露胎で、丹波焼の可能性がある。

85は仏花器で、丹波焼の尊形花器と思われる。近代のものである。

86は丹波焼の壺で、鉄釉を施した後、灰釉を流し掛ける。18世紀中葉～後葉のものと思われる。

87は口縁部が受け口になった鉢である。京焼系のもので、明石・舞子産の可能性もある。

88は鉄製の羽釜を模倣した陶製の羽釜である。全面に鉄釉を施す。近世後半以降のものと思われる。

174は碗である。透明釉を施した後、外面に鉄釉で松葉文をあしらう。京・信楽あるいは肥前系京焼風陶器と思われ、19世紀前半のものである。175は陶胎染付の「くらわんか手」碗で、18世紀後半のものである。

176は京焼風の鉢で、内外面に透明釉を施し、鉄釉で草花文をあしらう。産地は不明だが、19世紀前

半以降のものと思われる。177は壺の蓋と思われ、上面に白濁釉を掛け、鉄釉と緑彩で芭蕉文を描く。京焼系である。178は小型の楕木鉢である。外面底部と内面下半は露胎で、他は緑釉を掛ける。外面に型押しで菱形文をあしらう。瀬戸・美濃系と思われ、19世紀前半以降のものと思われる。

磁器

89~92・137~173は磁器である。図版製作の都合により、報告番号が前後する。

89~92・146は白磁である。89~90は型作りの紅皿で、豊付けは露胎である。波佐見産で19世紀前半のものと思われる。91~92は皿である。91は肥前系で18世紀前半まで遡る可能性がある。92は産地不明である。146はロクロ成形後、型打ちにより菊花状につくる皿である。瀬戸・美濃系で19世紀前半のものと考えられる。

137~145は青磁である。137は碗で、内外面とも施釉し、高台疊付の脚は搔き取る。138は小鉢で、型抜き成形により傘状の口縁部を作る。内外面に施釉し、底部外面は露胎である。139は鉢で、内外面とも施釉し、高台疊付の脚は搔き取る。内外面に灰被りによる釉の潤りが認められる。137~139は三田青磁で19世紀前半のものである。140は香炉である。体部外面には型押しによる唐草文・草花文がある。内面は露胎で、外面の釉は灰被りにより白潤する。京焼系の青磁あるいは中国産青釉陶器の可能性がある。19世紀前半以降のものと思われる。141は皿である。見込み部に蛇目釉ハギがあり、高台外面は露胎である。142~143は三足皿である。142は内面に呉須で草花文を描く。底部外面中央部は青磁釉を施し、外周は青磁釉を搔き取った後、そこに鉄泥漿を塗布する。143は体部内面に型押しにより菊花文をあしらう。内外面とも施釉する。145は器面に細かい貫入のある盤である。いずれも肥前系で、141~143~145が18世紀代、142は初期伊万里で17世紀前半のものと思われる。144は型押しの輪花鉢で、クローム青磁で口縁部に飛び青磁風に鉄釉を施す。産地は不明で、近代以降のものと考えられる。

147~150は染付青磁である。147は杯、148~150は碗で、外面に青磁釉を施し、内面は呉須による文様を描いている。すべて肥前系で、18世紀代のものと考えられる。

151~172は染付磁器である。ほとんどが肥前系の製品で占められている。151は小碗で底部が厚い。瀬戸・美濃系の製品で19世紀前半のものと思われる。152は形態・施文とも端正な碗で、肥前系の京焼風磁器と思われる。153は底部器壁が厚い二重網目文の碗で18世紀代に収まると思われる。156の小碗、157~158の碗は波佐見産のいわゆる「くらわんか手」で18世紀後半のものと思われる。159は肥前系広東碗で18世紀後半~19世紀前半に位置付けられる。154~155の碗、160~161の杯は19世紀前半のものと思われる。

162は六角鉢で19世紀前半、163は蓋付き鉢で18世紀後半のものと考えられる。170は鉢の蓋で、短冊状のつまみを持つ。19世紀前半以降のものと思われる。

164~169は皿である。164は生掛けのため釉のりが悪く、虫食いが目立つ。初期伊万里で17世紀前半のものと思われる。165は明末から清初にかけての青花磁器写しと考えられるもので、三田焼の可能性があり、19世紀代と思われる。166は高台内に「大明年製」の銘を持つが、産地は不明である。167の輪花皿は底部外面に蛇目釉ハギがあり、肥前系で19世紀前半のものと思われる。168~169は酸化コバルトを用い、銅板転写により文様を施文するもので、近代以降のものと思われる。

171は「くらわんか手」の仏飯具で18世紀後半のものである。172は口縁部と底部を欠くものの、肥前系の壺で、いわゆる一輪挿しである。18世紀代のものと考えられる。

173は色絵磁器の得意である。産地は不明で、日章旗と旭日旗を組み合わせたデザインであることか

ら近代以降のものと思われる。

P03出土遺物（図版16）

93は施釉陶器の皿である。内外面とも白濁釉を施している。産地は不明で、近世のものと思われる。

SK101出土遺物（図版16：写真図版17 94～96）

94は施釉陶器の碗である。外面に薄い呉須で草花文を描く。肥前系の京焼風陶器で17世紀後半から18世紀前半のものと思われる。95は施釉陶器の壺である。内面に灰釉を施し、口縁端部を水平に肥厚させる。96は施釉陶器の鉢で、内面に灰釉、外面に赤土部を施す。95・96は丹波焼で19世紀前半のものと思われる。

SK102出土遺物（図版16：写真図版17 97～99）

97は白磁で、型作りの紅皿である。肥前系で19世紀前半のものと考えられる。98は施釉陶器の皿である。内外面とも灰釉を施す。京焼系であるが丹波焼の可能性もある。99は施釉陶器の片口鉢で、内面全体に灰釉を施す。丹波焼である。

SK104出土遺物（図版16）

100は無釉陶器の擂鉢である。高台を体部側面に貼り付けたもので、19世紀の丹波焼である。

SK107出土遺物（図版16：写真図版18）

101は施釉陶器の壺である。内面全体に灰釉を施す。外面には鉄鞋を全面に施した後、灰釉を柄杓掛けで雨だれ状に施釉する。19世紀前半の丹波焼である。

SE102出土遺物（図版16・22 102・179）

102は無釉陶器の壺である。底部に焼成後穿孔を施し、白色の自然釉が付着する。丹波焼で、椎木鉢に転用したものと思われる。

179は染付磁器の碗である。外面に呉須による界線が残る。肥前系で18世紀のものと思われる。

SK201出土遺物（図版17：写真図版18 103・104）

103は須恵器の椀の底部である。高台は比較的高く、丸みを帯びており9世紀後半のものと思われる。

104は回転糸切底を持つ須恵器の椀である。口縁部外面に重ね焼きの痕跡がある。12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

SE202出土遺物（図版17：写真図版18 105～107）

105～107は土師器である。いずれも回転ナデ成形で、小皿の105と椀の107には底部外面に回転糸切り痕跡が認められることから、極めて焼成状態の悪い須恵器の可能性もある。13世紀前半のものと思われる。

SK113出土遺物（図版17・22：写真図版18 108～115・180・181）

108～112は土師器である。108～111は非ロクロ成形の土師皿で、108を除いて煤が明瞭に付着しているため、灯明皿として使用されたと考えられる。112は底部型作りの「焰熔形」の煮沸具である。

113・115は施釉陶器、114は無釉陶器である。113は碗で内外面に灰釉を施す。京焼系陶器で19世紀前半のものと思われる。114は擂鉢で外面に赤土部を塗布する。18世紀後半～19世紀前半の丹波焼である。115は粘土板を貼り合わせて成形した方形の鉢である。外面に赤土部、内面に灰釉を塗布する。丹波焼の可能性がある。

180・181は染付磁器である。180は碗で、外面に呉須で松・笹文を施す。高台内に「大明□□」銘を持つ。肥前系で19世紀前半のものである。181は皿で、内面に崩れた草花文をあしらう。高台に多量の砂が付く。津州窯系の青花磁器で17世紀前半のものと思われる。

SK114出土遺物（図版17：写真図版18・19 116～119・182）

116・117は施釉陶器である。116はミニチュア碗で内外面に白濁釉を施す。玩具である可能性がある。117は京焼系陶器の鉢で、見込み部に蛇目釉ハギがある。19世紀前半以降のものと考えられる。

118は陶製の土錐である。丹波焼の可能性がある。119は圓化はしていないが、焼けた粘土塊で土師質である。竈の構造壁の可能性がある。

182は染付磁器の皿である。内面に淡い呉須で菊花文を施す。豊付に砂が付着し、初期伊万里と考えられる。17世紀前半のものと思われる。

SD102出土遺物（図版17：写真図版19 120～123）

120～123は施釉陶器である。120・122は碗で縮頬高台である。121は内反高台の天目碗である。123は圓化していないが、輪花状口縁と割り出しの低い高台を持つ皿で、内面に灰釉を施している。いずれも肥前系陶器（唐津焼）で、17世紀前半のものと思われる。

SE101出土遺物（図版18・22：写真図版19 124～128・183）

124は土師器の煮沸具である。「擂磨型」で16世紀後半のものと考えられる。

125は無釉陶器の擂鉢である。丹波焼で17世紀前半のものと考えられる。

126～128は施釉陶器の皿である。外面体部下半は露胎だが、そのほかは灰釉を施している。128には高台内側に墨書が認められる。また、圓化していないが127と同形同大の皿がもう1点出土している。いずれも肥前系陶器（唐津焼）で、17世紀初頭～前半のものと考えられる。

183は染付磁器の皿である。高台に砂粒が付着し、景德鎮産のものと考えられ、16世紀後半まで遡る。

包含層出土遺物（図版18・22：写真図版19 129～136・184・185）

129～131はA地区包含層、132～136・184・185はB地区包含層からの出土である。

129～131は東播系須恵器の碗で、12世紀後半～13世紀前半のものと考えられる。

132は非ロクロ成形の土師器皿である。133はロクロ成形の施釉陶器皿で、底部外面に糸切痕跡が認められる。煤の付着が明瞭で、灯明皿として使用されたと考えられる。

134～136は施釉陶器である。134は三日月高台の皿で、肥前系陶器（唐津焼）と考えられる。17世紀前半である。135は壺または徳利の頸部片で、外面に灰釉を施した後、白濁釉を掛ける。肥前系朝鮮唐津の可能性があり、17世紀前半のものと思われる。136は皿状を呈すると思われる底部に直立した体部が付き、膨らんで広がる口縁部は4箇所で輪花状にする。外面上半だけに灰釉を施釉する。形状・产地ともに不詳であるが、丹波焼の可能性がある。

184は青磁の方形鉢である。型抜き成形で、外面には型押しにより唐草文を施す。内外に青磁釉を掛ける。三田青磁で19世紀前半のものである。185は肥前系の染付磁器碗で、外面にコンニャク印判で模文を押す。高台内には崩れた「大明年製」銘がある。18世紀代のものと考えられる。

b) 瓦類

瓦類もその多くがSD101から出土したもので、種類としては軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦・棟瓦、その他がある。近世に属するものがほとんどだと考えられる。

軒丸瓦（図版23・24：写真図版20 T1～T9）

T1～T7は「三つ巴文+珠文」をあしらったものである。すべて左巻三つ巴文であるが、T6のように巴頭部が鉤状に尖るものもある。巴文と珠文の間には区画線がなくなっているが、巴の尾が長くなっている

区画線状になっている。残存状況が悪いため、珠文の配置状況については不明であるが、T2の場合は16個の珠文が配されている。丸瓦部については、T1に見られるように凹面に側縁と直交する鉄線切りや当て布の痕跡を残している。T8とT9については、瓦当の一部だけしか残っていないが、九曜文をあしらっていたものと思われる。

軒平瓦・軒棟瓦（図版25～27：写真図版20 T10～T23）

T10～T12は棟瓦に瓦当が付くもので、T13～T23は軒平瓦であると思われる。左右の脇区が広がり、内区文様部分はかなり狭くなっている。内区文様は中心飾りに葉付菊花（T10・T13）、三葉・五葉あるいは橘と思われるもの（T12・T14～T18）、丸に二つ引（T19）を用いたものがあり、両側に唐草文を施している。唐草文は内区が狭いことから二転・三転で終わる。唐草文の最後尾は渦状に巻き込んだ上で分岐するもの、單葉になるもの、双葉状に先端が分かれるものがあるが、いずれも簡略化されている。T14には「深田中鶴製」という製造元を示すと思われるスタンプがある。

丸瓦（図版28～31：写真図版20 T24～T34）

玉縁付のものばかりである。鉄線の痕跡は側縁に対して直交方向のものばかりで、玉縁部の凹面を中心いて布の痕跡が明瞭に残る。凹面の縁辺は面取りし、腹部凹面はヘラケズリを施しているものが多い。釘穴の確認できないものがほとんどだがT26には2箇所の釘穴が認められる。腹部凸面は最終的に磨いているものが多く、T31には縱方向のミガキが明瞭に残る。

平瓦・棟瓦（図版32～34：写真図版21 T35～T41）

側辺片側に屈曲部がないものを平瓦とし、あるものを棟瓦とした。棟瓦には棟がどちらの側辺に付くかで、右棟瓦・左棟瓦を区別した。ただし、全体が残っているものが少ない。T35は凹面に布痕跡、凸面に格子目タタキが認められる古代の瓦である。T36とT41は平瓦、T38が右棟瓦、T37・T39・T40が左棟瓦になる。上面・下面ともナデ調整で仕上げるものが多いが、左棟瓦は上面にミガキ調整を行うものもある。

道具瓦・他（図版35：写真図版21・22 T42～T46）

T42は左棟瓦で、袖垂れ部分にはヘラ書きによる唐草文を施している。T43は短冊状の形態を持つ瓦である。T44は瓦当状のものが剥離したように思われることから隅巴とした。T45は多数の円孔を穿つ板状の瓦製品である。T46は表面にヘラによる無数の短沈線を施し、内面はヘラケズリで仕上げている。全体の形は不明だが、鬼瓦の一種ではないかと思われる。

c) 石器・石製品（図版36～40：写真図版23・24）

S1は上面に溝状の削り込みを持つ石製品である。用途は不明であるが、削り込みがある面は磨れて平滑になっており、携帯用の硯ではないかと思われる。また、溝状の削り込みには排水用と思われる切れ目が付けられている。

S2とS3は砥石である。短冊状の形態を持ち、片側の先端を欠く。粒子の細かい岩石を使用しており、いわゆる仕上げ硯にあたると思われる。主たる使用面は中央が緩やかに凹んだ形状を持つ。ただし、側面や裏面も含めて砥石として利用されており、各面に磨り痕が認められる。以上の3点はすべてA地区SD101から出土した。

S4～S13は一石五輪塔である。すべて、A地区の下層遺構面を覆う整地層から出土している。3点を除いて、花崗岩を用いている。S4は幅が狭く、池輪が長く伸びる形式である。空輪、水輪の横断面

も円形に近い。いわゆる波豆石製である。S5も地輪の下部が欠損しているが、S4ほどではないにしても地輪が高い形式である。また、火輪軒部の下がりの表現が直線的で、空輪、風輪が扁平である。S6は火輪の軒高が高く、風輪との境界近くまで伸びる。S7は火輪が高くなり、風輪が扁平になっている。空輪は下部幅が狭まり、宝珠形を保つ。S8は風輪の上部幅と下部幅に明らかな差があり、組み合わせ式五輪塔の請花状になる。水輪の横断面は隅丸方形である。S9は水輪と火輪の高さがやや高く、全体として60cmを越える高さを持つ。風輪の形も請花状を呈する。水輪の横断面はやや歪な隅丸方形を呈する。S10は火輪軒部の表現がやや不明瞭になる。波豆石製である。S11は地輪上辺中央に「アン」と思われる梵字が微かに残り、法名等の陰刻もあるようだが、摩滅が著しく判別し難い。S12は今回出土した中で最大のもので、高さが70cmに達する。地輪に「道泉押門」、「天文三年」(西暦1534年)という銘が陰刻されている。S13は空輪と風輪を欠き、他の一石五輪塔と比較してかなり扁平な形態を示す。また、石材も砂岩を用いている。

S14とS15は組み合わせ式五輪塔の火輪である。S14には上下に臍孔があるが、S15では上部の臍孔しか確認できなかった。S16は組み合わせ式五輪塔の地輪である。微かに陰刻された文字の痕跡が認められるが、判読できなかった。S17は宝瓶印塔の基礎である。反花座と台座の高さがほぼ等しい、扁平な形態である。S18は小型の灯籠の柱部分と思われる。

d) 金属製品 (図版41:写真図版25)

M1は鉄製の鎌である。刃部と茎部の先端を欠く。刃部の断面形は背と刃の部分が細くなり、中央が若干膨らむ。茎部は薄い長方形を呈する。A地区 SD101から出土した。

M2は鉄製の包丁である。刃部が三角形に伸びる、いわゆる出刃包丁で、棟と茎は一続きで茎部は比較的長い。木製の柄を欠くが、金属部分に関してはほぼ完存している。刃部の腐食のため、片刃か両刃かについては判断できない。A地区 SD101から出土した。

M3は鉄釘である。頭部を作り出し、基部は角を叩いてやや丸みを帯びた断面形を示す。脚部は急激に扁平になり、断面形は薄い長方形である。A地区的包含層から出土した。

M4とM5は銅製の簪である。いずれもA地区 SK119から出土した。M4は2cm程度の頭部に細い突起が付いており、玉簪であった可能性がある。M5は頭部端と先端を欠くものの、形状からみていわゆる松葉簪である。

M6とM7は銅貨の寛永通宝である。A地区 SD101から出土した。この2枚以外にSK102から腐食の進んだ銅貨が1枚出土している。

M8は網状の部分とねじ山を切った管状の部分からなる金属製品である。平たく潰れているため、本来の形状は不明であるが、かなり新しい時代に属する機械部品の一部である可能性がある。A地区 SD101から出土した。

【参考文献】

- 玉置豊次郎・監修、坪井利弘『日本の瓦屋根』(理工社:1976)
- 元興寺文化財研究所『中・近世瓦の研究 - 元興寺篇 -』(1982)
- 和歌山県文化財センター『根来寺坊院跡』(1997)
- 長崎 嶽「女の装身具」『日本の美術』No.396 (1999)

第2節 平成17年度調査の遺構と遺物

プール水槽の基礎（内周）およびプールサイド基礎（外周）の及ぶ長方形の範囲と、南東部の施設棟（更衣室・機械室）基礎部分、南西部のバリアフリーに伴うスロープ部分を対象に発掘調査を行った。

1. 基本層序（図版43：写真図版26）

現地表面は西側で標高約161.0m、東側で標高約160.9mであり、東に向かって緩やかに傾斜している。表土直下では一部旧耕土層を留めるものの大部分は削平された後、盛土がなされ（1層）、その直下は上面が遺構検出面となるベース（基盤層）となっている（4層）。ベースは、上部がわずかに土壤化したやや明るい褐色から灰色にかけてのシルト質極細砂で構成される。このベースの上面が遺構検出面であり、柱穴、土坑、溝はこの層を掘り込んでいる。遺構検出面も東側では概して標高160.6m、西側では160.7mと東に向かって緩やかに傾斜する。なお、ベースの埋地には2面からなる整地面（2層および3層）が構築され、生活面の平滑化が図られている。

2. 遺構

調査区内周部と南西部のはほとんどに擾乱を受けるが、柱穴、土坑11基、溝1条および整地面を検出した。主要なものを以下に報告する。

SK01（図版44：写真図版26）

調査区の南東部において検出した。南北両端は擾乱を受ける。溝状に長細く南北方向に直線的に伸びるが、中央付近が膨らんで最大幅を呈し、中央部が最も深くなるため土坑とした。検出長1.75m、検出最大幅85cm、検出面からの最大深15cmを測る。弥生時代中期後葉の土器片が出土した。

SK02（図版44：写真図版26）

調査区内外周の南東隅部分において検出した。北西端は擾乱を受けるが、南東部分は調査区外に及ぶことが東壁土層断面によって確認できる。SK01同様溝状を呈するが、やはり中央部分に最大幅、最深部分を持つことから土坑とした。検出長4.14m、検出最大幅1.41m、検出面からの最大深15cmを測る。弥生時代中期後葉の土器片が出土した。

SK03（図版44：写真図版27）

調査区外周の東部で検出した。東西両端は調査区外に及んでいる。全長は1.08m、検出最大幅は82cm、検出面からの深さ10cmを測る。東壁の土層断面では検出面からの深さ5cmのうち中央が3cmほど盛り上がり、西壁から中央付近にかけては中央部が最も深くなる。弥生時代中期後葉の土器片が出土した。

SK04（図版44：写真図版27）

調査区外周の東部で検出した。西側は調査区外に及び、南側は土坑状の落ち込みに切られる。全長は2.10m、検出した最大幅は82cm、検出面からの深さ14cmを測る。遺物は石礫1点が出土したのみである。

SK05（図版44：写真図版27）

調査区外周の北部で検出した。北側は調査区外に及ぶ。検出長1.66m、検出最大幅64cm、検出面からの深さ9cmを測る。瓦片、弥生時代中期の甕底部が出土している。

SK06（図版44）

調査区内周の西部で検出した。西側は調査区外に及ぶ。検出長49cm、検出最大幅76cm、検出面からの

深さ10cmを測る。埋土下半ではベースをブロック状に含む。焜炉蓋とみられる破片が出土している。

SD01（図版42）

調査区内周の北部で検出した。直線的に延び、両端が南に曲がっているが、南側一帯に搅乱が及ぶため溝の南側と両端の続きの部分に関しては不明である。深さ6~10cmのところに緩やかに傾斜する中段があり、そこからさらに10cmほど下がる。検出長3.78m、検出最大幅56cm、検出面からの深さ20cmを測る。遺物は出土していない。

整地面（図版42・写真図版26）

調査区の北部、内周外周ともに広い範囲で造成土による整地が行われている。2つの層（2層および3層）に分かれ、整地の時期は少なくとも2度に分かれ、新しいほうから整地層1（2層）、整地層2（3層）とする。いずれも黄灰色の極細砂～細砂を基本に、下位の基盤層とブロック状に混じり合う。

3. 遺 物（図版45: 写真図版27）

SK01出土遺物

186は弥生土器広口壺の口縁部で、下方への拡張が顕著である。187は弥生土器壺底部。S20はサヌカイト製の凹基式石鎌である。2側縁が直線的な二等辺三角形状を呈し、基部はわずかに内彎する。他に広口壺口縁部、壺底部など弥生土器の小片が出土するが、図化には耐えない。

SK02出土遺物

188・189は弥生土器広口壺の口縁部である。188は口縁端部を上下にわずかに拡張し、189は下方に拡張する。S21はサヌカイトの楔形石器である。上下縁および片側側縁に微細な剥離が認められ、もう一方の側縁には剪断面が認められる。他に壺底部など弥生土器の小片が出土するが、図化には耐えない。

SK03出土遺物

190は弥生土器壺底部である。191は弥生土器壺口縁部である。体部から短い口縁が屈曲してひらき、口縁端部は面を持つ。他に口縁端部を上下に拡張する弥生土器広口壺口縁部の小片が1点出土している。

SK04出土遺物

S19はサヌカイト製の平基式石鎌である。二側縁が直線的な二等辺三角形状を呈する。剥離の単位が大きく、背面側には素材剥片獲得の際の剥離面が広く残存している。

SK05出土遺物

192は弥生土器壺底部である。他に瓦の小片が出土しているが、図化には耐えない。

SK06出土遺物

図化しなかったが、焜炉蓋と思われる口縁部付近の破片が出土している。16世紀以降のものと考えられる。

整地面出土遺物

193は整地層1から出土した一本引きの丹波焼の擂鉢の破片である。194は丹波焼の壺の口縁部である。他に平瓦片、丹波焼や須恵器、弥生土器の小片が出土しているが、図化には耐えない。

そのほかの遺物

最上部の盛土層から丹波焼の壺の口縁部（195）、丸瓦（T47）が出土している。

第4章　まとめ

今回の調査で検出した遺構は、上層のものが江戸時代後半から近代に属し、下層のものは13世紀前半まで遡る可能性がある。また、掘跡からは近世後半から近代までの陶磁器が多量に出土している。ここでは検出された遺構の検討と出土陶磁器の検討を行ってまとめに代える。

検出した遺構について

A地区は当初は西から東へ向かって傾斜する地形であり、傾斜が緩やかな部分に下層遺構が営まれている。下層遺構からは13世紀前半に位置付けられる須恵器や土師器が出土しており、井戸も設けられていることから、この地に何らかの施設が置かれていたことは確かである。また、これらの遺構を覆う整地層からは天文年間の銘文が刻まれた一石五輪塔が出土しており、16世紀半ば以降に整地されたと思われる。上層遺構は土坑群と堀跡があり、土坑群は桶を伴う水溜状のものと、廐棄用と思われる土坑からなり、下層遺構群を埋めた整地面を再度整地した上から掘り込まれており、土坑から出土した遺物は19世紀前半に属するものである。

B地区に関しては、A地区同様の桶土坑の他、井戸と小型の池状の土坑が確認されている。ただし、出土遺物の所属時期から考えるとSD102とSE101は17世紀前半まで遡る可能性を持つのに対し、他の遺構に関しては19世紀前半に属すると考えられる。

江戸時代の三田陣屋とその周辺に関しては、系統の異なる複数の絵図が存在することが知られている。発掘調査終了後刊行された『三田市史』4巻⁽¹⁾と10巻⁽²⁾に、2種類の城下絵図の解説が掲載されおり、それを参考に検出された遺構の性格を考えてみたい。なお、この2種類の図については、いずれも製作年代は不詳であるが、書き込まれた家臣団の名前に基づく年代比定では、4巻に掲載された図（以下、4巻図）が18世紀初頭、10巻に掲載された図（10巻図）が19世紀前半になるようである⁽³⁾。

今回の調査区を絵図に当てはめてみると、A地区が「二ノ丸」と「堀」、B地区が「武家屋敷」の一角にあたる。ただし、堀の東側にあたる部分は4巻図と10巻図では若干様相が違っており、前者には北端の一部が二ノ丸で、南には家臣団の屋敷地や堀が含まれるが、10巻図では全体が「二ノ丸」と表記され、番所が設けられて、陣屋の一部に取り込まれたようである。A地区で検出した土坑群は、前述のように、江戸時代後葉のものであり、武家屋敷が廃されて「二ノ丸」城が拡大された後のものとなる。土坑以外に明確な遺構が認められなかったことから、庭園として利用されていた可能性がある。

また、有馬高校の敷地内に位置する堀についても、4巻図では水をたたえた表現が見られるのに対し、10巻図では「カラ堀」と表現されている。ただし、すぐ南側には大池から導水された濠もあるため、全く水がなかったとはいえない。調査でもSD101の下層には腐植質を多量に含む層が堆積しており、浅いながらも潜水していたか、汀状になって葦などが繁茂していた可能性が指摘できる。そして、三田陣屋が廃されて後もしばらくの間は堀の形状をとどめ、陶磁器等の投棄が行われていた。その後、埋め立てられて耕作地となり、最終的には有馬高校の敷地に取り込まれたものと思われる。

「武家屋敷」部分については、4巻図・10巻図ともほぼ同じ居住区画が表現されている。そして、調査箇所はいずれの図でも「野津甚右衛門」宅にあたっている。野津家は三田藩の家臣系譜や分限帳、家中録等の資料⁽⁴⁾によると、九鬼家が三田に入部する以前から同家に仕えており、代々「甚右衛門」を名

乗ることが多かったようである。石高は250石程度で推移しており、幕末に至るまで家中では中程度の家格を保っていたと思われる。絵図によると屋敷地の入口は西側にあったと考えられることから、検出した造構は屋敷地でも裏手にあたる。三田城下の武家屋敷の建物構成については、屋敷町遺跡の調査成果に基づいて、「本屋・蔵・門・空閑地」からなる復元案³が示されている。B地区は建物跡がないため、逆説的にはなるが本屋・蔵ではなく、空閑地としての土地利用が想定できる。ただ、空閑地自体がいろいろな施設を含むものであり、どのように利用されていたかについては、屋敷ごとで異なっていたようである。この区画の場合は、堀端にある石組みを伴うSK114が池、桶土坑が水溜や手水で、庭として利用されたのではないかと推測される。ただ、SE101とSD102に関しては、出土している遺物が九鬼氏入部とほぼ同時期のものであるため、屋敷地の造成に伴って廃棄されたものである可能性もある。

出土陶磁器について

第3章でも触れたが、出土した陶磁器の大半が堀からのものであるため、江戸時代前半から近代に至る資料が混在している。その中で、前述のようにB地区 SE101・SD102出土資料は時期的に限定され、土製煮沸具と擂鉢と唐津焼の碗・皿、景徳鎮産の磁器皿からなる。ここに含まれる唐津焼の食器には質のよい唐津天目碗も含まれ、「茶の湯」やハレの行事に際して使用された可能性を持つ。

また、堀跡出土の陶磁器類についても、時期別・產地別に分類してみると、武家屋敷地区である屋敷町遺跡での様相と若干異なっているようである。屋敷町遺跡では19世紀後半から出土磁器の產地が肥前から関西に移り、沟器に占める肥前系の製品は2割程度になる。また、三田焼の製品も7%程度含まれており、陶器についても関西系諸窯が3分の2、丹波焼が3分の1という割合になっている^④。それに対し、今回の調査では磁器製品の8割を肥前系のものが占め、19世紀前半以降に限っても3分の2は肥前系の製品であった。また、陶器に関しては丹波焼が6割強を占め、関西系諸窯は1割にも満たない結果になった。肥前系の製品については、17世紀～18世紀前半には初期伊万里の三足皿を含め良質の製品が出土するものの、18世紀後半以降についてはくらわんか手や広東碗といった大量生産品が主体となり、掘跡出土資料が陣屋で使用されたものとした場合も、武家屋敷出土資料との階層差が示されているとは思えない。また、陶器の中で丹波焼の占める比率が特に高い理由は、生産地に近いと言うことだけではなく、擂鉢・壺・甕といった通有の器種以外に、19世紀前半のものとした施釉鉢が多く出土していることによる。この鉢は内面全体に灰釉を施した直径15～20cm程度の鉢（片口鉢）で、管見では屋敷町遺跡や篠山城下町でもまとまつては出土しておらず^⑤、その用途や分布範囲も含めて検討すべき点が多く、近世後半の丹波焼を考える上で重要な資料になるのではないかと考えている。

【脚註】

1. 三田市史編さん専門委員会『三田市史 第4巻 近世資料』(2006)
2. 三田市史編さん専門委員会『三田市史 第10巻 地理編』(2003)
3. 註1と同じ
4. 註1と同じ
5. 三田市教育委員会『屋敷町遺跡』(1995)
6. 註5と同じ
7. 註1文献、篠山町教育委員会『篠山城旧三の丸跡 - 第11次調査・第13次調査・第14次調査 -』(1992)、篠山町教育委員会『篠山城旧三の丸跡 第21次調査』(1993)、兵庫県教育委員会『篠山城旧三の丸跡』(2006)

出土陶磁器觀察表(1)

(単位はcm)

報告 番号	地区	遺構	種別	基盤	過量(+)と過少(-)の割合をもつて記載			文様・調飾方法の特徴	形態・技術手法の特徴	備 考
					口径	高さ	壁厚			
1 A SE101	土塙跡	灯明皿	5.6	1.63	3.35	0.97	3.1	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と全体外縁に落葉文。内縁は外縁より高く、直線的で斜め上方に伸びる。	不調和。口沿部が外縁に落ちる。内縁が外縁に落ちる。
2 A SE101	土塙跡	灯明皿	5.8	0.97	2.91	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
3 A SE101	土塙跡	灯明皿	5.82	0.93	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
4 A SD101	土塙跡	灯明皿	5.72	0.9	2.96	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
5 A SD101	土塙跡	灯明皿	6.44	1.18	3.08	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
6 A SE101	土塙跡	灯明皿	6.9	1.31	4.02	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
7 A SE101	土塙跡	小皿	6.68	1.7	4.3	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
8 A SE101	土塙跡	小皿	5.98	1.5	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
9 A SE101	土塙跡	灯明皿	6.34	1.52	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
10 A SE101	土塙跡	灯明皿	6.82	1.42	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
11 A SE101	土塙跡	小皿	5.74	1.64	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
12 A SE101	土塙跡	灯明皿	6.64	1.58	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
13 A SE101	土塙跡	灯明皿	7.1	1.64	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
14 A SE101	土塙跡	小皿	5.24	1.7	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
15 A SD101	土塙跡	小皿	6.8	1.3	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
16 A SD101	土塙跡	小皿	6.2	1.6	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
17 A SD101	土塙跡	小皿	6.4	2.07	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
18 A SD101	土塙跡	灯明皿	11.64	1.3	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
19 A SD101	土塙跡	小皿	8.8	1.31	16.65	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。
20 A SD101	土塙跡	蓋付碗	7.7	7.1	—	—	—	ロクロ底面。平底。外縁は直線的で斜め上方に伸びる。	口沿部と外縁に落葉文。内縁が外縁に落ちる。	不調和。内縁が外縁に落ちる。

出土陶磁器觀察表(2)

文庫・圖録法の特徴									
番号	地区	通帳	種別	路線	運賃	運量	(100kmあたり)単位	運賃	運量
21	A	SD101	土砂崩	普通	26.7	7.9	27.4	226.38	27.4
22	A	SD101	土砂崩	普通	[22.56] (6.8)	[34.42]	4.34	11.95	4.34
23	A	SD101	土砂崩	普通	6.7	8.14	4.34	33.85	6.7
24	A	SD101	土砂質	普通	—	—	—	—	—
25	A	SD101	土砂質	普通	8.6	—	—	—	—
26	A	SD101	無輪	水深	1.45	3.6	6.95	2.62	6.95
27	A	SD101	無輪荷物	水深	[8.83] (9.5)	[9.6]	4.82	10.25	[8.83] (9.5)
28	A	SD101	無輪荷物	普通	2.4	15.33	11.15	7.4	2.4
29	A	SD101	無輪荷物	普通	[29.2] (11.58)	[9.4]	24.3	24.3	[29.2] (11.58)
30	A	SD101	無輪荷物	普通	19.42	14.87	[10.9]	—	19.42
31	A	SD101	無輪荷物	普通	—	—	—	—	—
32	A	SD101	無輪荷物	普通	—	—	—	—	—
33	A	SD101	無輪荷物	大排	[31.6] (72.9)	[9.6]	24.3	24.3	[31.6] (72.9)
34	A	SD101	無輪荷物	普通	[31.4] (13.7)	[13.0]	24.3	24.3	[31.4] (13.7)
35	A	SD101	無輪荷物	普通	26.7	11.68	[15.8]	—	26.7
36	A	SD101	無輪荷物	普通	[36.74] (14.76)	[14.6]	24.3	24.3	[36.74] (14.76)
37	A	SD101	無輪荷物	普通	[31.7] (14.67)	[15.6]	24.3	24.3	[31.7] (14.67)
38	A	SD101	無輪荷物	普通	[14.26]	[16.6]	24.3	24.3	[14.26]
39	A	SD101	無輪荷物	普通	[34.7] (12.96)	[13.22]	24.3	24.3	[34.7] (12.96)

出土陶磁器調査表3)

統合 番号	地区	通期	埋戻 場所	器種	主張: (1)は複数あるか? (2)是れ復 元型		形態・或る特徴の特徴	文様・調整技法特徴	備 考
					(1)	(2)			
41 A SD101 磁製陶器 口盤	要	[口盤 蓋] (60.85) (11.75) (44.6)	体部は内凹する。口縁部は外方に突出する。	形態・或る特徴の特徴	内外面とも墨書きナマ施塗。	色調に若い褐色。丹波焼?			
42 A SD101 磁製陶器 蓋	要	[蓋] (68.3) (20.17) (90.0)	体部は内凹する。口縁部は内側する。	内外面とも墨書きナマ施塗。体部内外面、四輪ナマ 糊書き。口縁部外面に凹凸面圧痕がある。	簡便な施塗と被覆した外見。	17世紀半 ばく後。			
43 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(16.4) (22.26) (14.06)	體手部は外方にひらく。	口縁部外側に凹凸面圧痕がある。外側に 内側部が凹む。内側糊書き。	簡便な施塗と被覆した外見。	丹波焼。近代			
44 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(29.57) 11.54 12.1	體手部は外方にひらく。 高さは比較的短めが傾く。直角の「井戸底」平底。体部は直線的 に内凹し、上部に膨らむ。	内外面とも墨書きナマ施塗。外側糊書き。	に若い黄色 の變色。	丹波焼。近代			
45 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(10.2) 5.6	高さは腰部が低い。平底。体部は直線的 に内凹し、上部に膨らむ。	内外面とも墨書きナマ施塗。内側と外側均 て糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。			
46 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	9.82 6.43 10.5	高さは腰部が低い。平底。体部は直線的 に内凹し、上部に膨らむ。	内外面とも墨書きナマ施塗。内側と外側均 て糊書き。	内外面とも白色に変色。器側に 糊可と記載済。	丹波焼。			
47 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	[11.93] 7.76	高さは比較的短め。平底。器部は比較的厚い。 内側部は内凹する。	内外面とも墨書きナマ施塗。内側と外側均 て糊書き。	内外面とも白い変色。内側はガラス質。	肥前系?			
48 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(11.65) 8.0	高さは腰部が低い。高さは外側部が傾く。直角の 「井戸底」平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	肥前系?			
49 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	13.6 8.05	高さは腰部が低い。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも白い変色。	内外面とも白い変色。	肥前系?			
50 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(18.4) 5.75	高さは比較的短め。平底。器部は比較的厚い。 内側部は内凹する。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	肥前系?			
51 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	(22.06) 7.81	高さは腰部が低い。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	肥前系。			
52 A SD101 磁製陶器 土管	[土管]	17.94 4.0	高さは腰部が低い。口縁部は丸みをもつ。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
53 A SD101 磁製陶器 杯	[杯]	12.5 7.0	14.02 10.6 平底。体部は直線的。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。			
54 A SD101 磁製陶器 杯	[杯]	(29.48) (10.77)	16.42 平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
55 A SD101 磁製陶器 片口盤	[片口盤]	(29.2) 12.48	平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
56 A SD101 磁製陶器 片口盤	[片口盤]	(14.72) 6.82	9.12 平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
57 A SD101 磁製陶器 鉢	[鉢]	(14.2) 6.45	8.73 平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
58 A SD101 磁製陶器 鉢	[鉢]	(16.5) 6.82	8.89 体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
59 A SD101 磁製陶器 鉢(小口)	[鉢(小口)]	(15.44) 7.4	11.6 平底。体部は直線的で傾く。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
60 A SD101 磁製陶器 鉢	[鉢]	(22.8) 10.4	12.25 平底。やや直角底。体部は直線的に斜め上方に伸びる。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			
61 A SD101 磁製陶器 片口盤	[片口盤]	20.63 10.4	11.9 口縁部はやや膨らむ。丸みを持った口縁部の下部を有す。	内外面とも墨書き糊書き。	内外面とも白い変色。	丹波焼。19世纪前半。			

出土陶磁器調査要覧4)

(単位はcm)

報告番号	地区	遺構	種別	器形	直徑(口径)	高さ	口径	底径	文様・調査特徴的特徴		備考
									形態	痕跡	
62 A SD0101	施釉窯	擂鉢	筒形	25.82 [13.13]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。 外側は土色で、外底は土色。	明治以前。	
63 A SD0101番	施釉窯	片口鉢	筒形	16.35 [37.84]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。 外側は土色で、外底は土色。	明治以前。	
64 A SD0101	施釉窯	壺	筒形	28.45	19.6	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
65 A SD0101	施釉窯	桶	筒形	18.2	22.85	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
66 A SD0101番	施釉窯	盆	筒形	16.73 [30.24]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
67 A SD0101	施釉窯	壺	筒形	18.72 [32.91]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
68 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	17.63 [22.66]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
69 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	20.1 [13.62]	19.38	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
70 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	[10.3] [32.98]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
71 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	[37.6] [28.7]	16.7	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
72 A SD0101番	施釉窯	甕	筒形	25.25 [13.65]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
73 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	24.1 [23.1]	13.0	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
74 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	16.3 [24.8]	33.42	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
75 A SD0101番	施釉窯	甕	筒形	[4.77] [29.92]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
76 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	[4.76] [31.56]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
77 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	[4.42] [31.78]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
78 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	[4.02] [31.64]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	
79 A SD0101	施釉窯	甕	筒形	2.53 [7.0]	—	—	—	—	内外面とも周縁に1.5mm前後で底足の間に 内面に凹入した凹部内面、8mmの褐色。	明治以前。	

出土陶磁器観察表(5)

報告番号	地区	通称	種別	器形	基準	基準	形態・窓形状の特徴	形態・窓形状の特徴	文様・調査方法の特徴	備考	
80 A SD101	施釉陶器	壺	口径	高さ、底径	9.35	17.03	山形壺、上面にツマミを残す付り。かみりは薄く熱い。	上部灰褐色地。表面に白色。下部暗赤色。リープ黒色に染み。	表面灰褐色地。表面に白色。下部暗赤色。リープ黒色に染み。	漆の墨、油引・光沢感?	
81 A SD101	施釉陶器	壺	底	7.65	2.55	山形壺、上面に露窓のつまみを残す付り。	上部灰褐色地の後、灰褐色地。リープ黒色に染み。	表面灰褐色地の後、灰褐色地。リープ黒色に染み。	漆の墨、油引・光沢感。		
82 A SD101	施釉陶器	壺(土瓶)	口	10.2	2.98	8.5	「黒、墨」や「赤」に露窓のつまみを残す付り。	表面灰褐色地。にぶい露窓地に露窓。下部露窓。	表面灰褐色地。にぶい露窓地に露窓。下部露窓。	漆の墨、油引・光沢感。	
83 A SD101	施釉陶器	食器(茶碗)	底	5.85	11.06	7.34	青白釉地に露窓。半底。器形は意匠的に直上に伸びる。口部露窓を残す。	内部露窓とも露窓地で調整。露窓外露。露窓地に染み。蓋受け部内面・内側・外側部内面は露窓地。	内部露窓とも露窓地で調整。露窓外露。露窓地に染み。蓋受け部内面・内側・外側部内面は露窓地。	露窓系・実窓系? 19世紀前半以前。	
84 A SD101	施釉陶器	食器(茶碗)	蓋	(10.8)	7.73	(9.45)	平底。題打ち直形。口部は内側二面がひかる。	これは二面に露窓。蓋の部分には染み。全体に露窓を施す。	全体が露窓地。	洗浄?	
85 A SD101	施釉陶器	仏花器	底	(10.5)	10.98	9.8	平底。やや上方露窓。体部は大きめ内露する。	全体が露窓地。外露。内側が露窓地に付る。オーリー内面に染み。底部露窓地。	全体が露窓地。外露。内側が露窓地に付る。オーリー内面に染み。底部露窓地。	漆毛化感。	
86 A SD101	施釉陶器	壺	口	(22.7)	(18.4)	(11.32)	平底。体部は露窓地に露窓。上部にちりかかり。体部二位で外露窓と二段階ナチュラル露窓。	内側外露と二段階ナチュラル露窓。内面・外露。底部露窓地の後、露窓地中面。露窓地外露。露窓地に付る。オーリー内面とも露窓地。	内側外露と二段階ナチュラル露窓。内面・外露。底部露窓地の後、露窓地中面。露窓地外露。露窓地に付る。オーリー内面とも露窓地。	万葉歌。丹波焼。18世紀前半。	
87 A SD101	施釉陶器	鉢	底	17.64	(7.67)		内部露窓地露窓。露窓地は上部に伸びる。口部露窓を残す。	内側外露とも露窓地。	内側外露とも露窓地。	京焼。明石・伊万里窯? 19世紀前半。	
88 A SD101	施釉陶器	器皿	口	(29.36)	(7.6)	(35.2)	露窓地露窓。露窓地は上部に長い露窓を残す。	内側外露とも露窓地ナチュラル露窓。内面・外露。全体が露窓地。	内側外露とも露窓地ナチュラル露窓。内面・外露。全体が露窓地。	洗浄。底地。底地に露窓地。	
89 A SD101	升壺	杯	底	4.78	1.56		露窓地露窓。内面は露窓地。	上部外露まで露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	上部外露まで露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	底地。19世紀前半。	
90 A SD101	升壺	杯	底	4.88	1.76		露窓地露窓。露窓地は内面に露窓をもつ。	内側外露に露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	内側外露に露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	19世紀前半。	
91 A SD101	升壺	杯	底	(10.2)	3.55		露窓地露窓。露窓地は内面に露窓をもつ。	内側外露とも露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	19世紀前半。	
92 A SD101	升壺	杯	底	(8.8)	2.67	(5.96)	露窓地露窓。内面は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。火炎。外露。全体が露窓地。	差地不詳。	
93 A SD101	施釉陶器	壺	底	(2.2)				内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	差地不詳。
94 A SK101	施釉陶器	壺	底	(3.3)				内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	差地不詳。
95 A SK101	施釉陶器	壺	底	(20.3)	(6.2)			内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	差地不詳。
96 A SK101	施釉陶器	壺	底	19.0	12.35	10.46	口露窓地露窓。口露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
97 A SK102	施釉陶器	壺	底	(4.9)	1.53	(1.34)	露窓地露窓。内面は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
98 A SK102	施釉陶器	壺	底	(12.4)	3.5	(7.5)	露窓地露窓。内面は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
99 A SK102	施釉陶器	竹口壺	底	14.36	6.5	9.4	7.6cm。体部は直筒形に斜め下方に伸びる。口露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
100 A SK104	施釉陶器	椎状	底				内面は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
101 A SK107	施釉陶器	椎状	底	24.45	33.2	25.57	露窓地露窓。内面は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	
102 A SK102	施釉陶器	壺	底	(5.15)		(5.6)	平底。底部は露窓地。	内側外露とも露窓地露窓。	内側外露とも露窓地露窓。	19世紀前半。	

出土陶磁器調査表(6)

番号	出区	通期	種別	器種	量差(±)と形状特徴		文書・調査法の特徴	測定・成形技法の特徴
					口径	高さ		
HG-A	SK2011	須恵器	楕		(1.85)	(7.0)	高台は「ト」の字形で外方にひらき、比較的高い。	内外面とも当板ナラ埋設。
HG-A	SK2011	須恵器	楕		(17.72) (4.8)	(6.1)	壁面は比較的高い。平底。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。内部外縁に内凹部がある。体部外縁に内凹部がある。
104 A	A	土器	小皿	(9.26)	1.05	5.45	壁面は比較的高い。平底。全体をもつて、	器は著しく底面。体部内外縁に内凹部がある。
105 A	A	土器	楕	(13.1)	(2.65)		底盤は比較的高い。平底。全体をもつて、	器は著しく底面。体部内外縁に内凹部がある。
106 A	A	土器	楕	(15.3)	4.05	7.6	平底。全体をもつて、	器は著しく底面。体部内外縁に内凹部がある。
107 A	A	土器	楕				器は著しく底面。全体をもつて、	器は著しく底面。全体をもつて、
108 B	B	SK1113	土器	小皿	6.35	1.6	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
109 B	B	SK1113	土器	片腹楕	6.4	2.0	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
110 B	B	SK1113	土器	切妻皿	9.2	2.05	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
111 B	B	SK1113	土器	片腹楕	(10.4)	1.6	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
112 B	B	SK1113	土器	煮沸鍋	(9.25)	(6.2)	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
113 B	B	SK1113	施釉海螺	楕	(10.06)	6.05	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
114 B	B	SK1113	無釉海螺	楕	(30.6)	10.15	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
115 B	B	SK1113	施釉海螺	楕	(3.62)	19.6	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
116 B	B	SK1114	施釉海螺	楕	(15.44)	7.32	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
117 B	B	SK1114	施釉海螺	楕	(15.47)	7.26	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
118 B	B	SK1114	無釉海螺	土椭	(15.47)	7.26	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
119 B	B	SK1114	土器	小皿			器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
120 B	B	SK1112	施釉海螺	楕	(3.17)		器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
121 B	B	SK1112	施釉海螺	大口椭			器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
122 B	B	SK1112	施釉海螺	楕	(10.82)	7.4	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
123 B	B	SK1112	施釉海螺	外	(24.28)	(9.22) (25.52) (24.48)	器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、
124 B	B	SK1101	土器	煮沸			器は著しく底面。全体をもつて、	口縁部が外側に張り出している。全体をもつて、

出土陶磁器觀察表(7)

出土陶磁器調査表8

番号	地区	遺構	種別	基盤	通量	（単位はcm）	形態・底面特徴の判明		文様・調査法の判明	備考	
							口径	底径	高さ		
145 A	SUD01	背面	杯	筒	(56.4)	4.98	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は外方にひらく。口縁部は内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	
146 A	SUD01	臼	杯	且	8.44	2.08	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は外方にひらく。口縁部は内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	
147 A	SUD01	染付青磁	杯	筒	7.45	6.73	8.45	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は外方にひらく。口縁部は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。	内縁部が内縁部と重複する。底盤は内縁部と重複する。
148 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	11.0	5.13	4.32	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
149 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	10.75	6.1	4.72	底盤は「フ」の字形にひらく。内縁部は斜め上方に伸びる。外縁部は斜め上方に伸びる。底盤は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。底盤は内縁部に斜め上方に伸びる。
150 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(12.0)	7.6	(5.75)	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
151 A	SUD01	染付青磁	小碗	筒	(8.16)	3.41	(3.2)	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
152 A	SUD01	染付青磁	染付花瓶	筒	(9.33)	5.22	3.87	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
153 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(9.34)	5.47	4.38	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
154 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	10.42	(5.73)	2.9	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
155 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(8.26)	5.05	6.62	底盤は比較的薄く、高い。体部は青磁気体に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
156 A	SUD01	染付青磁	小碗	筒	7.35	3.7	2.68	底盤の基部は底部が低い。両白は比較的細く、高い。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
157 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	9.32	5.44	4.12	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
158 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(9.75)	5.1	4.15	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
159 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(11.1)	6.6	6.62	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
160 A	SUD01	染付青磁	杯	筒	6.8	4.9	3.15	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
161 A	SUD01	染付青磁	杯	筒	7.48	5.84	3.96	底盤の基部は底部が低い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
162 A	SUD01	染付青磁	六角鉢	筒	(14.8)	7.4	7.6	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
163 A	SUD01	染付青磁	杯	筒	(12.6)	9.9	7.5	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
164 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	[1.6]	-	5.15	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
165 A	SUD01	染付青磁	碗	筒	(8.30)	2.56	4.08	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。
166 A	SUD01	染付青磁	染付花瓶	筒	(8.9)	1.9	5.58	底盤は比較的薄く、高い。体部は内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。	外縁部が内縁部に斜め上方に伸びる。

卷之九

出土瓦一覧表(1)

(単位はcm)

調査 番号	地区	遺構	種類	長さ	幅	瓦当厚さ	内央厚さ	外縁高 度	形	面	調 査 要 點
T1	A	SD101	軒丸	(21.65)	(14.2)	2.4	1.6	0.65	内区は丸、外区は切妻二つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」。珠文は「輪穴舟」。	斜面部は外輪が腹側方向のミガキ、内面には布痕があり、断面は斜方向仕上げである。	
T2	A	SD101	軒丸	(4.89)	14.6	1.9	1.2	0.82	内区は丸、外区は切妻二つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」。	斜面部は外輪が腹側方向のミガキ、内面には布痕があり、断面は斜方向仕上げである。	
T3	A	SD101	軒丸	(15.8)	1.5	1.0	0.45	内区は丸、外区は切妻二つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」。	斜面部は外輪が腹側方向のミガキ、内面には布痕があり、断面は斜方向仕上げである。		
T4	A	SD101	軒丸	(14.8)	1.68	1.15	0.53	内区は丸、外区は切妻二つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」。	斜面部は外輪が腹側方向のミガキ、内面には布痕があり、断面は斜方向仕上げである。		
T5	A	SD101	軒丸	—	1.5	—	—	—	内区は丸、外区は切妻二つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」。	斜面部は外輪が腹側方向のミガキ、内面には布痕があり、断面は斜方向仕上げである。	
T6	B	SE101	軒丸	(13.8)	2.0	1.3	0.7	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。		
T7	B	—	軒丸	(16.0)	2.1	1.4	—	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。		
T8	A	SD101	軒丸	(16.0)	—	—	—	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。		
T9	A	SD101	軒丸	(15.8)	2.0	1.53	0.47	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。	内区は丸、外区は切妻三つ巴文、珠文帯を持つ。珠文は「輪穴舟」と平行して入れる。		

(単位はcm)

調査 番号	地区	遺構	種類	長さ	幅	瓦当厚さ	内央厚さ	幅	面	調 査 要 點
T10	A	SD101	軒丸	26.3	3.52	1.82	1.85	(25.1)	右地に瓦当が付く。裏面花文+一輪穴草文。	瓦当面から斜面に向けては斜方向のケリが後ナデ。背面は斜方向のナデ。斜面は腹側方向のミガキ、内面は布痕があり、断面は斜方向のナデを行う。
T11	A	SD101	軒丸瓦	(18.6)	(4.0)	—	2.28	(17.9)	左地に瓦当が付く。裏面花文+一輪穴草文。	瓦当面から斜面に向けては斜方向のケリが後ナデ。背面は斜方向のナデ。斜面は腹側方向のミガキ、内面は布痕があり、断面は斜方向のナデを行う。
T12	A	SD101	軒丸瓦	(8.82)	(10.5)	—	—	(10.5)	左地に瓦当が付く。裏面花文+一輪穴草文。	谷筋部は楕円形のナデ。穂部は楕円形のナデを施す。
T13	A	SD101	軒平瓦	(14.43)	3.6	—	1.58	(11.1)	裏花文+一輪穴草文。	ナデ。
T14	A	SD101	軒平瓦	(6.6)	4.12	—	2.2	(14.13)	三葉+三板模單文(圓輪化)。「深田中島周」スタンプあり。	瓦当面から斜面に向けては斜方向のケリが後ナデ。背面は斜方向のミガキ、内面は布痕があり、断面は斜方向のナデ。
T15	A	SD101	軒平瓦	(3.6)	5.4	—	1.85	(18.0)	五葉+三板模單文。	谷筋部は楕円形のナデ。穂部は楕円形のナデ。
T16	A	SD101	軒平瓦	(11.4)	3.82	—	1.82	(14.2)	九瓣文?	ナデ。
T17	B	—	軒半丸	(3.4)	3.6	—	1.5	—	中心飾りは五葉で、裏面文二板合介。	瓦当下半だけが異なるが、断面に上平接合の跡書きを入れている。
T18	B	SK112	軒平瓦	(2.9)	(3.0)	(2.9)	—	(16.0)	五葉+二板模單文。	中・端よりは丸に二つ引、普草文三板合。
T19	B	SH101	軒平瓦	(2.6)	5.9	—	—	—	中・端よりは丸に二つ引、普草文三板合。	中・端よりは丸に二つ引、普草文三板合。

出土瓦一覧表(2)

(単位はcm)

報告 番号	地区	遺構	種類	長さ	瓦当高さ	内央厚さ	幅	厚さ	形	概	圖
T20	B	SD102	軒平瓦	(7.9)	(3.4)	(2.08)	(10.4)	1.65	圓錐形瓦り、5.5cm程度と狭く、二板文が残る留聲の裏打ちも きゅう。	瓦下端部はケズリで形を整え、瓦当裏面は墨り付 りナデ。	-
T21	A	SD101	軒平瓦	(3.4)	3.38	2.08	(11.1)	-	留聲面ナデ。	ナデ。	-
T22	A	SD101	軒平瓦	(7.45)	4.5	2.66	(12.6)	-	三板+三板苦意(留聲化)か?	ナデ。	-
T23	A	SD101	軒平瓦	(5.87)	3.94	1.88	(12.4)	-	? 番文?	ナデ。	-

(単位はcm)

報告 番号	地区	遺構	種類	長さ	胸錐長さ	王様長さ	胸錐幅	厚さ	形	概	圖
T24	A	SD101	丸瓦	26.3	21.81	3.49	5.85	1.63 1.65 14.51	胸錐部は直角的に伸びるが、瓦当面と僅かに広がる。下端は体 側面に付いていた。底面は丸く、腰面は直角方向のミガキ、下襟部は削 除され、腰面側にハラフリの痕。	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	-
T25	A	SD101	丸瓦	25.6	21.12	3.48	6.2	14.9 1.76	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	-
T26	A	SD101	丸瓦	(25.45)	(22.25)	3.2	5.92	14.2 1.8	胸錐部は直角的に伸びる。王様は端に向かって伏せる。 胸錐部は直角的に伸びる。王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	-
T27	A	SD101	丸瓦	(7.55)	2.33	6.15	13.86 1.3	14.03 1.3	胸錐部は直角的に伸びる。王様は端に向かって伏せる、長い 直角部は削除され、王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	-
T28	A	SK104	丸瓦	(15.4)	3.68	7.23	(14.2)	2.1	胸錐部は直角的に伸びる。王様は端に向かって伏せる。下唇は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ、下襟部は削除され、腰面側にハラフ リの痕。	-
T29	A	SK102	丸瓦	(16.0)	3.5	6.11	14.32 1.58	-	胸錐部は直角的に伸びる。王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ、内面は直角を握る面の ハラフリ。	-
T30	B	SD102	丸瓦	(19.33)	(13.89)	5.64	7.7 (8.7)	-	王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ。内面 は直角を握る面のハラフリ。	-
T31	B	倒錐	丸瓦	(12.8)	-	4.25	7.1 15.8 2	-	王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ。内面は直角を握る面の ハラフリ。	-
T32	B	SK113	丸瓦	(11.6)	4.4	6.15	(12.45) 1.6	-	王様は端に向かって伏せる。	胸錐部は直角方向のミガキ。内面は直角を握る面の ハラフリ。	-
T33	A	SD101	丸瓦	(15.5)	-	6.13	14.1 1.55	-	胸錐部は直角的に伸びる。	胸錐部は直角方向のミガキ。内面は直角を握る面の ハラフリ。	-

出土瓦一覧表(3)

報告書号	地区	通構	種類	長さ	幅	側面長さ	高さ	側面幅	厚さ	形	端	底	説
T34	B	留溝	丸瓦	(28.3)	(28.3)	7.23	1.5	2.3	玉縁を欠く。施城不規。				側面裏面は縱方向のミガキをもつ。内面は全面に施城が施されたものよじれの跡がある。側面はヘラケズリの後ナデ。

(単位はcm)

報告書号	地区	通構	種類	長さ	幅	側面長さ	高さ	側面幅	厚さ	形	端	底	説
T35	A	留溝	平瓦	(6.45)		(10.65)		2.5					内面は白目が残り、眼孔のナデを施す。施城 強徹。色 布目灰。底面 布目灰。色 金黄。
T36	A	SD101	平瓦	(15.16)	5.2	25.1		1.7					内面は白目が残り、眼孔のナデを施す。施城 強徹。色 金黄。
T37	A	SK101	左丸瓦	(15.8)		(16.7)	3.2		1.65				内面は白目が残り、眼孔のナデを施す。施城 強徹。色 金黄。
T38	A	SK102	右丸瓦	28.5		27.42	2.55	2.4	1.7				内面は丸瓦の施城が残る。施城 強徹。色 金黄。
T39	A	SD101	左丸瓦	29.05		28.4		3.7	1.53				内面は丸瓦の施城が残る。施城 強徹。色 金黄。
T40	A	SD101	左丸瓦	29		28.4			1.65				内面は丸瓦の施城が残る。施城 強徹。色 金黄。
T41	A	SK113	平瓦	(20.1)	6	29.32		1.85					内面は丸瓦の施城が残る。施城 強徹。色 金黄。

(単位はcm)

報告書号	地区	通構	種類	長さ	幅	側面長さ	高さ	側面幅	厚さ	形	端	底	説
T42	A	SD101	左丸瓦	(23.4)	18.97	1.65	3.3	留を欠く。施城にはヘラ削き跡等を残す。つり穴は廻所にあり、軋延は内外面とも縱方向のナデを施し、側面は留め側のケズリで底取りを行ふ。					
T43	A	SK102	通丸瓦	(13.29)	6.5		1.53						ヘラ切りの施ナデで形を整える。
T44	B	SD102	溝瓦?										当時のものか剥離したようにも見える。隔壁などとしながら、出土して見る。瓦床瓦より復元途が大きい。
T45	A	SD101	輪瓦?	(17.92)	(14.66)	1.8							瓦形を留すると思われる。そこに約以上×5以上の穴を穿つ。
T46	A	SD101	鬼瓦										外周にはヘラによる重ね状の輪瓦織が全体にへつっている。中央突起部が全体に行われ、骨に方向には大きく粗い施ナデの痕跡がある。

(単位はcm)

出土石器・石製品一覧表

報告番号	地区	遺構・土層	種別	幅(mm)	長さ(mm)	厚さ(mm)	備考
S1	A	SD101	鏡	53.1	41.8	15.0	重さ60.3g
S2	A	SD101	砥石	44.8	96.9	20.8	重さ104.6g
S3	A	SD101	砥石	42.5	90.7	24.3	重さ151.1g

報告番号	地区	遺構・土層	種別	幅(cm)	高さ(cm)	その他(cm)	備考
S4	A	整地層	—石五輪塔	最大幅16.18	66.85		波豆石。 花崗岩。
S5	A	整地層	—石五輪塔	最大幅14.63	55.47		
S6	A	整地層	—石五輪塔	最大幅19.52	50.73		花崗岩。
S7	A	整地層	—石五輪塔	最大幅17.45	52.7		花崗岩。
S8	A	整地層	—石五輪塔	最大幅17.4	52.12		花崗岩。
S9	A	整地層	—石五輪塔	最大幅19.9	62.8		花崗岩。
S10	A	整地層	—石五輪塔	最大幅18.55	60.7		波豆石。 塊輪に梵字「アン」。 花崗岩。
S11	A	整地層	—石五輪塔	最大幅21.35	64.1		「温泉神門」(天文三幸一月十一日)。 花崗岩。
S12	A	整地層	—石五輪塔	最大幅30.8	70.13		
S13	A	整地層	—石五輪塔	最大幅21.4	44.71		砂岩。
S14	A	整地層	五輪塔	火輪	輪22.15	13.85	風化のため剥落不整。 花崗岩。
S15	A	整地層	五輪塔	火輪	輪24.18	15.68	
S16	A	整地層	五輪塔	火輪	輪26.15	20.15	正面で5cm程度、側面・背面で1~2cm程度剥離まとめていた痕跡がある。花崗岩。
S17	A	整地層	宝瓶印塔	基壇	輪31.42	13.35	花崗岩。
S18	A	SD101 中央あたり上層	灯籠?	径13.37	残存高7.27	軸径4.43	花崗岩。

出土金属器一覧表

報告番号	地区	遺構	種別	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備考
M1	A	SD101	鍍錫品	鍍	(11.22)	2.97	0.42	刃部先端と茎部端部は欠損。おそらく鍔部。
M2	A	SD101	鍍錫品	包丁	22.5	4.9	0.5	刃部先端と茎部端部は欠損。ほぼ完形。
M3	A	箇棒	鍍錫品	釘	6.73			頭部あり。断面形は丸みを帯びた四角。先端部はたたいて板状にする。
M4	A	SK119	鍍錫品	簪	13.6	0.46	0.12	頭部の椎状による彎りはないが、金属部分は完全。
M5	A	SK119	鍍錫品	簪	(5.26)	1.06	0.19	先端部が丸なりでせ形。
M6	A	SD101	鍍錫品	鍍貨	2.2			寛永通宝。
M7	A	SD101	鍍錫品	鍍貨	2.2			寛永通宝。
M8	A	SD101	鍍錫品	不明				機械部品か?。ねじ山が切ってある。

(単位はcm)

平成17年度調査 出土遺物観察表

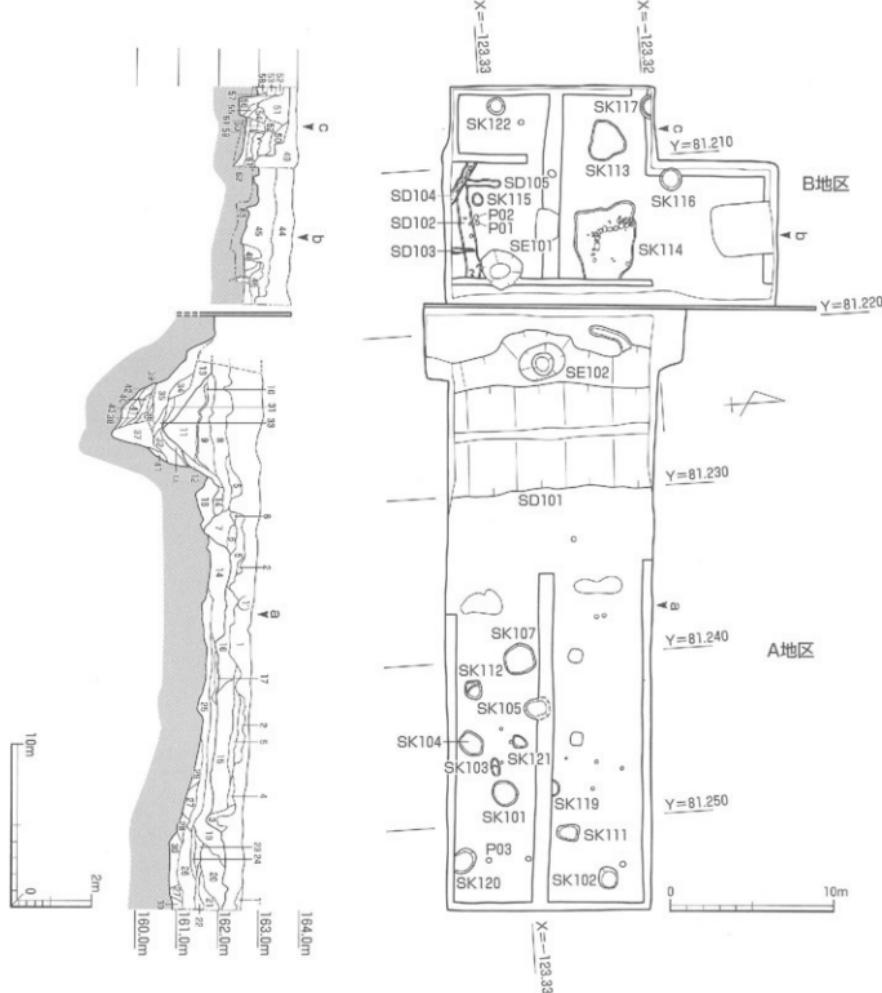
報告番号	出土場所	出土層位	種別	特徴	口径	深さ	直徑	形態・成形技術の特徴		文様・装飾技法の特徴	備考
								形態	成形法		
186	SK01	弥生土器	広口壺	直	—	(1.9)	—	口縁部は下方に斜張。	器面は著しく磨滅。		
187	SK01	弥生土器	釜	直	—	(3.0)	(9.0)	底部は平底。	器面は著しく磨滅。		
188	SK02	弥生土器	広口壺	直	—	(2.3)	—	口縁部は上方に斜張。	器面は著しく磨滅。		
189	SK02	弥生土器	広口壺	直	—	(2.6)	—	口縁部は下方に斜張。	器面は著しく磨滅。		
190	SK02	弥生土器	広口壺	直	—	(2.18)	(7.4)	底部は平底。	器面は著しく磨滅。		
191	SK03	弥生土器	甕	直	—	(3.2)	—	矧じて縫合部から屈曲。口縁部は直をつくる。	器面は著しく磨滅。		
192	SK05	弥生土器	甕	直	—	(3.8)	8.75	底部はやや厚めの平底。	器面は著しく磨滅。		
193	北トレーンチ (B8)周	墓地層	無輪陶器	楕円	—	(3.2)	—	内壁する体部の一部。	体部内面へつ抜きの瘤状付加。		
194	東トレーンチ (A8)周	墓地層	無輪陶器	直	—	(16.7)	—	口縁部は上下に試張、稍凹形状を呈する。	口縁部および体部内面は内側ともに擦痕。底部中央部は細い板ナメを施す。口縫部外側は多孔状。		
195	北トレーンチ (内周)	壇土	無輪陶器	直	—	(8.6)	—	口縁部は上方に試張、稍凹形状を呈する。	口縫部および体部内面ともに擦痕。口縫部上部には内側ともに擦痕3条。		
T47	北トレーンチ (内周)	埴生	瓦	丸瓦	長さ(13.08)	幅(13.2)	厚さ2.25	凸出部ではナメもしくは板状工芸による凹きがある。凹部では有目模様が施されない。瓦の裏面は白質で、瓦の裏面を頭蓋と頭蓋に重ねる。	凸出部ではナメもしくは板状工芸による凹きがある。凹部では有目模様が施されない。瓦の裏面は白質で、瓦の裏面を頭蓋と頭蓋に重ねる。	凸出部ではココロメドウ法で切らされている。	瓦の中間に日割穴を穿つ。
報告番号	出土場所	出土層位	種別	特徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石		文様・装飾技法の特徴	備考
								石	材		
S19	SK04	石製品	石鏡	石鏡	2.31	2.22	0.49	1.9	—	サヌカイト	
S20	SK01	石製品	石鏡	(2.58)	1.86	0.62	1.8	—	サヌカイト		
S21	SK02	石製品	楕形石器	2.55	2.63	0.59	2.9	—	サヌカイト	3個添に覆面剥離。1個鏡に朝顔面	

報告書抄録

ふりがな	さんだじょうあと2							
書名	三田城跡II							
副書名	兵庫県立有馬高等学校校舎建設工事等に伴う発掘調査報告							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第356冊							
編著者名	鐵英記・上田健太郎							
編集機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中500番地				TEL 079-437-5589			
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号				TEL 078-341-7711			
発行年月日	2009(平成21)年3月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さんだじょうあと2 三田城跡	ひょうごけん きんざし 兵庫県三田市 てんじん ちとうめ 天神2丁目 はなぶら こうじ 1番50号	28219	200158	34度 53分 12秒	135度 53分 12秒	確認調査(980108) 19980803~0804	40nf	兵庫県立有馬 高等学校校舎 建設工事に伴 う事前調査
みよしきついでき 古城遺跡	ひょうごけん きみだ 兵庫県三田市 てんじん ちとうめ 天神2丁目		200157	34度 53分 17秒	135度 13分 18秒	本発掘調査(980182) 19981030~ 19990113	635nf	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三田城跡	陣屋・武家屋敷	中世、江戸時代、 近代		土坑、竈、井戸		陶磁器、瓦、一石五輪塔		
古城遺跡	集落	弥生、江戸時代	土坑		弥生土器、石樵、瓦			
要約	三田城跡では校舎新築に伴う記録保存調査。江戸時代に掘削された振跡と二ノ丸および武家屋敷の一部を検出した。二ノ丸の遺構群は土坑を中心とするもので、庭園の一部と考えられる。また、二ノ丸の下層からは中世に遡る井戸・土坑・溝跡が検出された。古城遺跡はブル改修に伴う記録保存調査で弥生時代の土坑や江戸時代の遺物が検出された。							

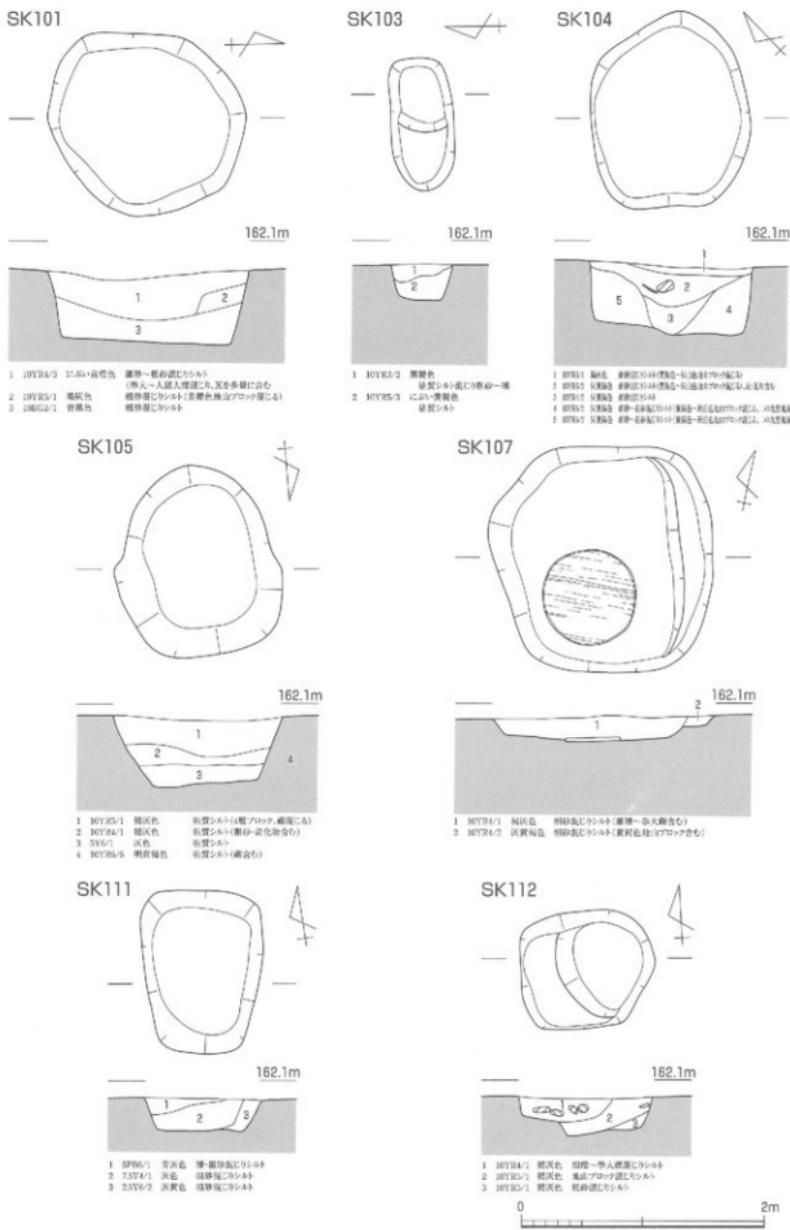
図 版

図版1



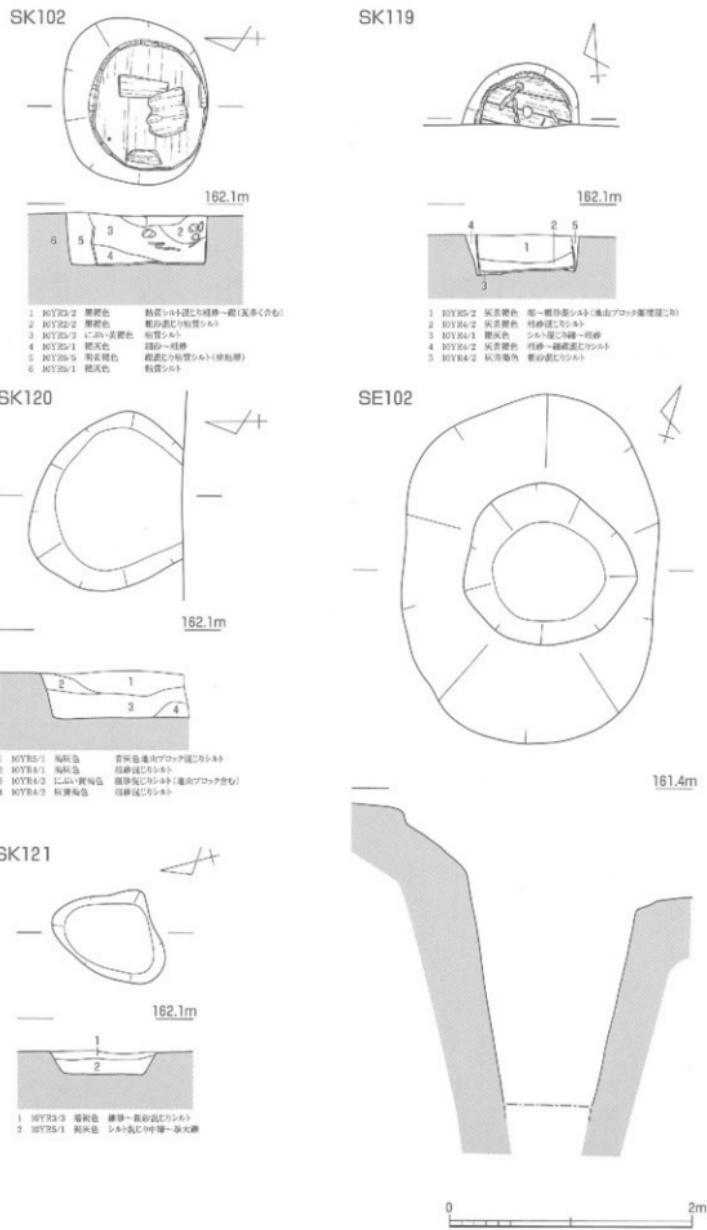
調査区 全体図・断面図

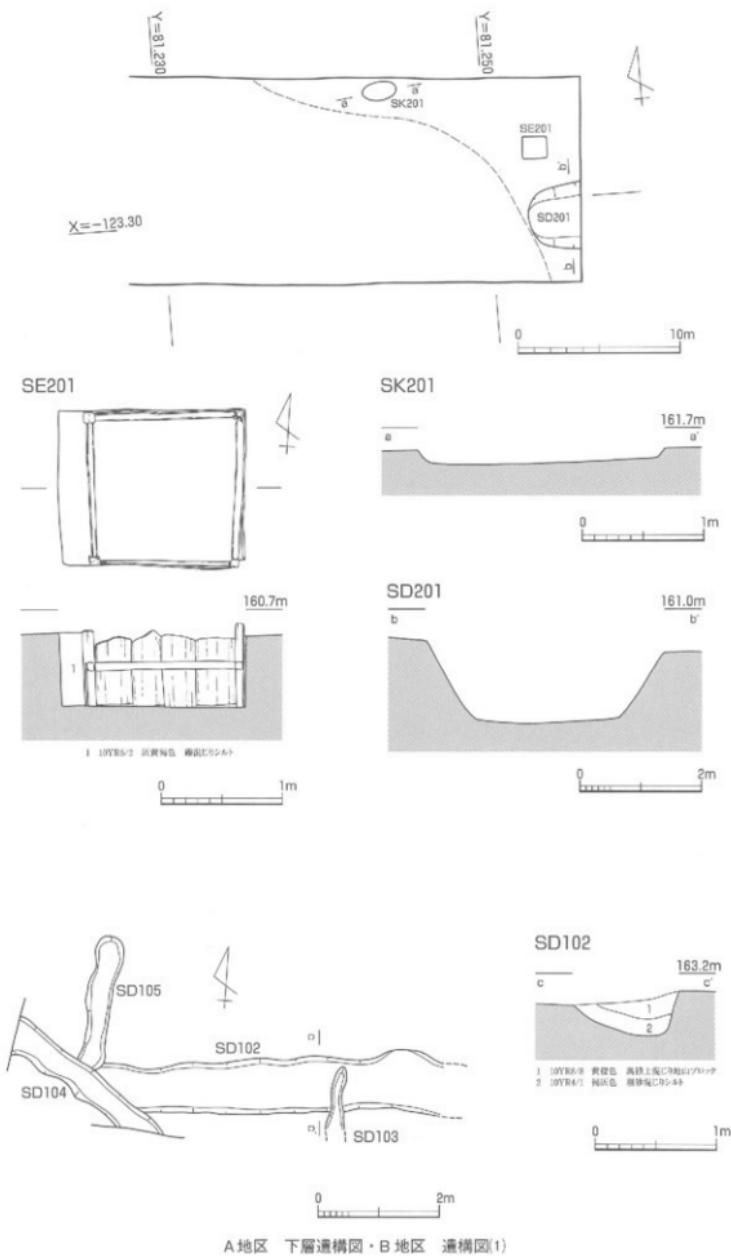
1 10730.2 葵海色	目少一細粒（基盤）	基盤→じりかわ	10730.2 黄褐色	基盤→じりかわ
1' 10730.3 黄青褐色	目少一細粒（基盤）	基盤→じりかわ	10730.3 にじい黄褐色	基盤→じりかわ（直上）
2 10730.3 黄褐色	目少一細粒，掌状の節理（直上）	基盤→じりかわ	10730.4 黄褐色	二つのフリートガラス（直上）
3 10730.6 黄褐色	基盤（シルト）	基盤→じりかわ	10730.5 黄褐色	明るい黄褐色
4 10730.6 黄褐色	基盤（シルト）	基盤→じりかわ	10730.6 黄褐色	明るい黄褐色
5 10730.1 黄褐色	基盤（シルト）	基盤→じりかわ	10730.7 黄褐色	明るい黄褐色
6 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	シルト→じりかわ→赤人皮	10730.8 黄褐色	赤い土
7 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	シルト→じりかわ→赤人皮	10730.9 黄褐色	赤い土
8 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	シルト→じりかわ→赤人皮	10730.10 黄褐色	赤い土
9 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	シルト→じりかわ→赤人皮	10730.11 黄褐色	赤い土
10 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	シルト→じりかわ→赤人皮	10730.12 黄褐色	赤い土
11 273.9 黄色	粘土質砂岩（シルト）	じりかわ→じりかわ	10730.13 黄褐色	二つの赤褐色
12 10730.2 黄褐色	硫酸水溶出シルト	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.14 黄褐色	赤い土
13 10730.2 黄褐色	硫酸水溶出シルト	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.15 黄褐色	赤い土
14 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.16 黄褐色	赤い土
15 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.17 黄褐色	赤い土
16 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.18 黄褐色	赤い土
17 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.19 黄褐色	赤い土
18 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.20 黄褐色	赤い土
19 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.21 黄褐色	赤い土
20 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.22 黄褐色	赤い土
21 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.23 黄褐色	赤い土
22 10730.2 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.24 黄褐色	赤い土
23 10730.3 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.25 黄褐色	赤い土
24 10730.3 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.26 黄褐色	赤い土
25 10730.4 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.27 黄褐色	赤い土
26 10730.4 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.28 黄褐色	赤い土
27 10730.4 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.29 黄褐色	赤い土
28 10730.4 黄褐色	基盤→一部風化（シルト）	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.30 黄褐色	赤い土
29 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.31 黄褐色	赤い土
30 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.32 黄褐色	赤い土
31 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.33 黄褐色	赤い土
32 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.34 黄褐色	赤い土
33 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.35 黄褐色	赤い土
34 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.36 黄褐色	赤い土
35 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.37 黄褐色	赤い土
36 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.38 黄褐色	赤い土
37 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.39 黄褐色	赤い土
38 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.40 黄褐色	赤い土
39 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.41 黄褐色	赤い土
40 10730.5 黄褐色	明るい黄褐色	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.42 黄褐色	赤い土
41 317.4 黄褐色	基盤	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.43 黄褐色	赤い土
42 10730.2 黄褐色	基盤	硫酸水溶出シルト→基盤	10730.44 黄褐色	赤い土

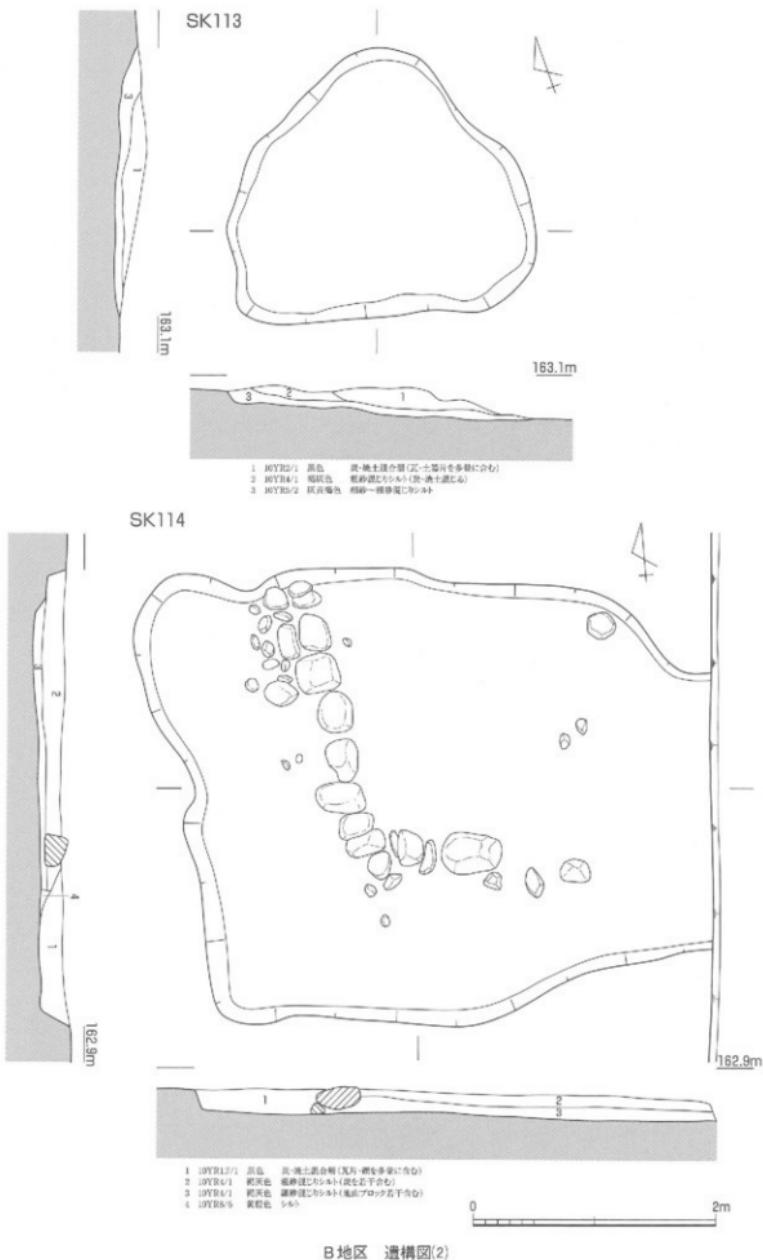


A地区 遺構図(1)

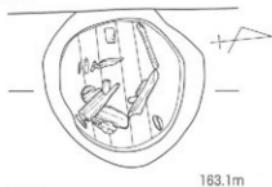
図版3



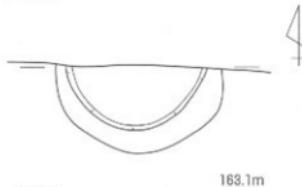




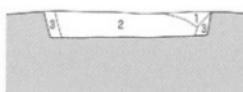
SK116



SK117

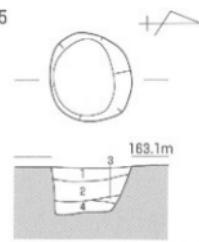


- 1 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト(礁岩含む)
2 IOYR7/6 明赤褐色 シルト(礁岩ブロック)
3 IOYR6/1 黄褐色 縦の張りシルト
4 IOYR5/1 黄褐色 シルト(切妻面礁岩ブロック含む)



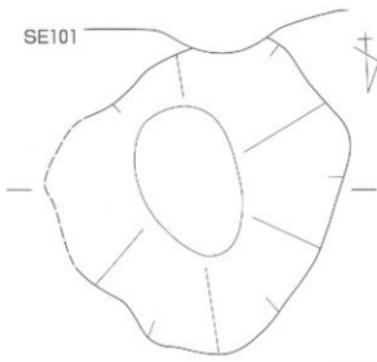
- 1 IOYR17/1 黒色 斜め張りシルト
2 IOYR17/1 黒色 桃土透じし網目
3 IOYR8/2 成赤褐色 地下ブロック張りシルト

SK115

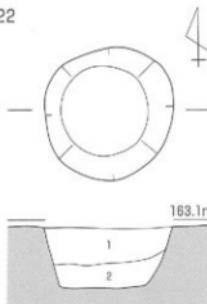


- 1 IOYR5/1 黄褐色 斜め張り
2 IOYR4/1 黄褐色 斜め張りシルト
3 IOYR7/6 可変褐色 斜め張り(礁岩ブロック)
4 IOYR4/1 黄褐色 斜め張りシルト

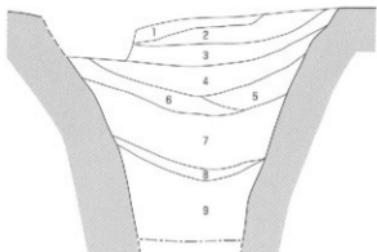
SE101



SK122



- 1 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト
2 IOYR4/1 黄褐色 斜め張りシルト(中礁含む)



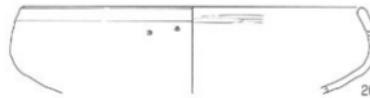
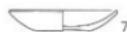
- 1 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト(礁岩ブロック若干含む)
2 IOYR7/6 黄褐色 斜め張りシルト(礁岩ブロック多量に含む)
3 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト
4 IOYR5/2 黄褐色 斜め張りシルト(礁岩含む)
5 IOYR2/1 黑褐色 斜め張りシルト
6 IOYR2/1 黄褐色 シルト質粗砂
7 IOYR2/1 黄褐色 砂質粗砂
8 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト
9 IOYR5/1 黄褐色 斜め張りシルト(礁岩若干含む)

2m

B地区 遺構図(3)

図版7

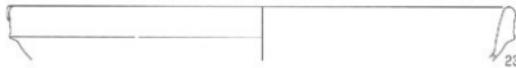
A地区 SD101



21



22



23



24

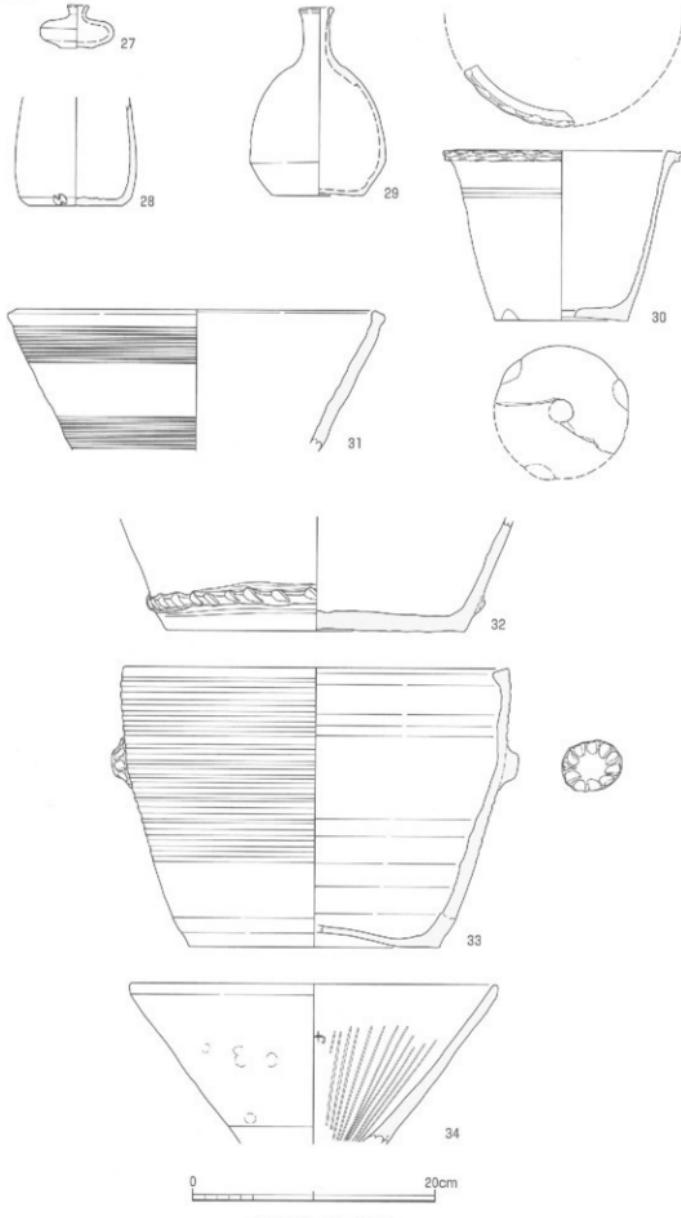


25



出土遺物1 (陶磁器1)

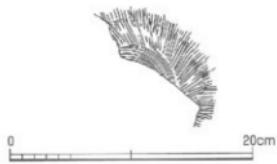
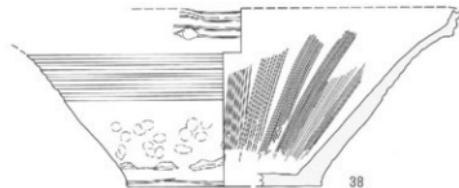
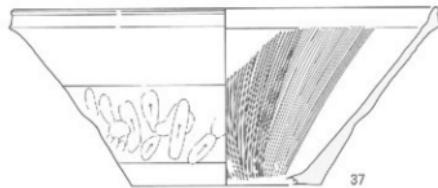
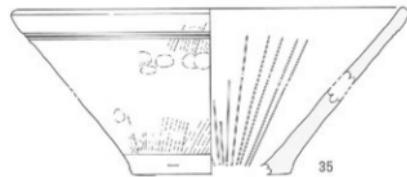
A地区 SD101



出土遺物2（陶磁器2）

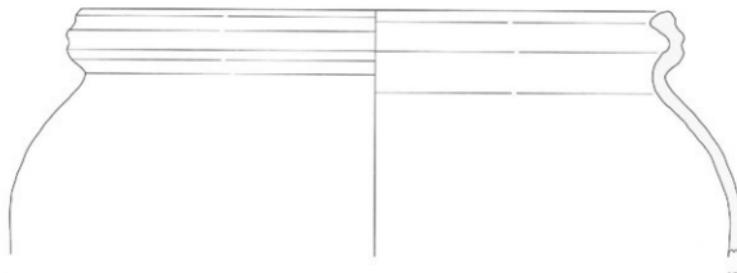
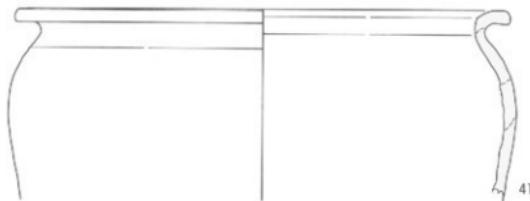
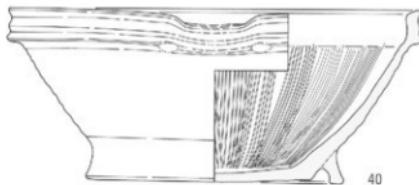
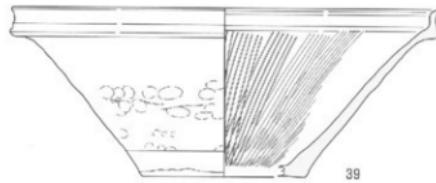
図版9

A地区 SD101



出土遺物3 (陶磁器3)

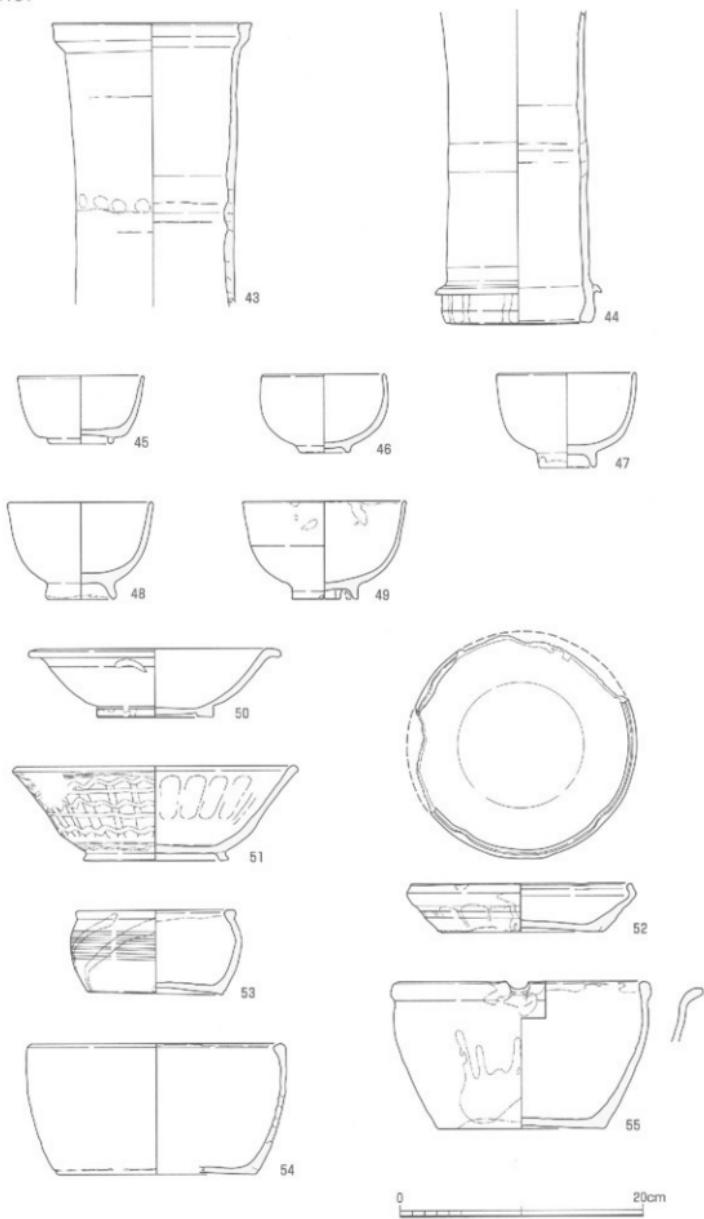
A地区 SD101



出土遺物4（陶磁器4）

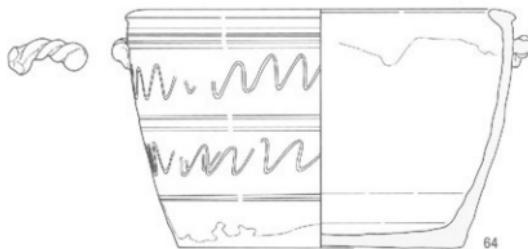
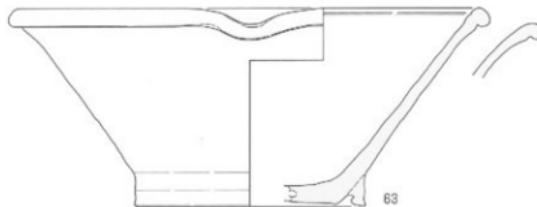
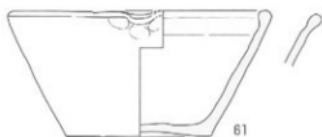
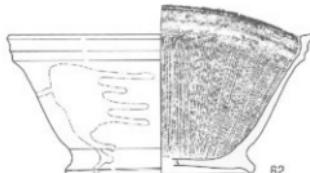
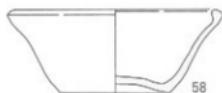
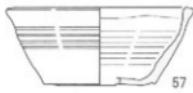
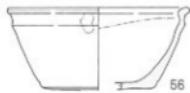
図版11

A地区 SD101



出土遺物5 (陶磁器5)

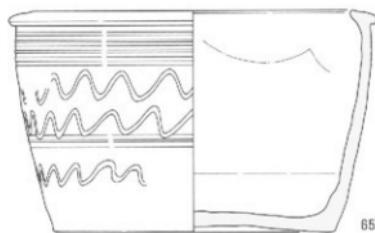
A地区 SD101



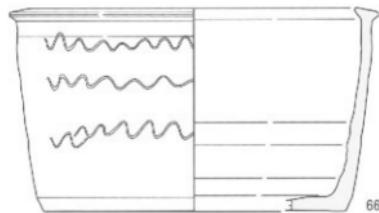
出土遺物6（陶磁器6）

図版13

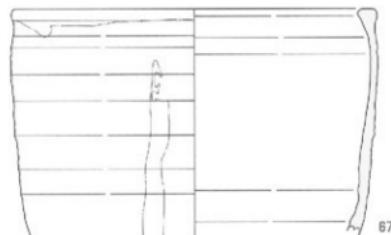
A地区 SD101



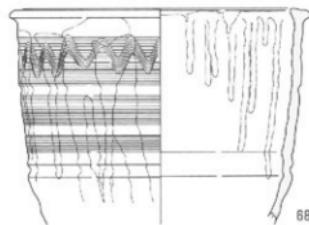
65



66



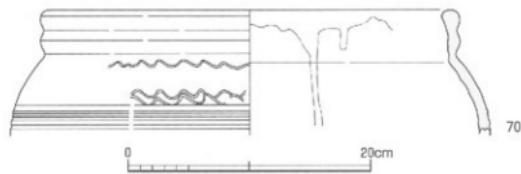
67



68



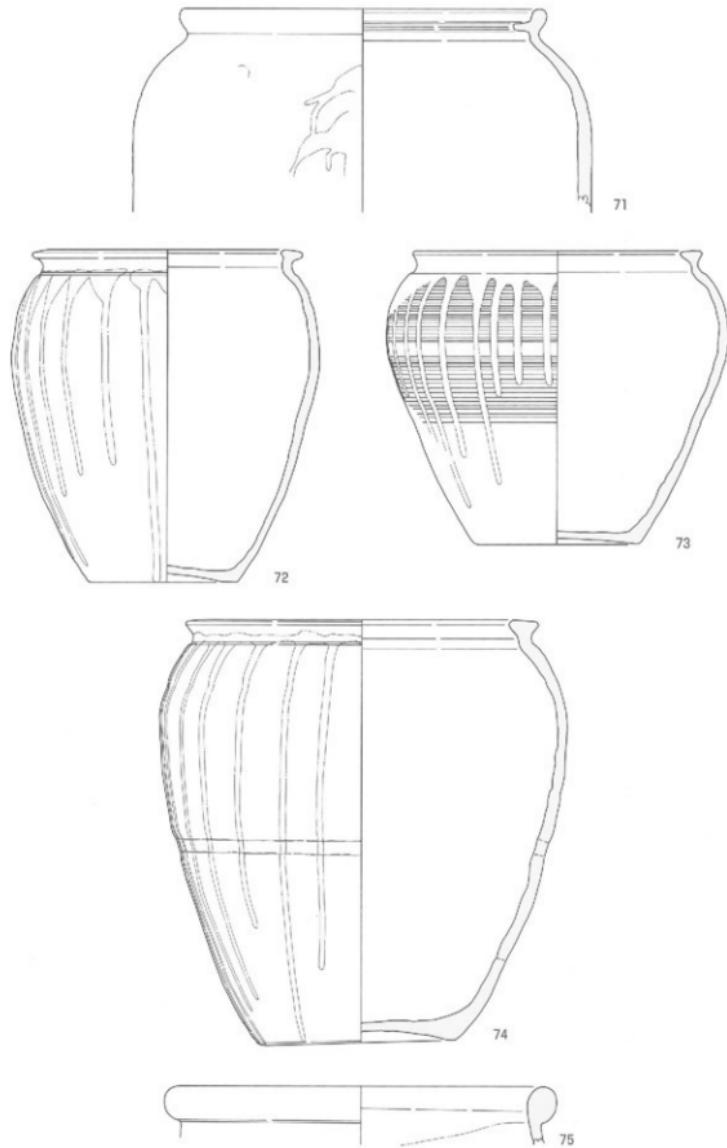
69



20cm

出土遺物7 (陶磁器7)

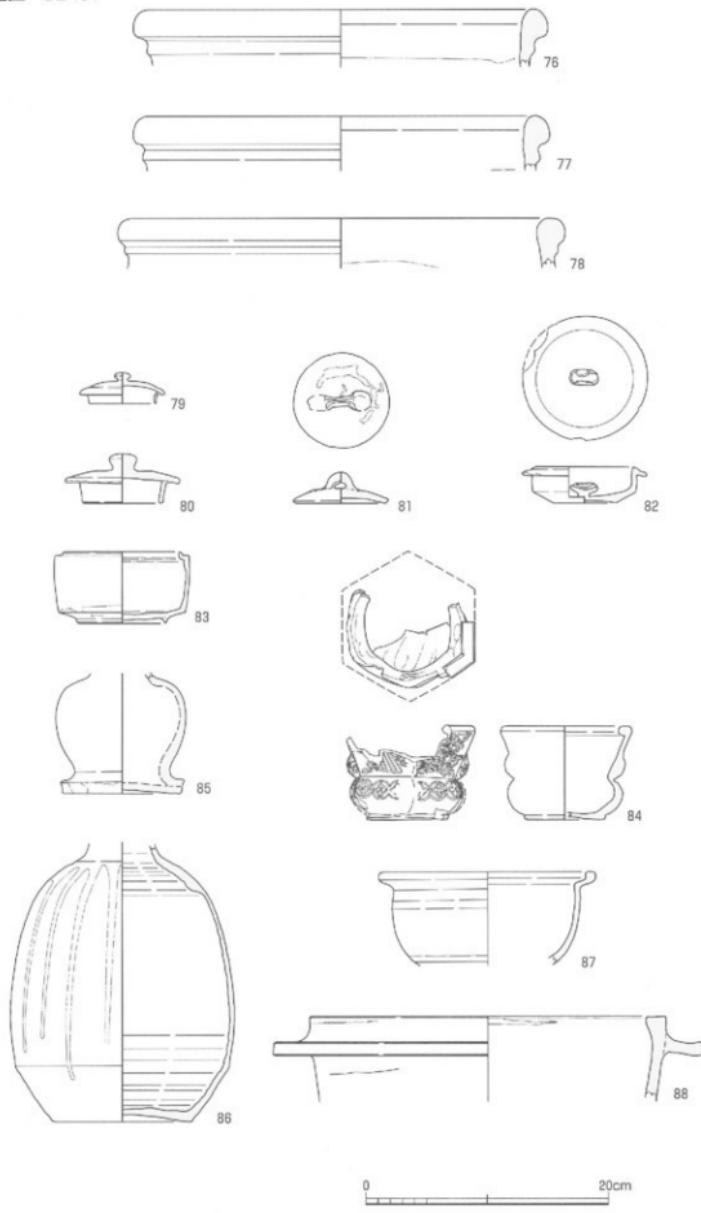
A地区 SD101



出土遺物8 (陶磁器8)

図版15

A地区 SD101

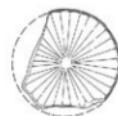


出土遺物9 (陶磁器9)

A地区 SD101



91

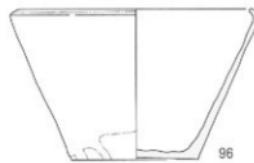


92

A地区 P03



A地区 SK101

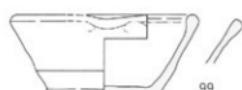


96

A地区 SK102

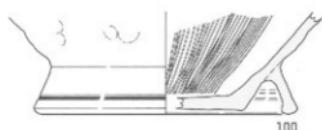


98



99

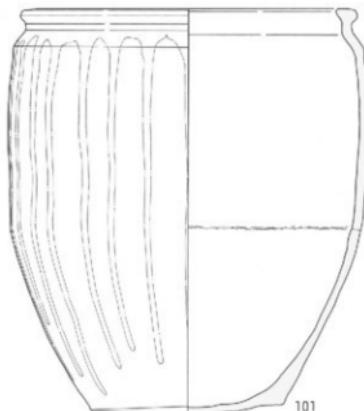
A地区 SK104



100



A地区 SK107



101

A地区 SE102



102



出土遺物10（陶磁器10）

図版17

A地区 SK201



103



104

A地区 SE201



105



106



107

B地区 SK113



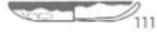
108



109



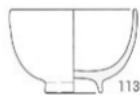
110



111



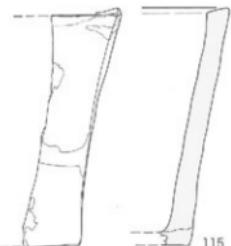
112



113



114

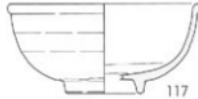


115

B地区 SK114



116



117

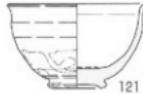


118

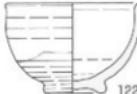
B地区 SD102



120



121

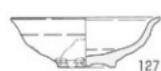
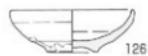
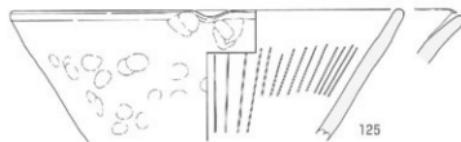


122



出土遺物11 (陶磁器11)

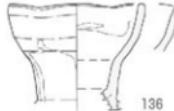
B地区 SE101



A地区 包含層

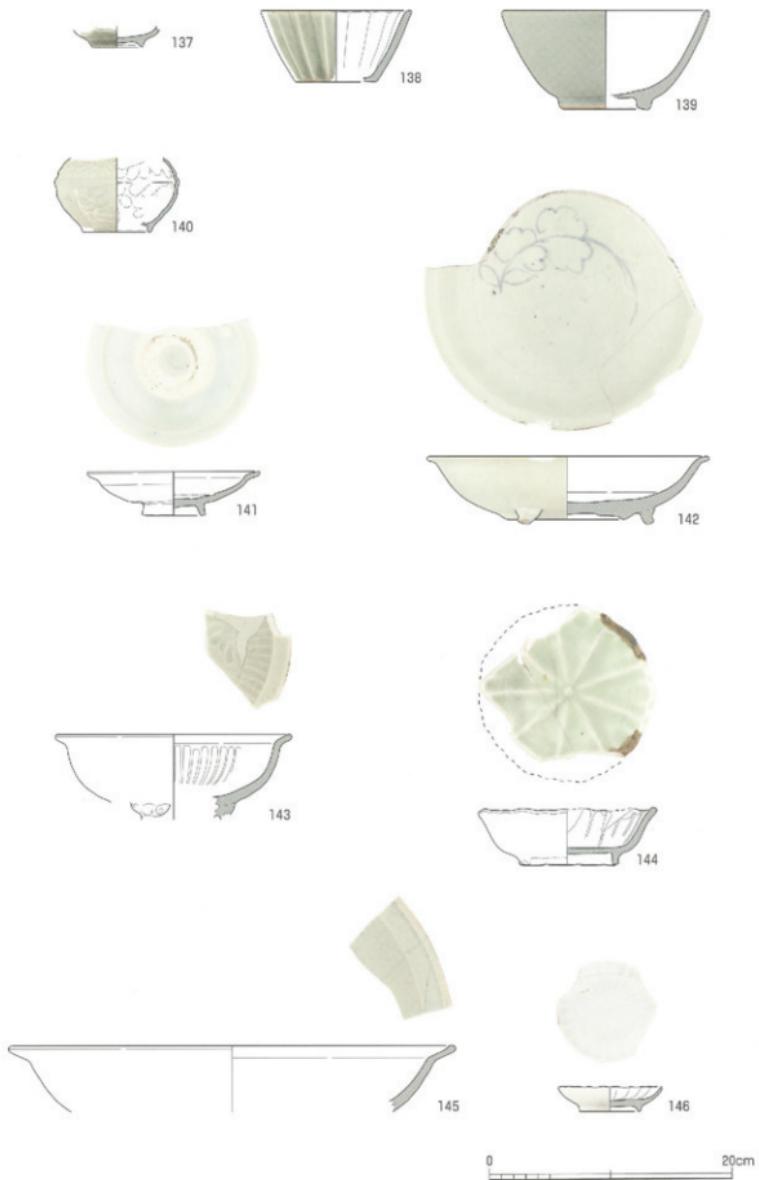


B地区 包含層



出土遺物12（陶磁器12）

図版19



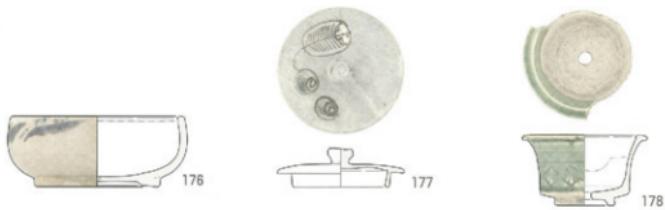
出土遺物13 (陶磁器13)



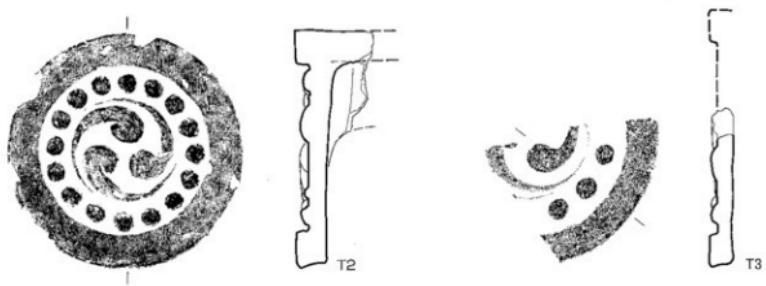
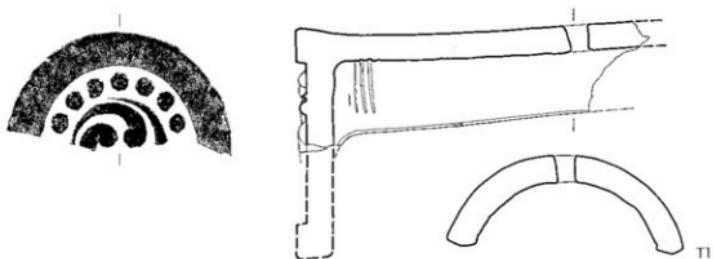
出土遺物14（陶磁器14）



出土遺物15 (陶磁器15)

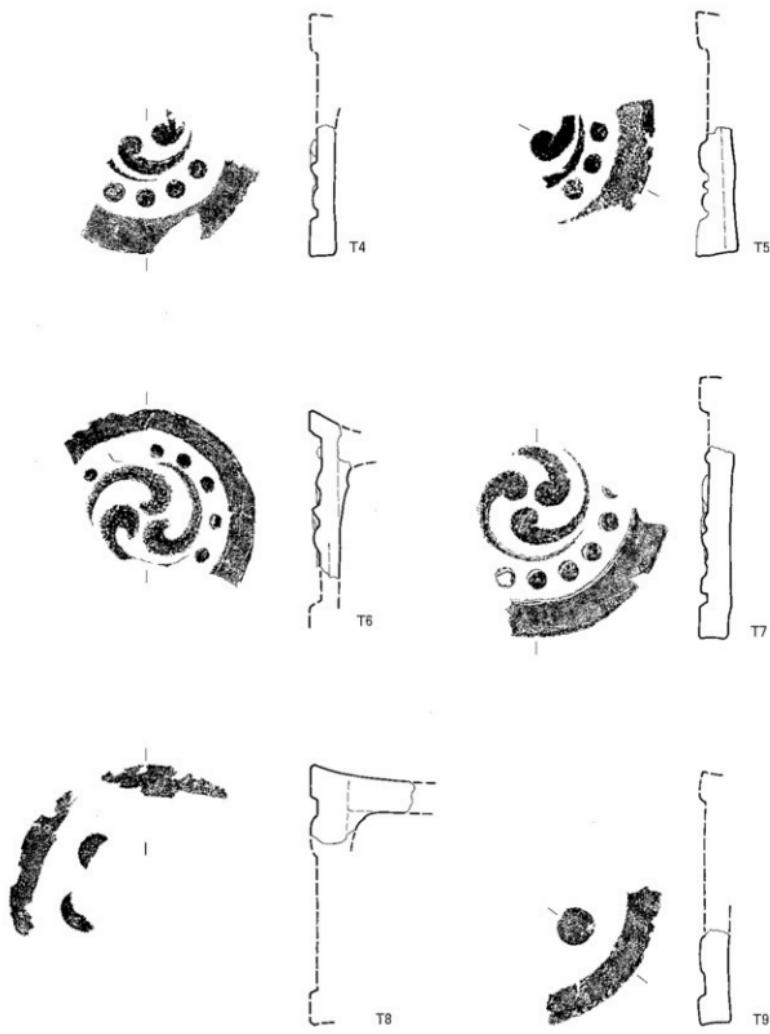


出土遺物16（陶磁器16）



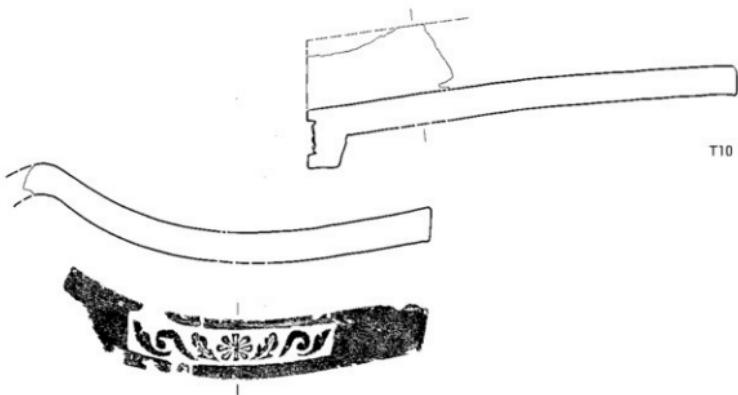
0 20cm

出土遺物17（軒丸瓦1）

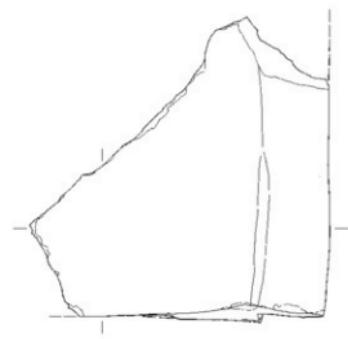


0 20cm

出土遺物18 (軒丸瓦2)



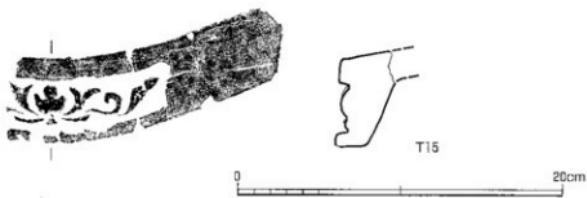
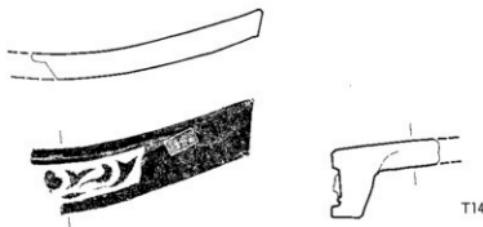
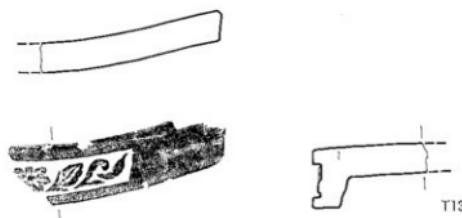
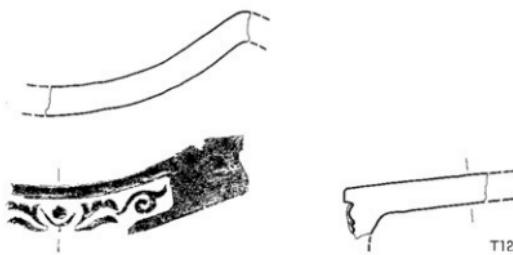
T10



T11

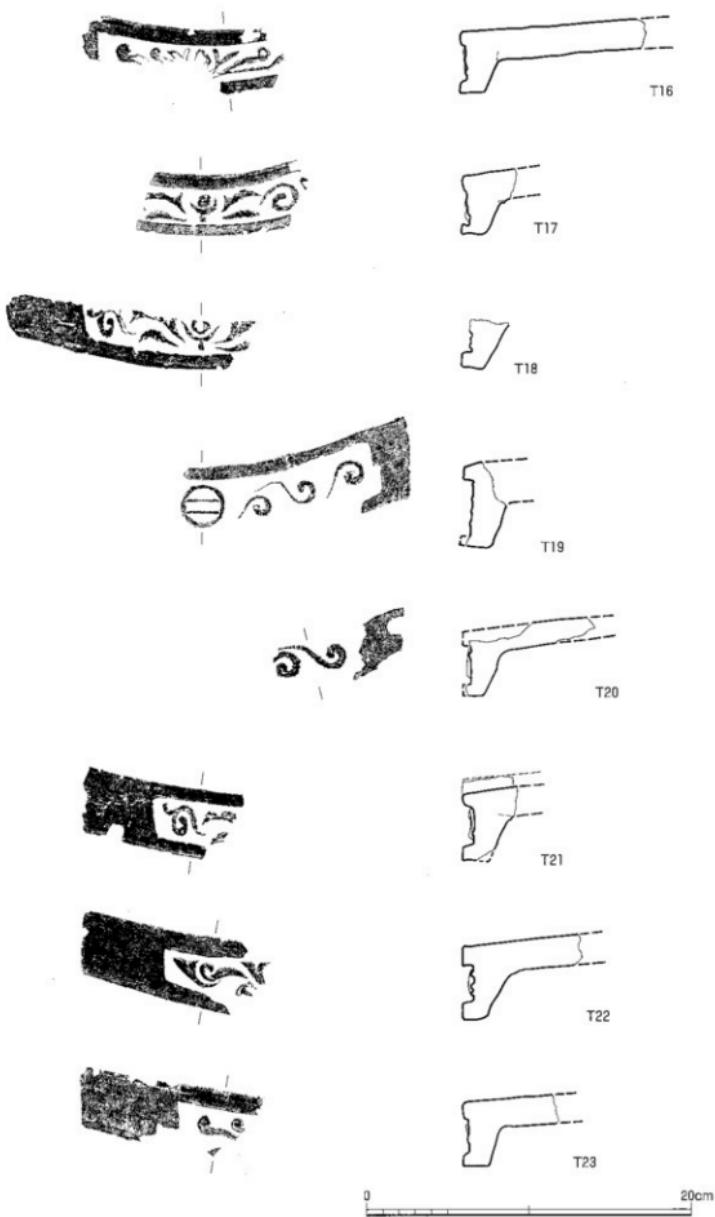


出土遺物19（軒棟瓦・軒平瓦1）

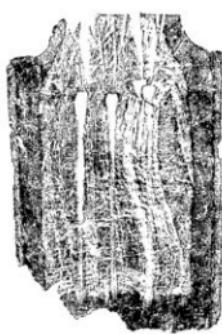
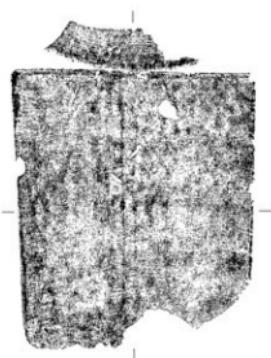


0 20cm

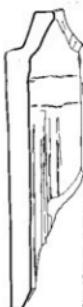
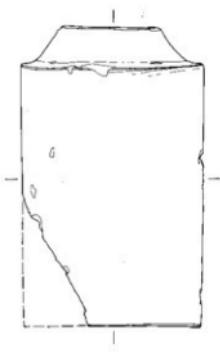
出土遺物20（軒檻瓦・軒平瓦2）



出土遺物21 (軒棟瓦・軒平瓦3)



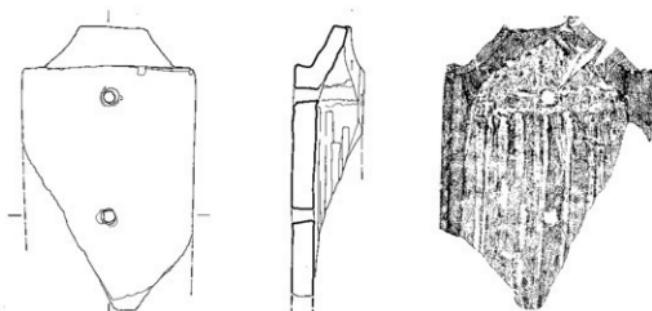
T24



T25



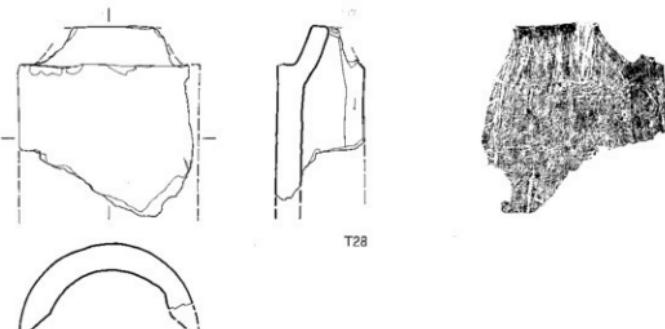
出土遺物22（丸瓦1）



T26



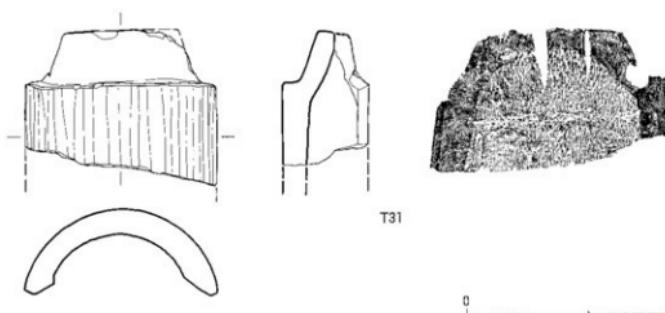
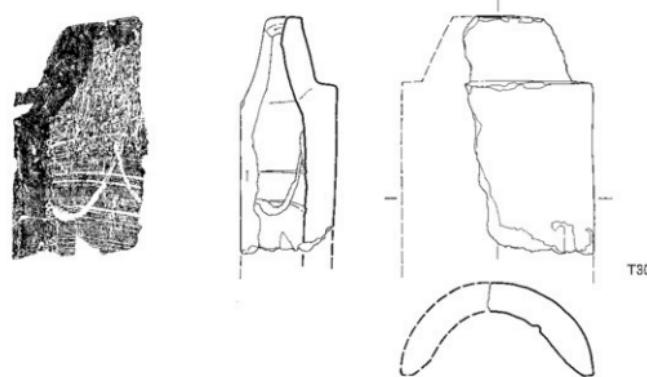
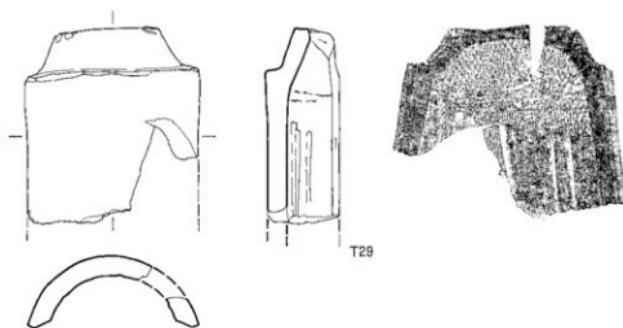
T27



T28



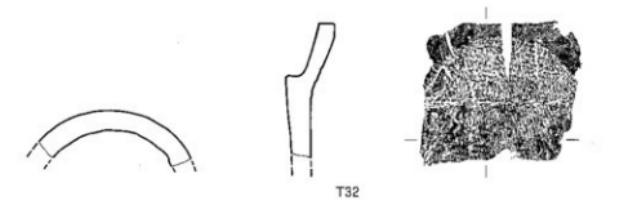
出土遺物23（丸瓦2）



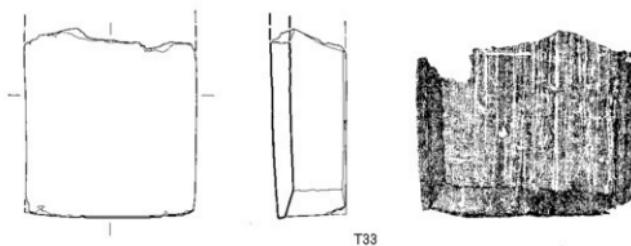
0 20cm

出土遺物24（丸瓦3）

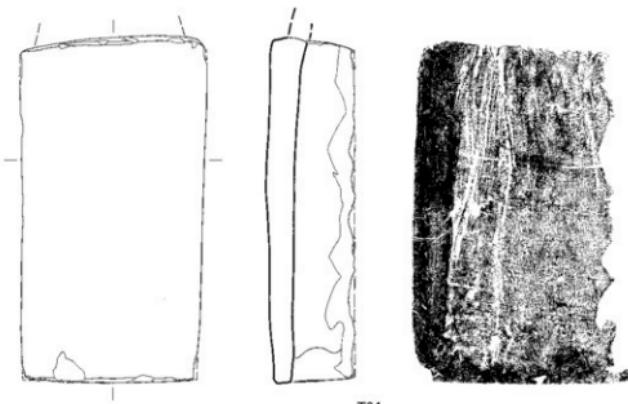
図版31



T32



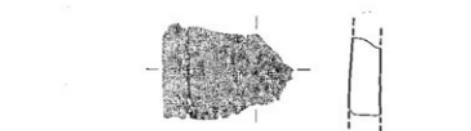
T33



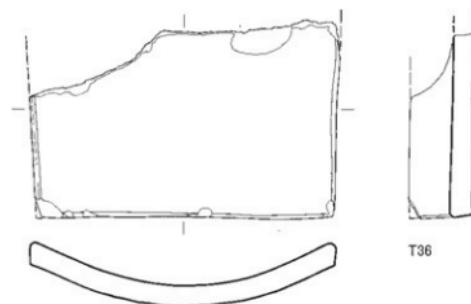
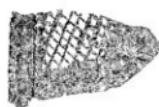
T34



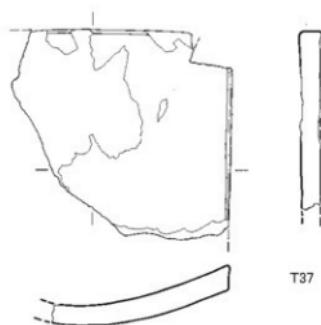
出土遺物25（丸瓦4）



T35



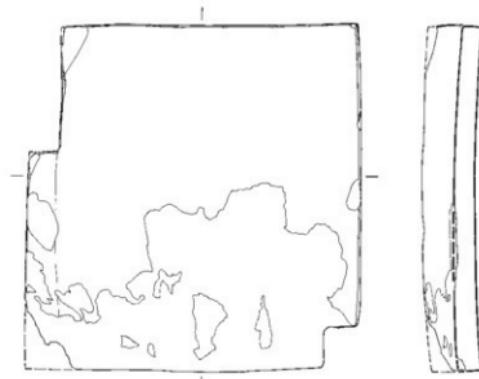
T36



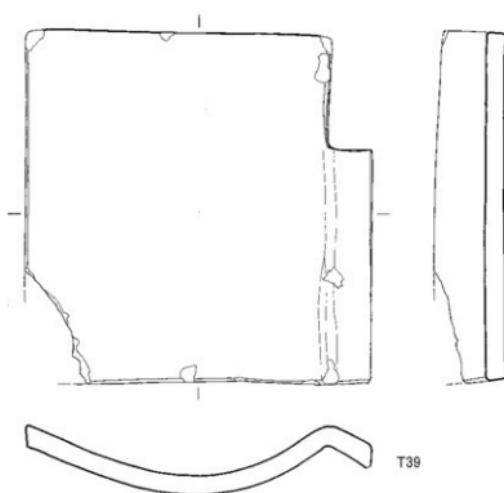
T37



出土遺物26 (棟瓦・平瓦1)



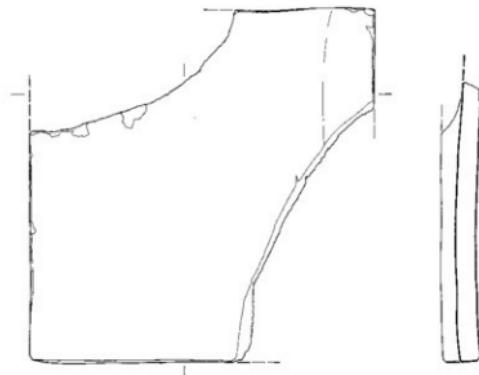
T38



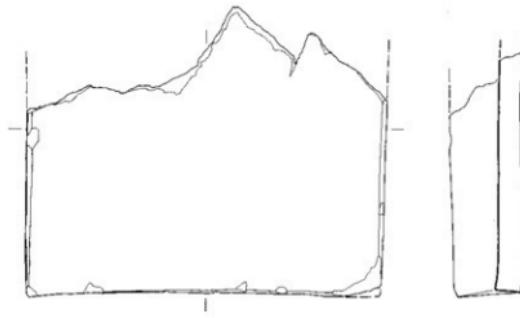
T39



出土遺物27 (棟瓦・平瓦2)



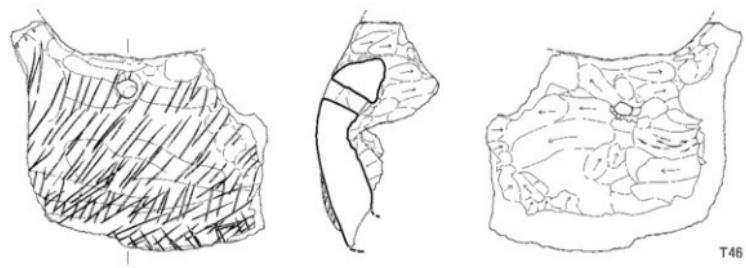
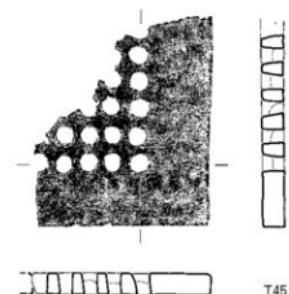
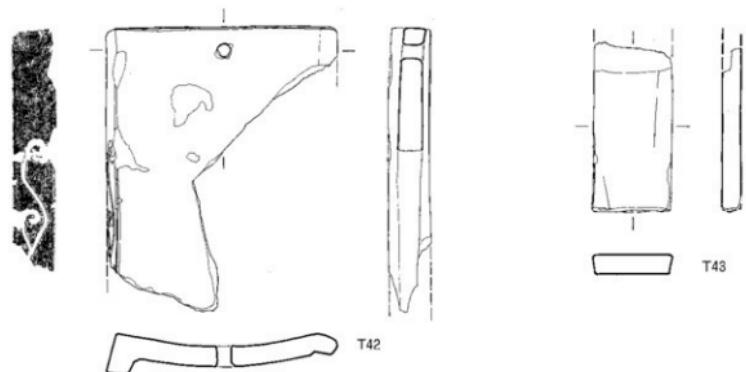
T40



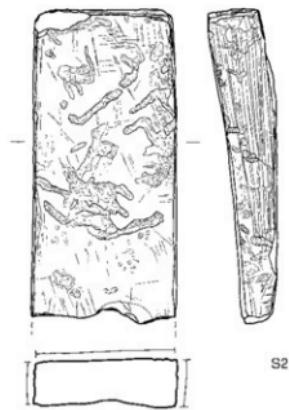
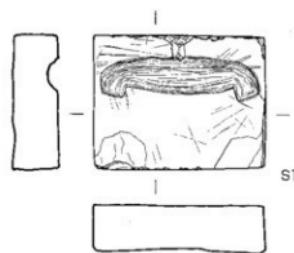
T41



出土遺物28 (棟瓦・平瓦3)

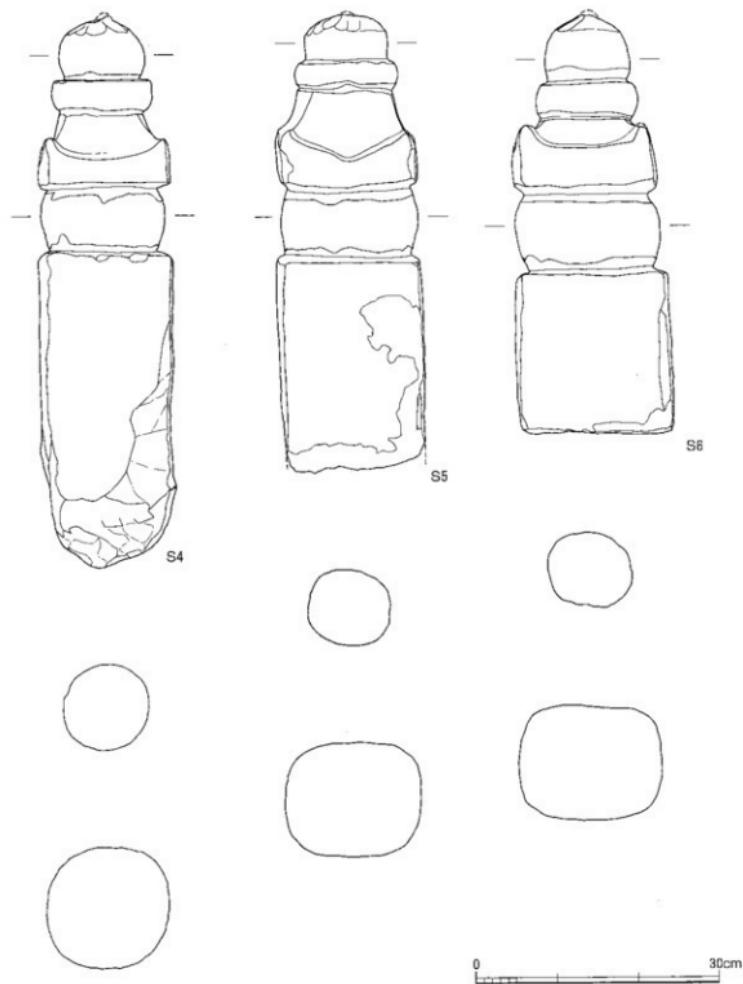


出土遺物29 (道具瓦・他)

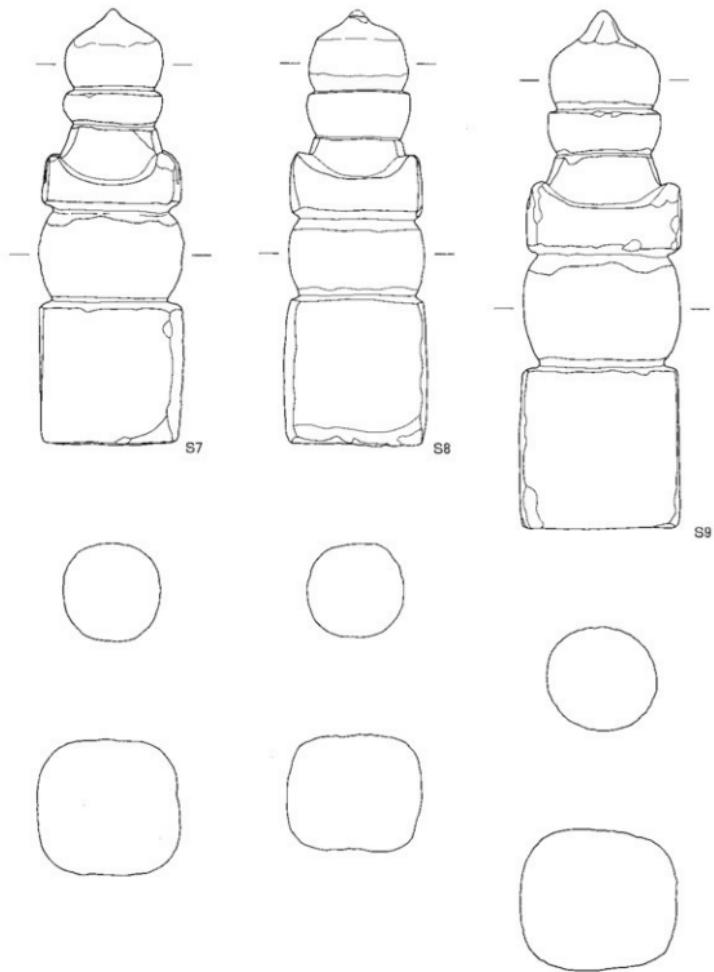


出土遺物30（石器）

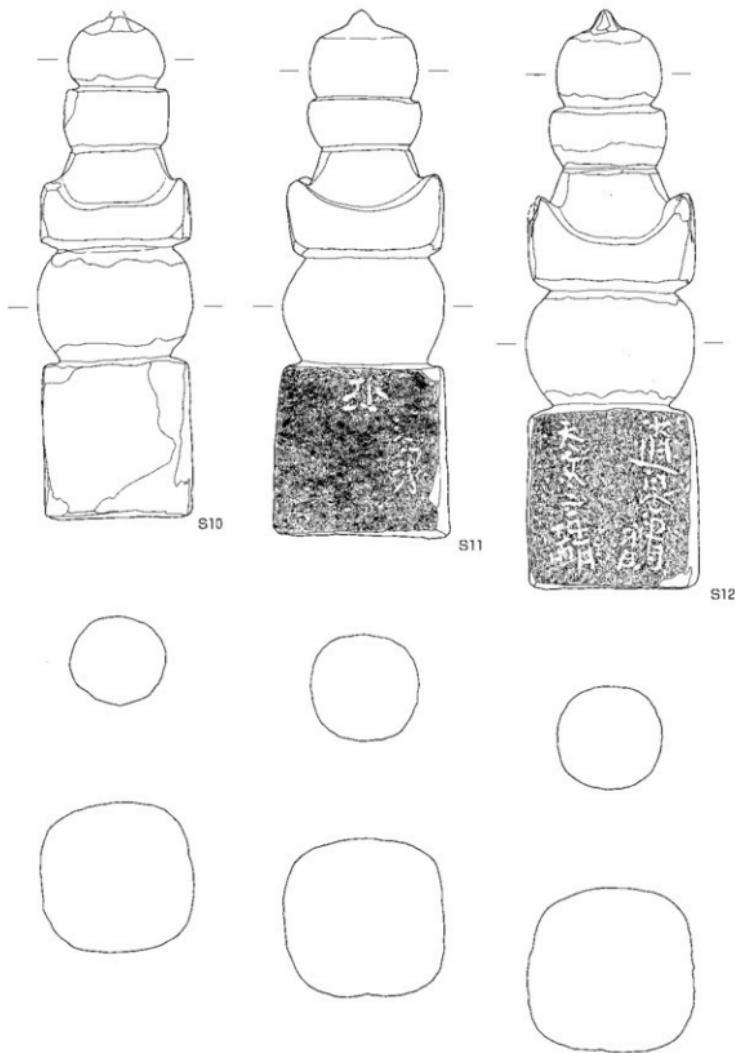
図版37



出土遺物31（石製品1）

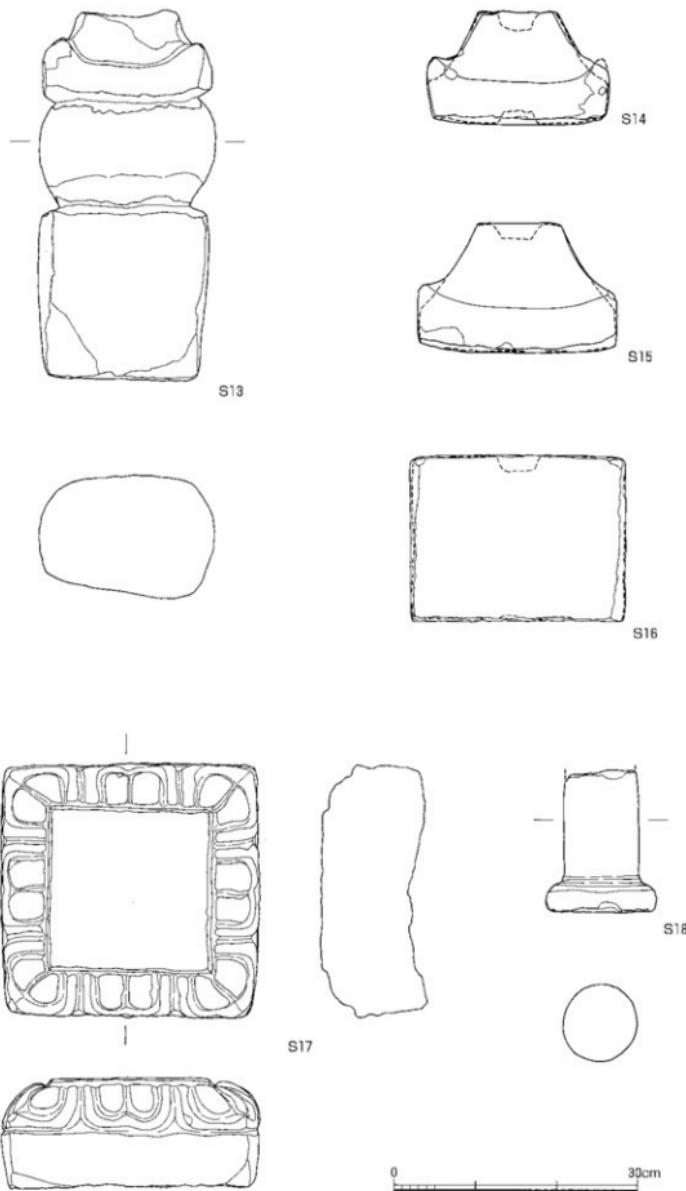


0 30cm

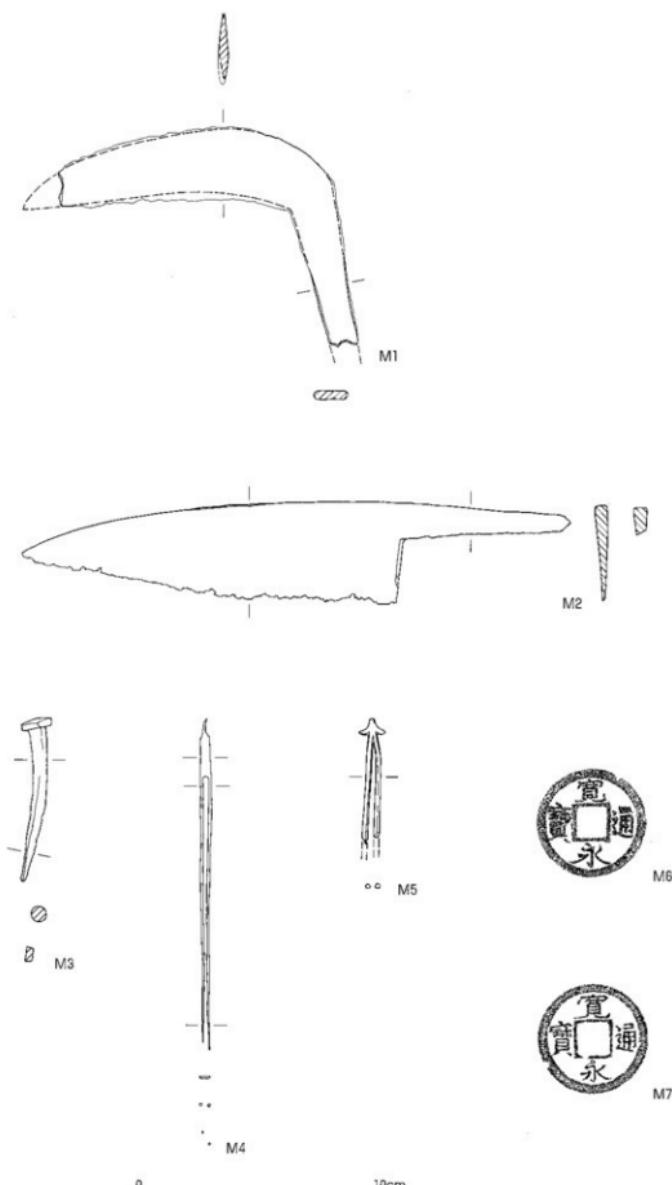


0 30cm

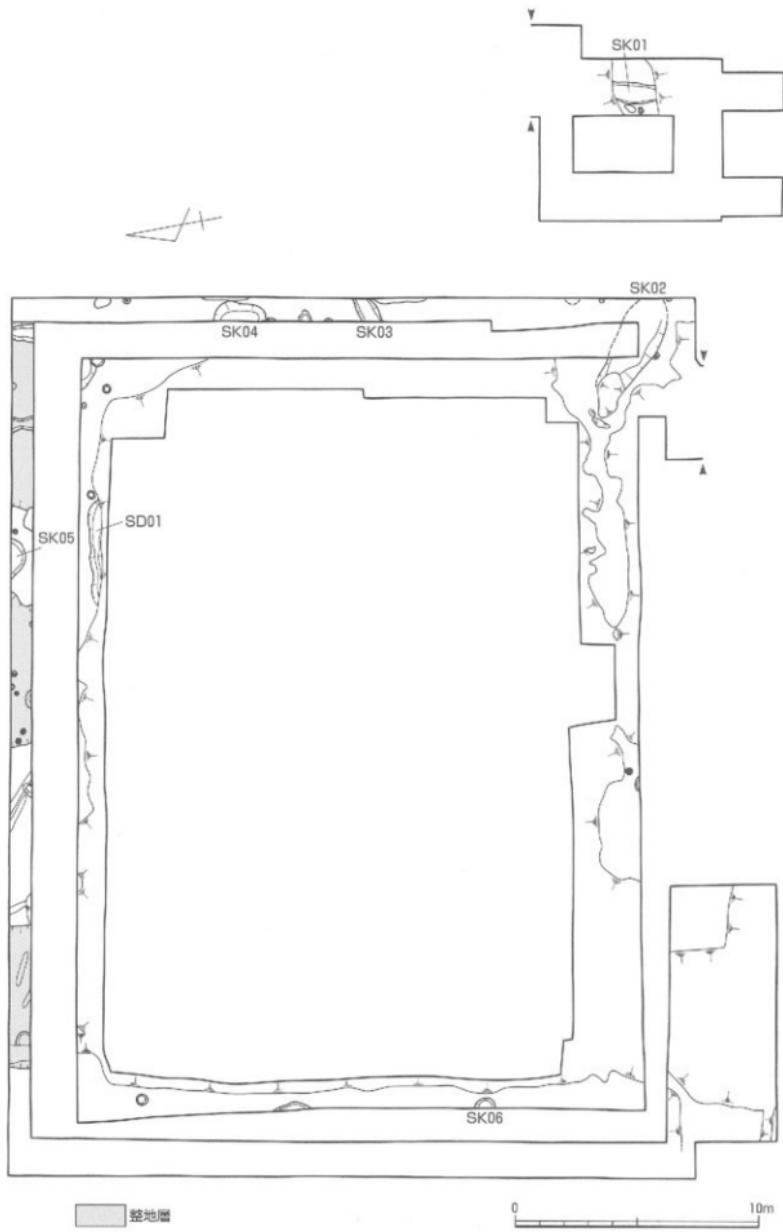
出土遺物33（石製品3）



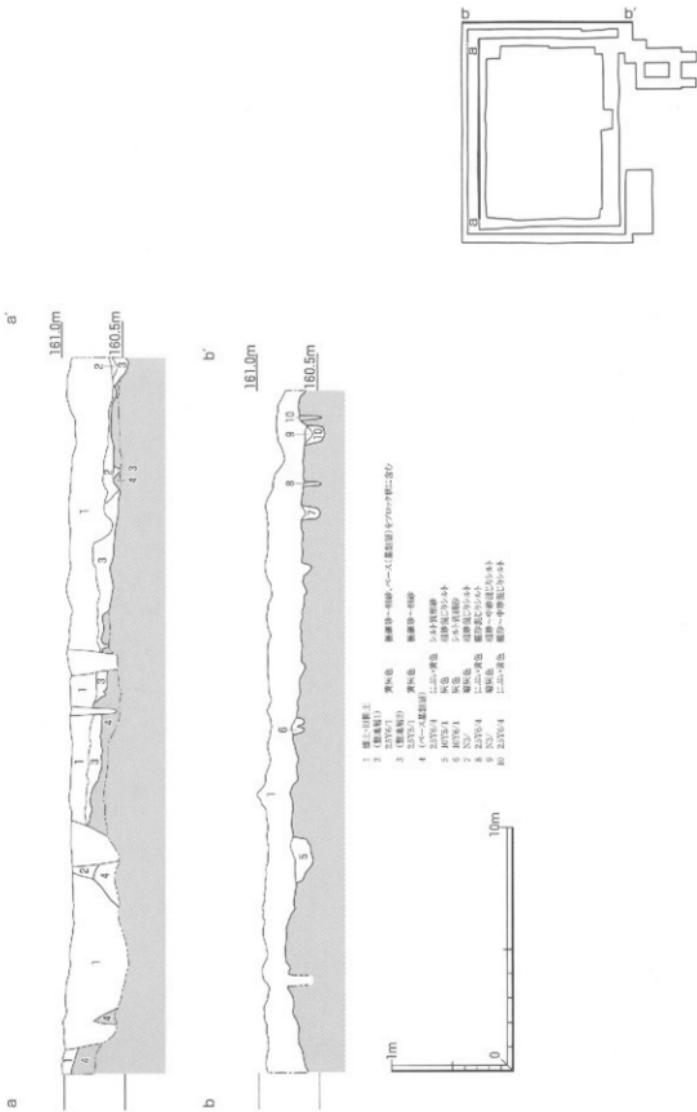
出土遺物34（石製品4）



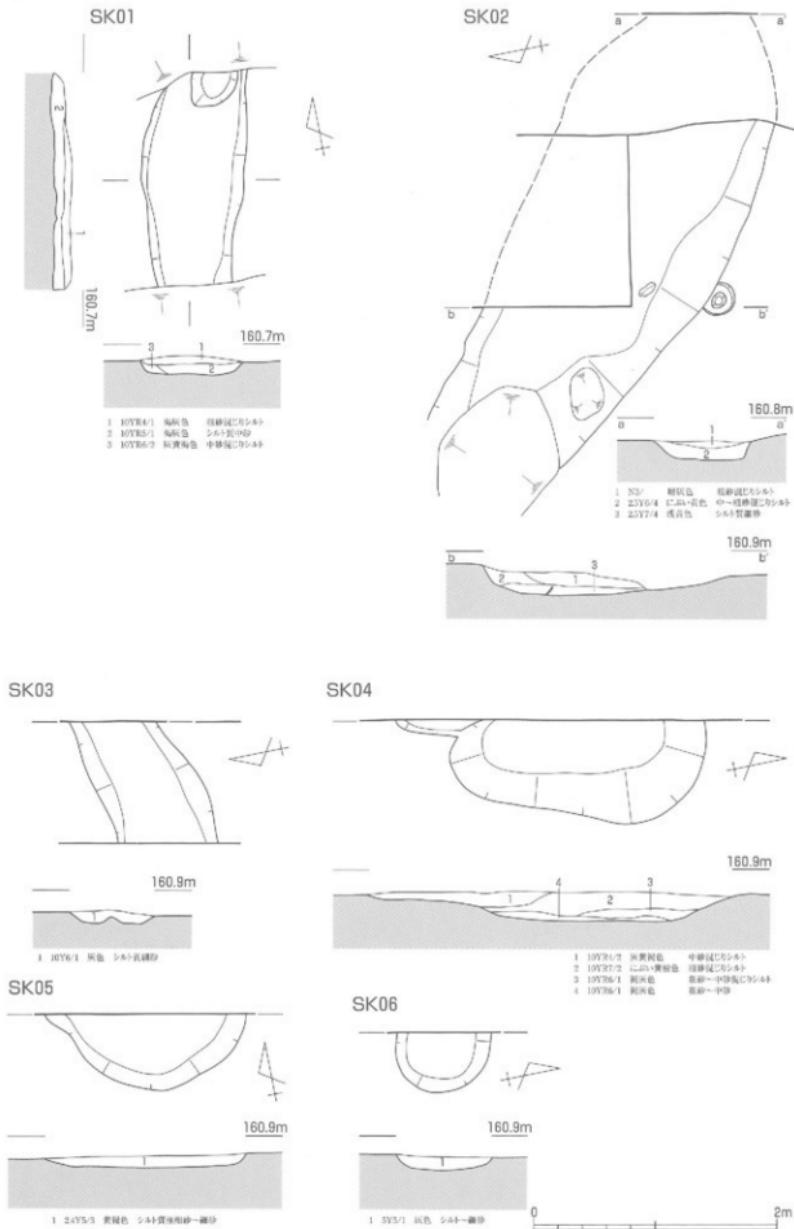
出土遺物35（金属製品）



平成17年度 調査区平面図



平成17年度 調査区北壁・東壁 土層断面図



平成17年度 土坑 平面図・土層断面図



186



187



188



190



189



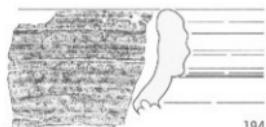
191



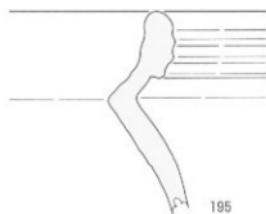
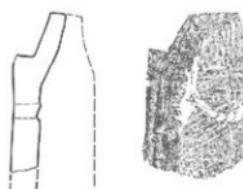
192



193



194

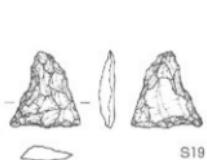


195

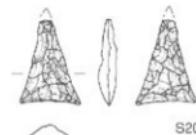


T47

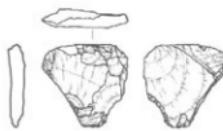
0 20cm



S19



S20



S21

0 10cm

写 真 図 版

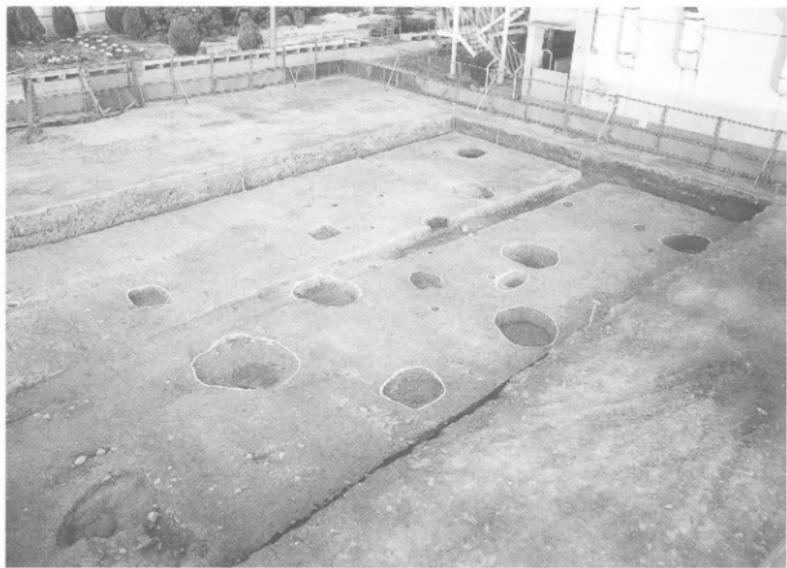
写真図版1



調査区全景 西から



調査区全景 東から



A地区全景 南西から



B地区全景 北から

写真図版3



A地区 SD101・SE102 全景 南東から



A地区 SE102 西から

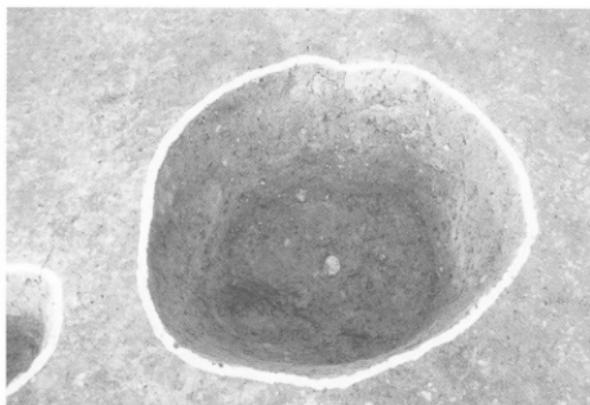


A地区 SD101 断面 南から(1)



A地区 SD101 断面 南から(2)

写真図版5



A 地区 SK101 南から



A 地区 SK102 東から



A 地区 SK104 南から



A地区 SK107 南から



A地区 SK119 南から



A地区 SE201 西から

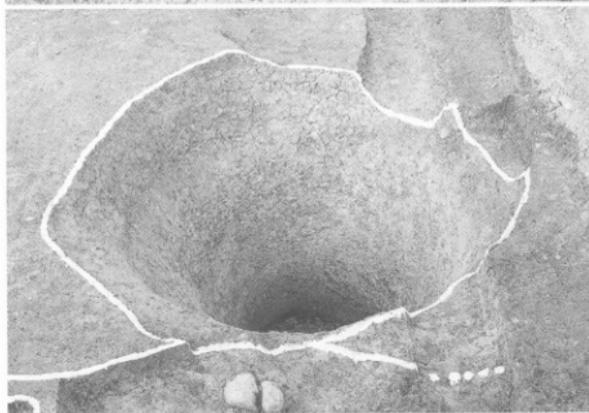
写真図版7



B地区 SK114 南東から



B地区 SK116 東から

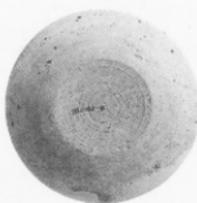


B地区 SE101 南から



3

4



6

7



8

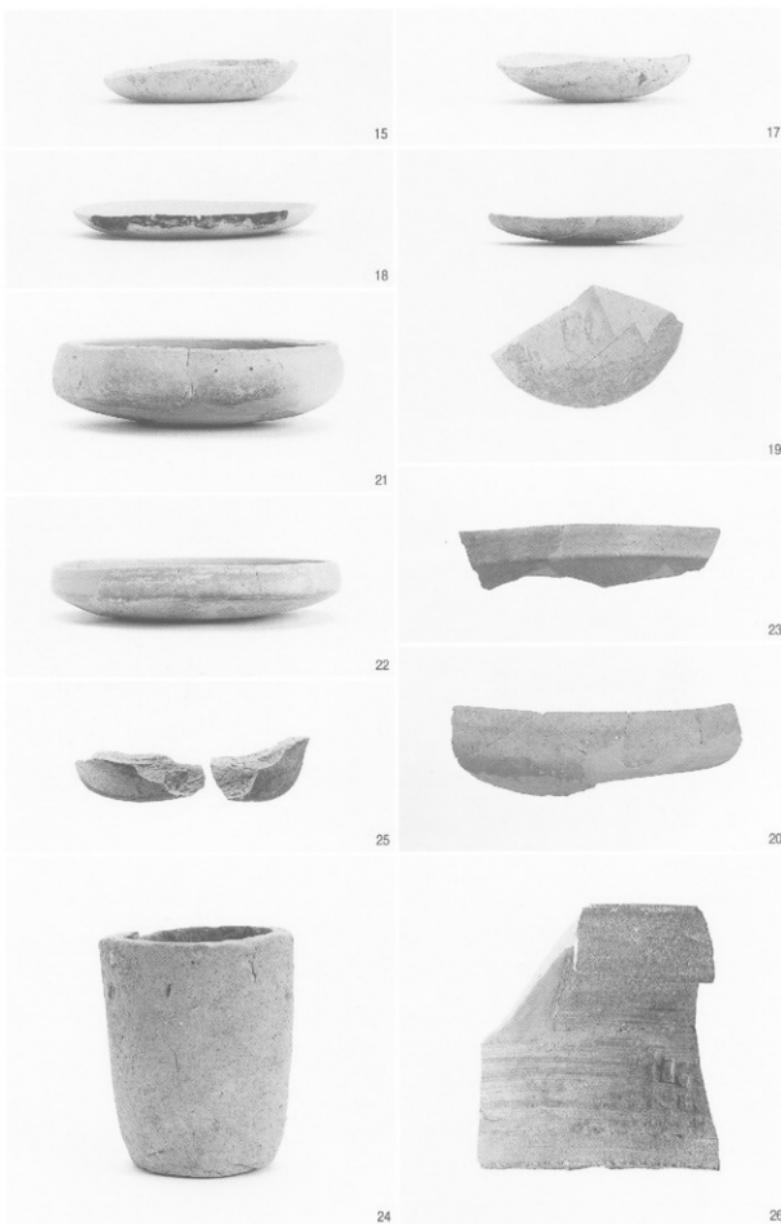
9



12

14

写真図版9



A 地区 SD101 土師器・須恵器



27



30



28



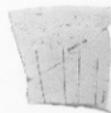
32



29



33



35



34



36



40



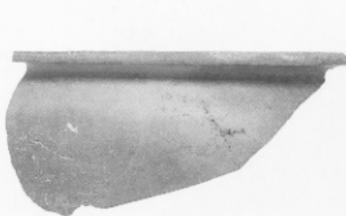
38



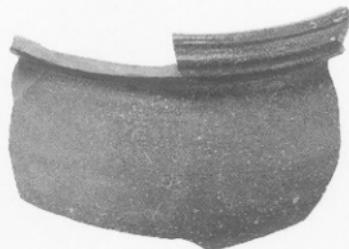
37



39



41



42



43



44



45



46



47



48



49



51



50



53



54



52



55



56



57



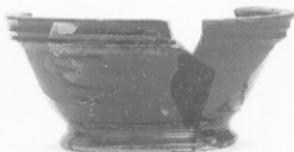
58



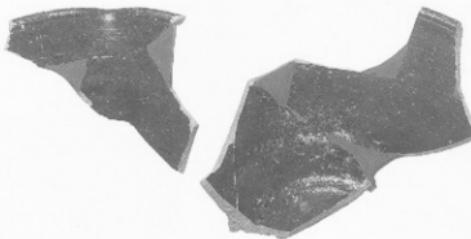
59



60



62



63



61



64



66



67

A 地区 SD101 施釉陶器



70



31



68



69



72



73

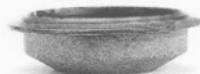


74



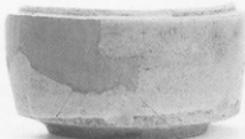
79

80



82

81



83

87



88

91



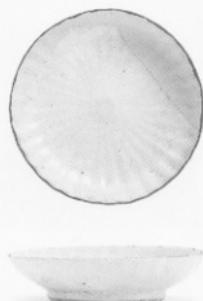
84



85



86



92



97



89



90



96



99



101



103



104



105



107



117



113



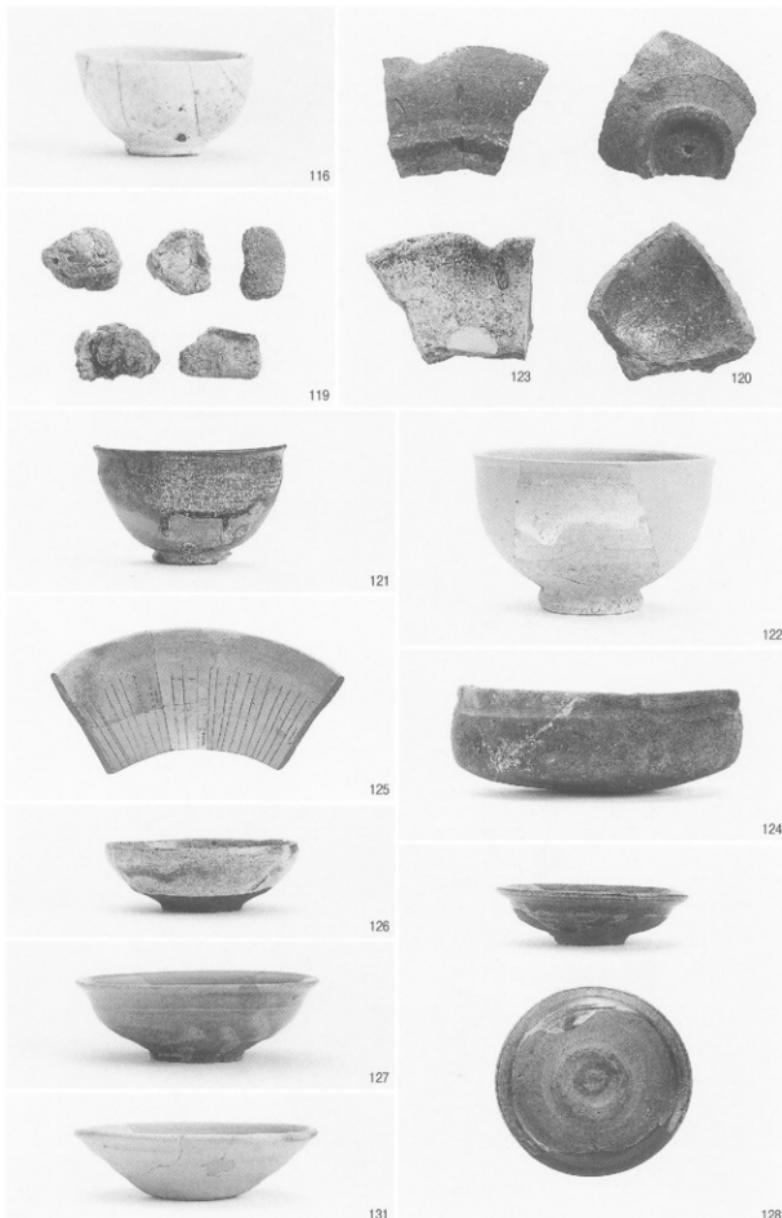
115



114



118



陶磁器



136



146



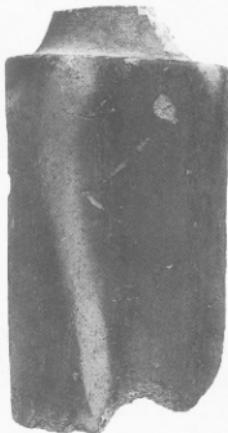
T6



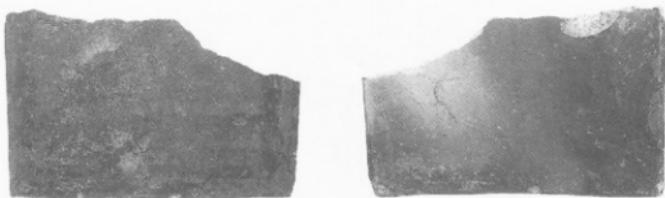
T10



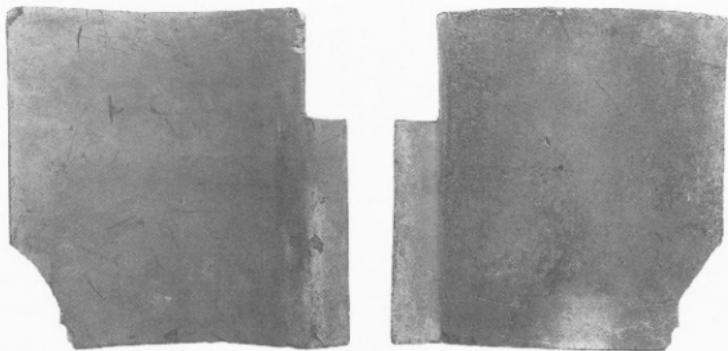
T19



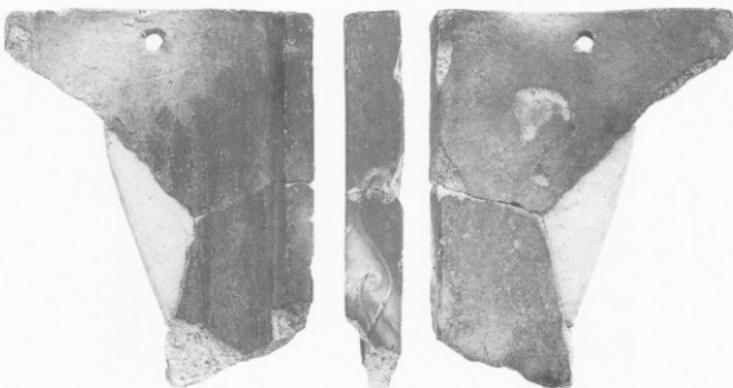
T24



T36



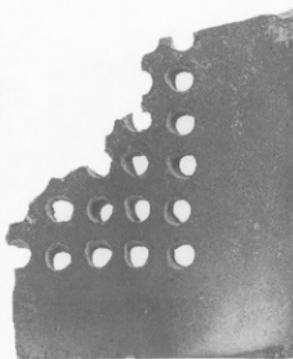
T39



T42



T38



T45



T43



T46

瓦

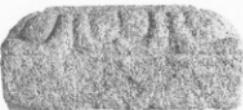
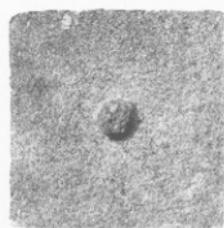


S1

S2



S3



S16

S17

S18

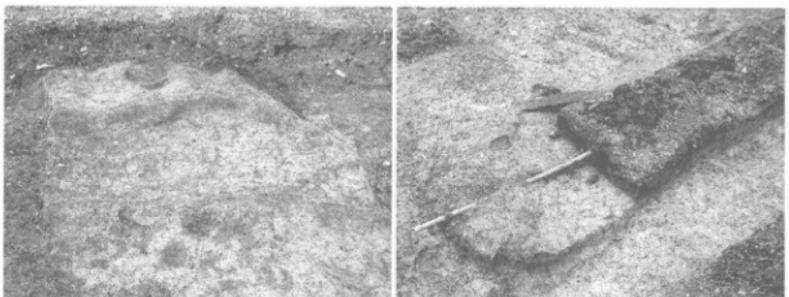




調査地全景（南西から）



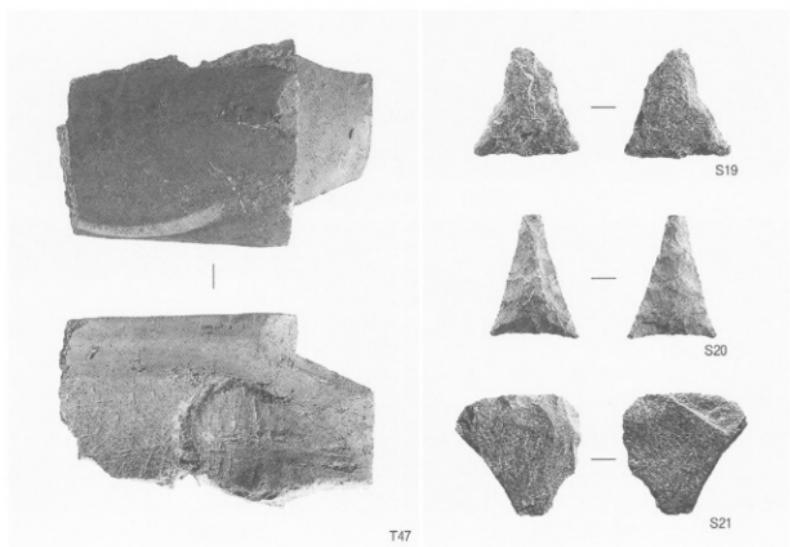
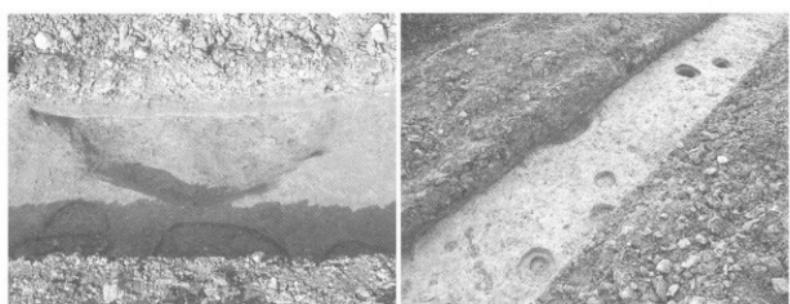
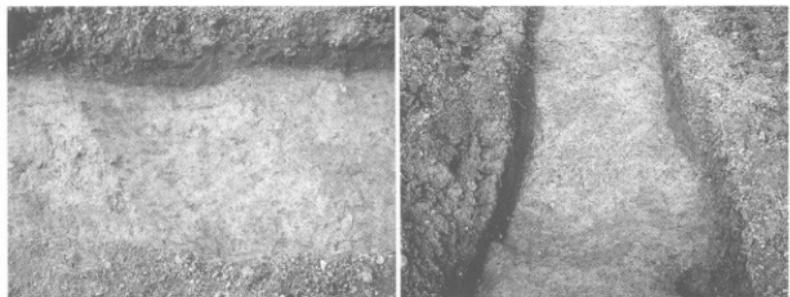
整地層1・2土層断面（南東から）



SK01（東から）

SK02（南東から）

平成17年度 遺構



兵庫県文化財調査報告 第356号

三田城跡Ⅱ

兵庫県立有馬高等学校校舎建設工事等に伴う発掘調査報告書

2009(平成21)年3月30日 発行

編集 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大字500番地
TEL 079-437-5589

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0053 兵庫県西脇市和布町39
